

ISSN 1340-461X

附属天王寺中・高
研 究 集 錄
第 56 集 (平成 25 年度)

*Bulletin of the
Tennoji Junior & Senior High School
Attached to Osaka Kyoiku University
No.56
(March,2014)*

大阪教育大学附属天王寺中学校
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

研究集録 執筆規定

1. 本誌は、研究集録という。
本誌の英語名は、Bulletin of the Tennoji Junior & Senior High School Attached to Osaka Kyoiku Universityとする。
2. 本誌の執筆資格者は、附属天王寺中学校、および附属高等学校天王寺校舎の現役教員を原則とする。
3. 本誌は年刊とする。発行は毎年3月とし、執筆者には50部の別刷を提供する。
4. 本誌の原稿締切は毎年1月中旬とする。
5. 本誌の原稿は、40字×40行詰めどし、横書きのみとする。
英文論文の場合は、70字～80字×40行とする。第一頁は16行目から本文を書き始める。論文は25頁以内とする。
和文表題・執筆者→抄録→キーワードの順に書き、その後本文をはじめる。
和文論文の場合は、最終頁の次頁に、英文表題・執筆者・英文要約（さらにキーワードを付加してもよい）をつけることを原則とする（英文論文の場合は、和文表題・執筆者・和文要旨をつける）。
6. 本誌の内容は、まえがき・目次・論文・教科個人研究テーマ一覧・あとがきにより構成される。

まえがき

今日、大学を取り巻く環境は厳しさを増しています。とりわけ、国立大学の教育学部、教員養成大学においては、文部科学省からミッションの再定義という重い宿題が課され、大きな改革が求められています。また、教育学部、教員養成大学を基礎とする大学院は、教職大学院に比重がおかれる流れにあるようにも見受けられます。このような改革の流れは、教育の現場を踏まえた実践的な研究・教育を尊重・重視することを求めたものと考えられます。教員養成大学の付属校としての本校においても、そのような改革の流れを積極的に先取りした研究の蓄積が大切となってきます。

もちろん、研究と実践は二律背反の関係にあってはならず、とりわけ学校教育の発展に資する研究は、両者の密接な繋がりが重要になってくるものと考えています。例えば、日々の実践から派生する問題の背後にある課題を浮き彫りにするとともに、課題解決の方途について考察し、実践に返して確かめてみる。あるいは、理論的に導かれた仮説を授業他の実践を通して検証を試み、その結果を皆で共有する（さらに追試、検証する）等の研究の進め方が考えられます。いずれにしても、附属校の強みは、日常的に実践のフィールドが現前しており、問題意識を即、研究活動につなげができる点にあるものと考えています。

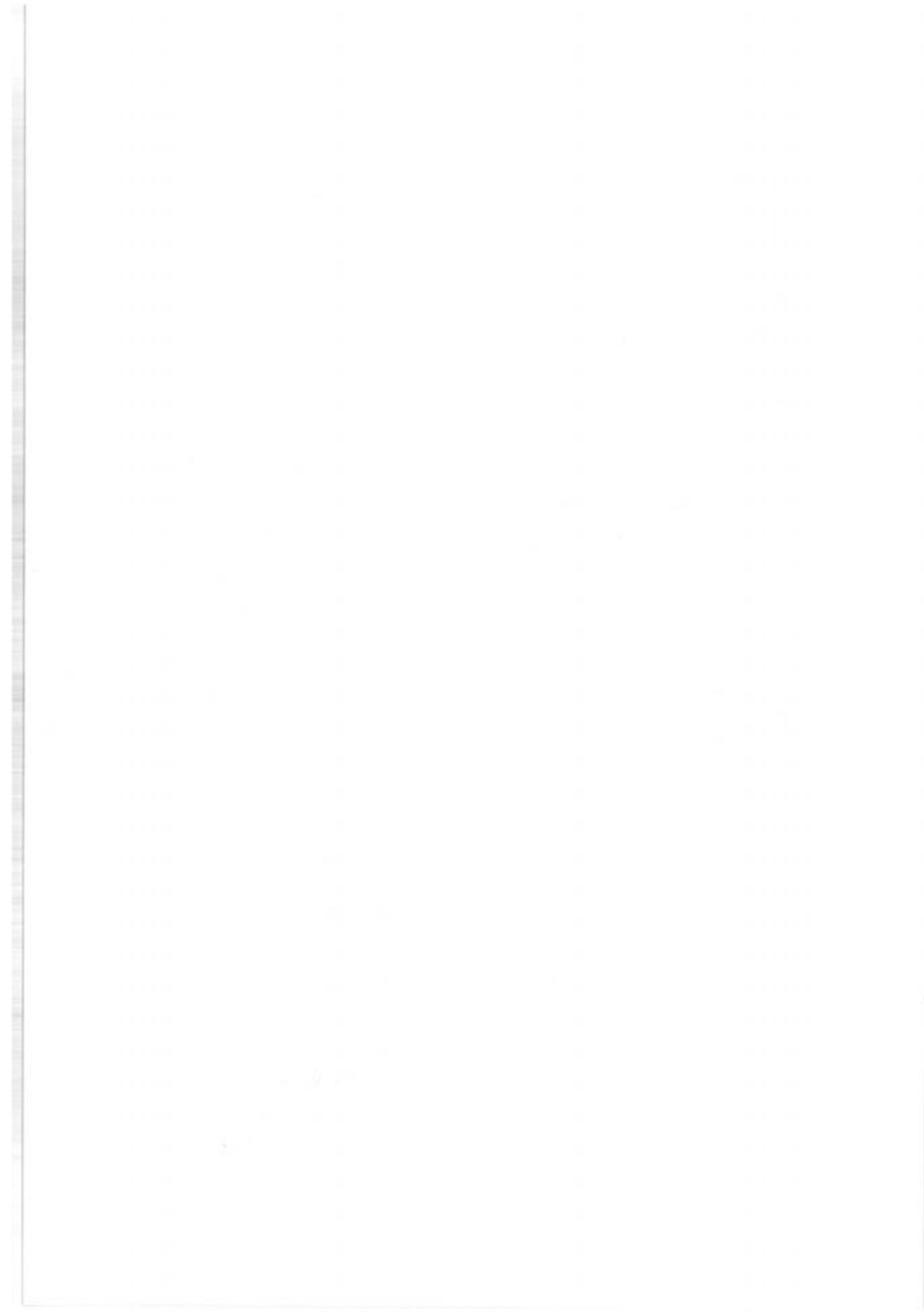
他方で、日々の授業づくりに苦心している我々教員にとって、授業をどのように計画し展開したのか、あるいは、生徒の学校生活における動機づけを高めるためにどのような手立てを講じたのか等の実践報告の有用性は無視できません。その点を考慮に入れると、研究収録の構成について、論文に加え、実践報告、ノート他の部門を設定していく等が今後検討されてもよいのではないかと考えています。実践的な研究が重視される方向性にあるとはいえ、研究収録に掲載される論文は、目的や研究方法の設定の妥当性、導出された結果の信頼性、客観性が保たれている必要があります。さらに、論理展開に飛躍がないかについての入念な確認も欠かせません。本誌に掲載された論文は、研究としての要件を満たしたものであると自負していますが、本校における研究活動をさらに充実させていくためにも、多数の識者の皆様方から、忌憚のないご意見を頂戴できれば幸甚に存じます。

大阪教育大学

附属高等学校天王寺校舎主任

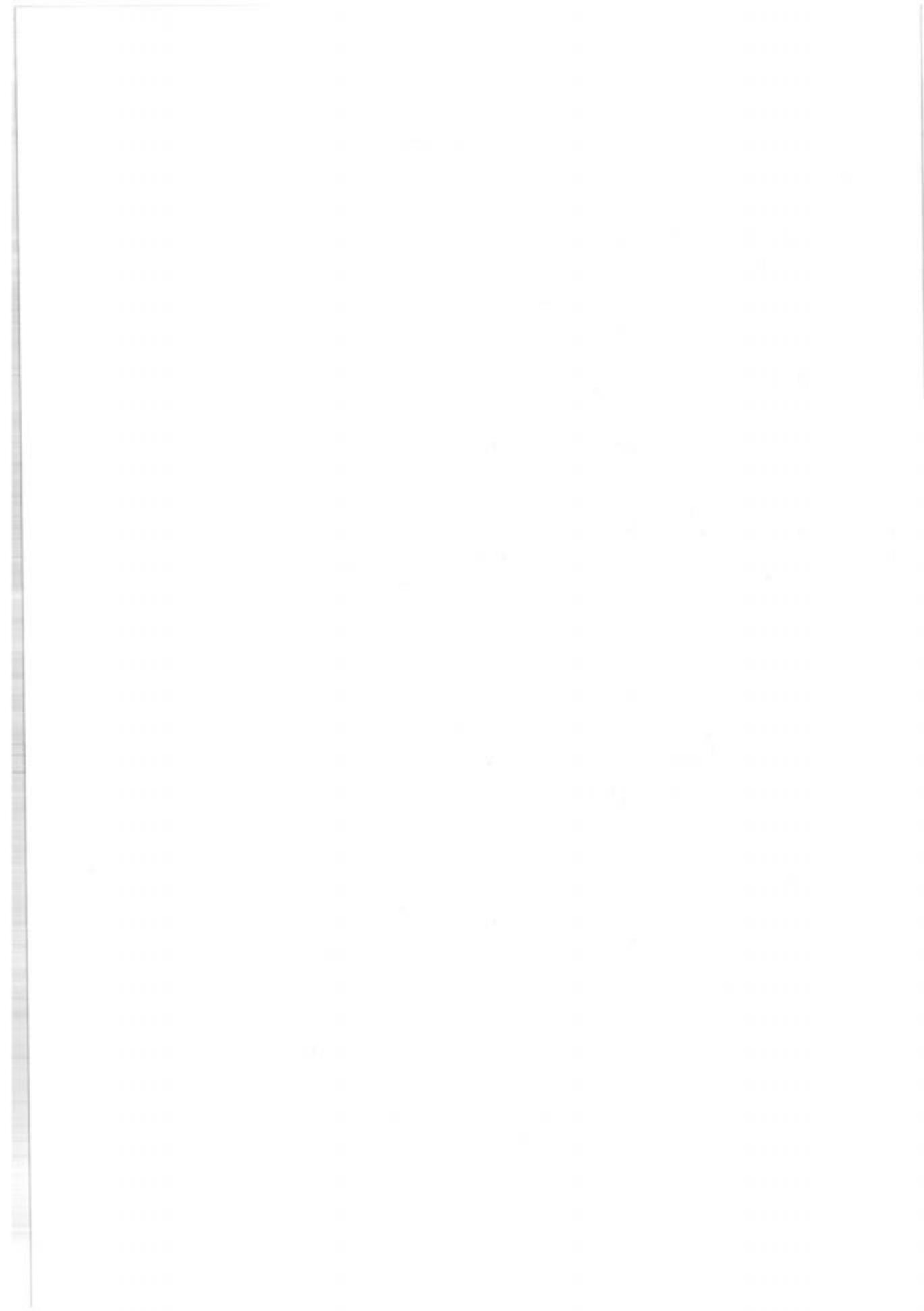
附属天王寺中学校長

赤松 喜久



目 次 (Contents)

浦崎 裕太 (URASAKI Yuta) 地理教育における現地観察の機会 (Opportunity of Fieldwork in Education of Geography)	1
笹川 裕史 (SASAGAWA Hiroshi) ギロチンとメートル法 —フランス革命期の「身体」— (The Guillotine and the Metric System: "Body" in the French Revolution)	11
廣瀬 明浩 (HIROSE Akihiro) 小学校理科エネルギー分野の指導に関する提案 —とくに電磁気教材に関して— (A Proposal about the Academic Guidance of the Electromagnetics Learned in Elementary Education)	37
篠崎 文哉 (SHINOZAKI Fumiya) スピーキング練習法「OSB」の推定される効果 —初学者の場合— (Estimated Effects of Using "OSB" Speaking Exercises —In the Case of Beginners—)	45
伊藤 洋一 (ITO Yoichi) 洋楽鑑賞教室 —物語と歌詞の幸福な出会い— (Popular Songs to Appreciate in English Classes)	55



地理教育における現地観察の機会

浦 崎 裕 太
うら さき ゆう た

抄録：地理を学ぶ上で現地での観察は重要な活動である。しかし、時間や安全性などの制約により実施は容易ではない。本稿ではそのような状況の中で提供してきた現地観察の機会をとりあげ、その課題について述べる。

キーワード：地理教育 体験的な学習 フィールドワーク

1. はじめに

高等学校地理歴史科学習指導要領の指導にあたって配慮すべき事項に「情報を主体的に活用する学習を重視するとともに、作業的、体験的な学習を取り入れるよう配慮すること」とあり、その具体的な学習活動として「観察、見学及び調査・研究したことを発表したり報告書にまとめたりすること」があげられている（第3章 第3款の2）。地理学習において、実際に観察される景観から得られる情報は多く、偶発的に得られることも少なくない。そのため、現地観察できる能力を身につけることは、小・中社会科や高等学校の地理で学んだことを活用できる能力になり、生涯学習につながっていくといえるだろう。しかし、目の前にある景観から情報をよみ解いていくことは容易ではなく、知識や経験が必要となる。この景観のよみ方を経験させる機会を設けることが必要である。

本稿では、主に平成25年度に設けた実際の景観などから情報を収集する現地観察の機会について報告し、それらを通しての課題等について述べていく。

2. 平成25年度中の現地観察の機会の概要

まず、本校での地理の履修状況は次のとおりである。1年次に全員に必修科目として「地理A」が2単位、3年次に選択科目として「地理B」が4単位開講されている。

平成25年度中に生徒が経験した現地観察は、次の3つの形態に分かれる。

(1) 課題を通した各自での現地調査

1年生には夏休みの課題で地域調査のコースを作成させた。3年生には、1学期中の授業時間の中で、学校周辺の地域調査を行った。いずれも、現地観察を行うことは必ずしも義務付けてはいないが、1年生の課題では、現地での観察を踏まえた報告も見られた。

(2) 学校行事を通した現地観察

遠足や合宿などの学校行事で訪れる場所について、事前に授業を行ったり、試験問題の中で授業内容と関連させて確認したりということを行っている。

(3) 土曜日の希望者を対象とした現地観察の授業

本校では、主に土曜日に「スーパーサタディ」とよばれる希望者対象の授業が行われている。その中で、1学期と2学期に1回ずつ現地観察の授業を行った。

これらの形態ごとに内容を報告し、それらを通しての課題等に言及する。

3. 課題を通して各自での現地調査

A 1年生夏休み課題「地域調査のコース作成」

(1) 課題内容

次の内容を含むレポートの作成を課した。

- ① 各自が設定したコース（地図にルートを入れる）
- ② コース内においてポイントとなる景色や史跡など（地図にポイント番号を付けて、本文で解説する）
- ③ コース周辺で「あるもの」の分布を調べ、地図に位置を落とし、分布の特徴をまとめ、そのような場所に立地するのはなぜかを考察する。
「あるもの」は各自で設定。
- 例 コンビニ、地蔵、標識、横断歩道など（複数でも構わない）
- ④ 課題を終えての感想

(2) 課題設定の意図

- ・ 調査内容を他者に伝わりやすいように地図で表現する。
- ・ 分布を地図上に表すことで、他の要素との関わりを考察する。
- ・ 調査対象地についての关心を深め、実際現地を訪れたときに調査を行う前とは異なる視点からその場所を認識できるようになる。

(3) 提出された課題に目を通して

レポートの作成において、現地調査は必須ではなかったが、多くの生徒が実際に現地を歩き観察を行っていた。自宅、最寄駅、通っている塾などの周辺を対象地域として選んだものが多く、現地への訪問も容易であり、不足する情報を集めに再調査もできることだろう。「毎日のように見ている場所でも知らないことが多い、見直すことができた」「地図上で表現すると新しい発見があった」という感想も多く、課題の意図を達成できたものと考える。

作成した課題については授業時間の一部を使用し、クラス内で発表する形態をとった。他の生徒の発表に刺激を受け、発表までに内容を再構成する生徒も見られた。しかし、どう改善すればよいか教師側からの助言をすることができず、発表後にコメントをするのみにとどまってしまった。いったん集めたレポートに改善点を記入して返却し、再提出する形がとれれば、さらに生徒の力をのばせるのではないかと考えるが、その時間の確保が課題となっている。また、授業で発表にあてることができる時間にも限りがあるため、個人の発表をじっくりと分析できないことも今後検討すべき課題である。

B 3年生の授業での「学校周辺の地域調査」

4～6月に週4時間の授業のうちの0.5～1時間分をあてて、学校周辺の地域調査を行った。選択科目であり、11人と13人の2クラスを開講している。少人数であるため、個々に扱うテーマが違っても個別の対応がある程度可能であった。

(1) 過程

① 調査テーマの決定

学校周辺でできそうなテーマをあげられるだけあげさせ、それらを集約し、配布した。全体であげたテーマをもとに各自のテーマを決定させた。あわせてどのような資料が必要か検討させた。

② 対象地域の概観

まず、最近の1万分の1の地形図を用いて、地域の特徴をまとめさせた。何を書けばよいか思いつかなかった場合は、等高線をもとに標高の差や施設の分布などに注意するように指示を添えた。次に1925年頃、1965年頃、2000年頃の3つの2万5千分の1の地形図を比較させ、約40年ごとの変化を読みとらせた。これらの地形図から読み取った情報から各自のテーマと重なる部分を抜き出させた。

③ 資料の分析とまとめ

対象地域を概観する際に用いた地形図とは別に居住者や商店名などが記載された詳細図、大阪府統計年鑑による天王寺駅の利用者数と国勢調査のデータによる町丁目別人口のデータを希望者に配布した。本来、統計書などを自分で探し、自分で編集していくことも大切な過程ではあるが、時間がかかる作業でもある。資料の分析に重点を置くためこの資料収集の過程は、不足する情報があれば必要に応じて各自で収集することとした。授業で50分まとめを書く時間を取り、最終的な提出は1週間後の授業までとした。

(2) 提出された課題に目を通して

学校周辺を対象地域としたことで、時間がない中でも現地観察を行えることを想定していたが、分析方法の項目をみる限り、現地観察を行ったものはなかった。しかし、報告書を完成させた後にも訪れる可能性が高い場所であるので、地図上や統計から読み取ったことを確認する機会は生まれやすい。中学校から通っている生徒にとっては5年、高校から入学した生徒でも2年以上通ってきた場所ではあるが、ただ通っているだけでは意識できなかつた部分を意識し、通学時の風景を見る目も変わったとすれば、現地観察のきっかけが作れたと考えている。

4. 学校行事を通した現地観察

新たに日程をとってフィールドワークの授業を設けることは、日程面などで困難な点が生まれてくる。既存の行事で校外に出かける機会がある場合、その機会をいかして普段見ることのできない景観等にふれることは可能である。平成25年度は、1年生に2回、行

事の前に訪問する土地を題材とした授業を行った。この2つの授業の概要と課題について述べたい。

A 合宿訓練で宿泊する滋賀県高島市の例

(1) 合宿前の授業と課題

合宿前に2時間授業を行い、授業中の作業時間や課外の時間を使ってB5サイズの用紙1枚の小レポートをまとめさせた。授業では、次のようなことを取り上げた。

① 1時間目 「地形図作業」

まず、最近の地形図を提示し、そこに見られる地形などについて場所を地形図中に書きこませ、その特徴を簡単に説明を加えた。本時は概要の確認で詳しい説明は次の時間に行うことわざっておいた。見られる地形などには、扇状地、天井川、三角州、砂州、河岸段丘がある。扇状地（天井川）と河岸段丘については、等高線のみが強調された地形図も提示した。しかし、扇状地については地図上でわかりやすい形状ではないので、理解するまでの時間には差があった。天井川についても、川の下流側に向かって等高線が閉じていることは確認できるが、下を道路や鉄道のトンネルが通っている例は見られない。もちろん、天井川を解説する時に草津川の例なども提示しているが、地形図からの判断は最初に学ぶ例としては分かりやすいものとはいえない。

このうち河岸段丘については等高線を強調した地形図で段丘面を塗る作業を行った。等高線以外の情報が目立たなくはなるが、崖になっている部分と平面の部分を等高線から見分けられるまでの時間は個人差が大きく、個別の指導が必要となった。

地形に関する事項とは別に、宿舎の周辺と合宿中に登山する阿弥陀山の周辺の昭和30年代と平成12年の地形図を資料で配布し、変化をまとめさせた。宿舎の周辺では、圃場整備、住宅地の拡大や鉄道の経営主体の変化などが見られる。また、どちらの年代においても水田が広がっている点は変化がみられない点である。阿弥陀山周辺では、河岸段丘の段丘面上で住宅地や農地の開発が見られる。

② 2時間目 「河川地形」

1時間目にとりあげた地形について、要点を解説し、他の地域の比較的地形図からの判読がしやすい例で確認した。直接の訪問地ではないが、扇状地の扇端での湧水の例を川端（かばた）が見られる集落をとりあげ、地形と生活との結びつきを意識させた。地形以外にも、道路に設置されたスプリンクラーと積雪の多い気候、比良おろしのような局地風についても取り上げたかったが、十分な時間を割くことができなかった。合宿の日程が5月の連休明けであるので、授業時間数や既習事項も限られているが、内容の再編成について検討を加えていきたい。

③ 小レポートの内容

B5サイズの用紙片面に次の内容を記入させた。半分以上が授業内で行う作業結果の記入欄となっている。

1) 地形図の範囲に見られる地形の名称と場所

- 2) 河岸段丘の平面と崖の部分を区別する作業
- 3) 新旧地形図の比較
- 4) 現地で観察できること、気付いたこと、感想

(2) 合宿後の生徒の反応から

合宿自体の目的に社会科見学が含まれていないので、移動中などに気付いたことがあれば、事後に小レポートに書くように指示した。そのため、観察する余裕がなかったという記述も見られた。しかし、天井川や河岸段丘の平らな面については確認ができたという記述を多くみることができた。しかし、実際に見ると目の前に見えているものが授業で習った地形であると断言しきれなかったという感想も多かった。人数が多いければ、全員に直接説明することは不可能であるので、写真などを活用した事前の説明について検討を加えていきたい。段丘は全体をみることは難しいが、バスでの移動中に斜面を登る部分と平面を走る部分が繰り返されることからは、階段状の地形を感じられたようだった。事前の授業で触れていない内容については、植物や琵琶湖岸に並ぶ針葉樹林などについての報告がみられた。また、普段の生活圏が都市部の生徒にとっては、広大な琵琶湖や田が広がる光景自体が新鮮に写ったようだった。それを田舎としてとらえている記述も見られたが、京都市まで鉄道で1時間かかるなど別の視点も提供する必要があると感じた。高島市内の合宿に関わる場所の説明だけでもかなり時間を使ってしまうが、人口増加率(2011～2012年 データブック・オブ・ザ・ワールド2013による)が沖縄、東京について高い滋賀県について考えさせることも興味深い内容にできるのではないかと考えている。

B 遠足で登山をした比叡山の例

(1) 遠足前の授業と課題

遠足の前日に授業があったので、その時間を利用して比叡山に関する授業を行った。

① 授業の流れ

まず、明治期までの比叡山の歴史を、都の位置や宗教の面から説明した。現在の地形図で場所を確認させるなどの地図上での作業も一部取り入れ、地理・歴史が融合した内容になることを意図した。次に、1909年、1951年、1969年の地形図から比叡山の環境の変化を読み取らせた。徒歩でしか行けなかった場所に、鉄道やロープウェーが通じるようになり、やがて自動車でのアクセスが可能となった交通面での変化とそれに伴う山上の開発を中心とした。登山中にみえる景色に、京都市街の北部や八瀬の山間部の集落などがあるので、国際会議場、敦賀街道などにも触れたが、時間が十分にとれなかった。解散場所となつた坂本の門前町についても同様となってしまった。

② 小レポート

B5サイズの用紙に次のことをまとめさせた。

1) 地形図読図で読み取ったこと

授業中の作業で読み取ったことをまとめる。

2) 比叡山の変貌について感じたことと今後の比叡山について

比叡山の観光地化についてどのように考えるか。また、今後もこの観光地化の方向性を続けるべきかについて各自の意見を求めた。

3) 遠足からの帰り道に用いた交通機関

坂本からの帰りの交通手段には、主に京阪線とJR線がある。所要時間や費用に差があるので、各自の交通機関選択の基準からそれぞれの交通機関の特徴を考えさせることを意図した。

4) 高野山との共通点、相違点

歴史的に似た環境の場所との比較による特徴の考察を目的に設定した。

5) 実際に現地に行って見つけたこと、感じたこと

(2) 遠足後の生徒の反応から

遠足の性格から生徒が通った場所はほとんどが登山道であった。ドライブウェイやホテルなどの施設を直接見ることはなく、「あまり手が加えられていなかった」という感想も多く見られた。一方で「開発された観光地」と感じた生徒もいて、「自然」という状態に対するとらえ方の差が表れた。小レポートの5)の項目も、登山道に関する記述が多くかった。植生の様子や舗装の状況などについて触れられていた。授業では、割愛した傾動地塊についても、「帰り道（坂本側）の道が急だった。」という記述もみられた。

小レポートの2)の開発に関する意見については、「やや開発しない方がよい」という意見多かった。この項目を利用して2学期末にディベートを行った。開発に対して賛成側が勝者となった班が多かったクラスもあれば、「賛成側が不利だった」「賛成の意見が思いつかない」などの意見も少なくなかった。ディベートで双方の立場からの意見を聞いて自分とは異なる立場の主張に触れているとは思うが、振り返りの機会で考え方の幅が広がるようにする必要があるだろう。

観察できる場所はコース沿いに限定されるが、その範囲でも観察できるものは少なくなく、実際の景観から学べる機会の一つとして活かすべきと考える。

C 定期考查問題による事後確認の機会

行事等で訪れた土地を題材とした出題を試みている。その出題例は次のようなものがある。

- ・ 学校行事で訪れる地の雨温図の比較
- ・ 遠足で訪れた神戸市の第一次産業
- ・ 大阪城周辺の街区や都市機能
- ・ 上町台地の地形とその変遷（図を提示し、かつて砂州であったことを確認させた）
- ・ 新旧地形図による集合場所周辺の変化の読み取り

後からの確認になってしまふが、少しでも印象に残っている光景と結びつけることができたら自分が行った場所への見方が変わると考えている。事前に授業で扱えればいいのだが、単元の指導順序の変更の必要があったり、訪問地の詳細が十分に把握できていない場合もあったりして、実践はできていない。

学校行事を利用した現地観察の事例をいくつかあげたが、校外の景色を見ることができる数少ない機会であると認識している。日程に合わせて指導順序を入れ替えたり、訪問先の事例が分かりやすい形でなかったり、地理学習に特化したコースを設定できなかったりなどの制約は出てくるが、教室での学習内容を体験により深める機会としての活用を考えていきたい。

以前行われていた「地理巡検」の再設が検討されているが、次のようなことが課題となっている。

- ・ 野外での活動のため、安全面や学習に集中するために気候を考慮する必要があり、実施に適した季節が限られてくる。
- ・ 既に組まれている行事や土曜日の授業もあり、実施日の調整が必要となる。
- ・ 部活動の試合等での公欠者が多くなる日程を避けられない場合、それらの生徒への対応の日程を設ける必要が出てくる。

5. 土曜日の希望者を対象とした現地観察の授業

(1) 授業の概要

A 学校周辺の商店街

日時：平成 25 年 6 月 8 日（土） 10:00 ~ 13:00

参加者：高校 3 年生 2 名

コース：寺田町商店街→源ヶ橋商店街→生野本通り商店街→四天王寺→天王寺阪和商店街→阿倍野再開発地区（あべの銀座跡・あべのマルシェ商店街）

交通費の負担や移動時間が少ない地域設定を考え、学校周辺を対象とした。ターミナル駅である天王寺駅が近い立地にあるが、地域に密着した商店街も見られ、それぞれが違った雰囲気をもっている。それぞれの商店街の特徴と最近の阿倍野再開発地区の商業施設との関わりなどについて考える機会として設定した。他にも、上町台地の坂や街道等についても扱った。学校がコース付近に位置していたことで現地に行く前に地図作業を行えた点も良かった。

B 川と再開発～東淀川区周辺～

日時：平成 25 年 9 月 14 日 13:00 ~ 17:00

参加者：高校 3 年生 2 名 高校 1 年生 1 名

コース：江坂駅→高川（天井川）→東淀川駅→高射台跡と道路計画→淡路駅周辺（駅の高架化と再開発→淀川河岸→赤川仮橋→毛馬閘門→天神橋筋商店街→天満駅解散

前回が学校から近い地域を対象としていたので、多くの生徒が機会を設けないと行くことが少ないと考えられる場所を中心にコース設定をした。多くの内容を含んだコース設定で歩行距離も長くなつたため、当日の参加者の状況に応じて、途中での中断も想定していた。実際には、周辺のポイントも盛り込み、予定よりもやや長くなつた。次々に取り壊され現在では 1 基しか残っていない高射台跡、再開発が進む淡路駅前での新旧両方の商店街

が並立している様子や現在は閉鎖された赤川仮橋など、その時しか見られないかもしれないものを見学できるコースだった。新旧の姿が見られる変化途中の景観は、開発の背景をよみ解くのに適している。川にかかる橋の位置の関係から歩く距離が長くなったが、そのこと自体も川を渡る大変さを感じる機会となり、橋の閉鎖によりさらに遠回りしなければならない大変さも実感できた。

(2) 今後に向けて

2回ともに参加者は非常に少なかった。ポイントの解説、安全管理や柔軟な行程編成などの面からは非常にやりやすかったが、もう少し参加者を増やせるようにしていきたい。内容に興味がある生徒でも、部活動、土曜日の授業などが入っているために参加できなかつた生徒もいたようだった。早めに日程を知らせるなどの改善を図りつつ、テーマや移動距離などが多様な現地観察の授業を計画していきたい。

6. おわりに

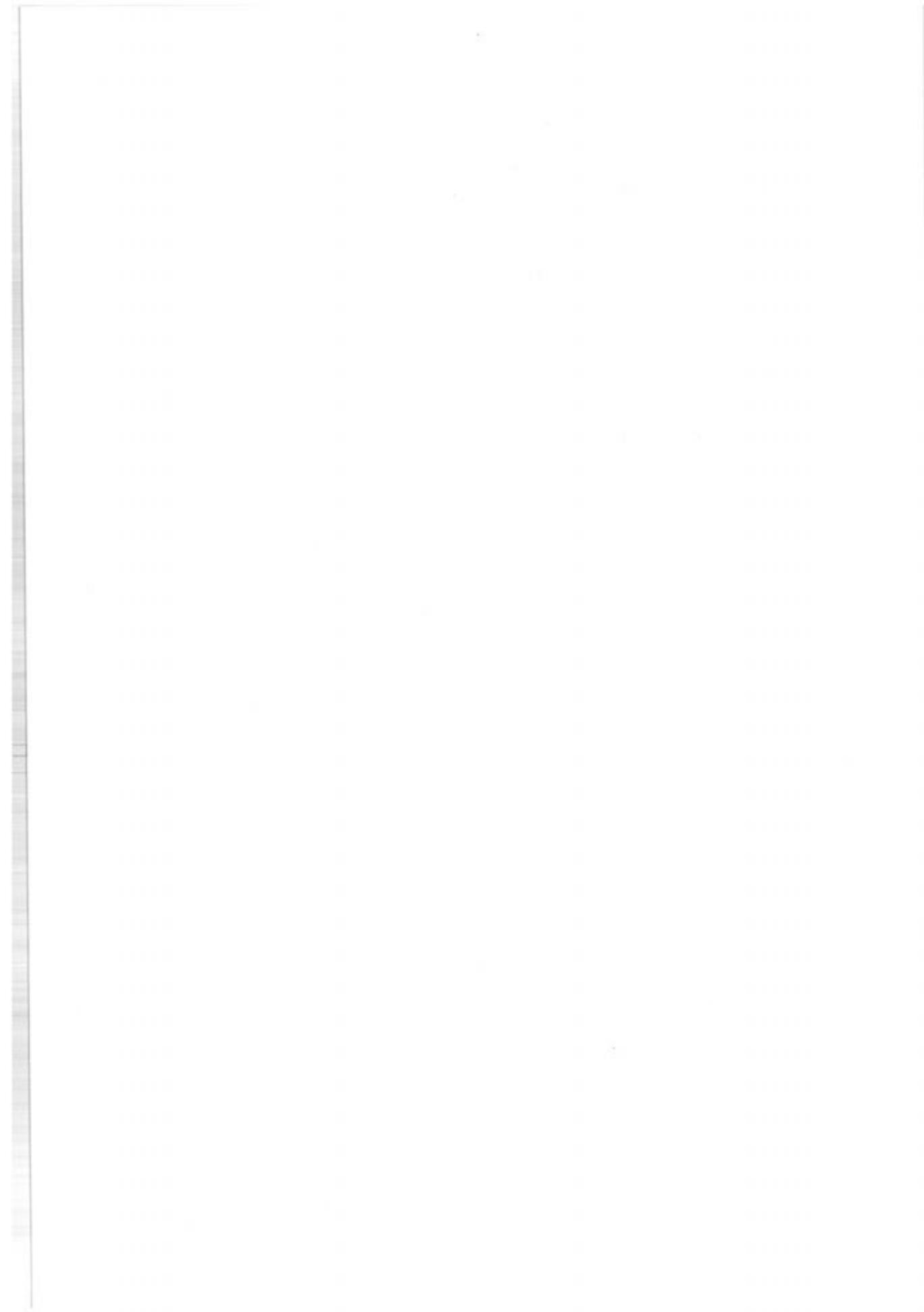
平成25年度を中心に現地観察の機会を紹介した。時間や安全面などの制約がある中で、既存の学校行事などの校外学習の機会を活かすことは有効であると考える。全体として、直接現地で指導する機会はほとんどなく、現地で観察できる事項を提示したり、現地で観察してきたことを深める助言をしたりということが中心になっていた。地理の学習を主な目的とする実習は、数名の希望者のみが体験するという形になり、安全管理の面からは適切な人数規模となった。しかし、より多くの生徒に現地観察の経験を提供するには人数が増えた場合を想定した実施形態の検討が不可欠である。課題等により、現地観察の機会を設け、観察の視点を養わせていくとともに、地理として独立した実習の形態についても検討していきたい。

Opportunity of Fieldwork in Education of Geography

URASAKI Yuta

Fieldwork is important activity in studying geography. However, it is not easy to carry out fieldwork by restrictions of time, safety and so on. This paper shows opportunity of fieldwork offered in such situation. It also shows problems of to carry out fieldwork.

Key Words: education of geography, experiential study, fieldwork



ギロチンとメートル法

—フランス革命期の「身体」—

ささ がわ ひろ し
笹川 裕史

抄録：世界史の授業において、個人あるいは人間集団の活動や思想は取り上げても、その身体のあり方に言及することはほとんどないようである。しかし筆者は、可能な限り授業では「身体（身体性）」に関わる話に触れるようにしている。本稿は、フランス革命期における身体のあり方を、ギロチンとメートル法の2つに重点をおいて生徒に考察させた授業実践の報告である。

キーワード：ギロチン、授業実践、政治文化、世界史教育、フランス革命、メートル法

1. はじめに

・・・今回の授業ではフランス革命を取り上げる。球戯場の誓いにはじまる思いもよらぬ事件の連続とそれにともなう政治体制の変遷を核としながら、個性的な革命家たちのエピソードを添えて…というのが、オーソドックスな授業のようである。しかしそれだけでは、革命（旧い世界の破壊＝新しい世界の創造）の時代を生きた人間と社会との具体的な関係性が抜け落ちてしまうのではないだろうか。

2012年度の大坂教育大学附属天王寺中・高等学校の第59回教育研究会で、中高社会科は「時代が見える歴史の授業」というテーマをかけた。高校の世界史では、フランス革命の時代を扱った。上記の文章は、その研究会便覧の一節である。

「フランス革命期の『身体』」という研究授業のテーマをご覧になった参会者の多くは、「今さらフランス革命？」「手垢のついた定番教材を、あえて？」と思われた一方で、「革命と身体」というミスマッチに少なからぬ关心を抱かれたのではないだろうか。

本校の世界史は、2年次に必修2単位、3年次に選択4単位の計6単位となっている。そのなかで「アンシャンレジーム～フランス革命～ナポレオン」に8時間を配当するのは、かなりの優遇である（一般には6単位ならば、多くても5時間ほどであろう）。しかし筆者は長年、この時間配当をほとんど変更しなかった。国民国家を形成するために革命政府が行なった壮大な実験—「政治文化」の創造について生徒たちに理解させるためには必要不可欠な授業時数だからである。さらにその際、筆者は、革命期の身体のあり方（身体性の変化）について言及するようにしてきた。いきおい今回の研究授業は、従来の筆者の授業をベースにしたものとなったことをお断りしておく。

本稿は、当時の史料（資料）を用い、かつ「身体・身体性」という視点を加味して、生徒とともにフランス革命を体感しようとした授業の報告である。

2. 研究授業

授業の意図を明らかにするために、まず当日の学習指導案を示しておく。つづいて研究授業の具体的な（かつ読みやすさも勘案した）採録を掲載する。授業で使用した自作プリントはB4版横向きだが、縮小し（今回は、3枚のうち授業に直接関係する2枚のみ）採録の後に掲載した。なお、プリントの空欄への記入語句には太線を施した。

（1）学習指導案

地理歴史科（世界史）指導案

指導者 笹川裕史

1. 日時 2013年2月2日（土）

第2限（10時35分～11時25分）

2. 場所 大阪教育大学附属天王寺中・高等学校 視聴覚教室

3. 学級 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

Ⅱ年A組 40人（男子20人 女子20人）

4. 主題 フランス革命とナポレオン

5. 目標 かつてフランス革命は「ブルジョワの政治的支配と資本主義の発展をもたらした」と理解されてきた。しかし近年では「国民という新しい共同体を作り出そうとする政治文化の創造こそが革命の本質であった」と強調されている。授業者はこれらの学説を折衷した立場をとる。すなわちジョルジュ＝ルフェーヴルの主張した「複合革命論」とフランソワ＝フルに代表される「修正主義」をふまえながら、生徒たちにフランス革命の意義を考察させ、ナポレオンのヨーロッパ支配の実態を理解させる。

6. 指導計画（全8時間）

区分	学習内容	時間配当
第1次	アンシャン=レジーム	2
第2次	フランス革命	4（本時は、その4）
第3次	ナポレオン	2

7. 本時の指導

①主題 恐怖政治の経過を理解させつつ、政治文化の創造について考察させる。

②目標 ・恐怖政治の概略を理解させる。

・政治文化の創造について具体的に実感させる。

- ・革命期における人びとの「身体感覺」の実態を理解させる。
- ・史料（資料）を通じて当時の人びとの革命に対する反応を考察させる。

③展開

段階	学習事項	生徒の活動	○指導者の活動／☆評価
導入 (5分)	・本時の予定確認	・音楽を聞き、それに関する問い合わせに答える。	○生徒たちに「ギロチン」の“違和感”を意識させる。
展開1 (25分)	・一連の改革 ・山岳派内部の対立 ・反革命者の処刑の実態	・1791年憲法と93年憲法とを比較する。 ・封建的特権の無償廃止の理由を考える。 ・肃清の経緯を知る。 ・ギロチンに対する人々の感情を推察する。	☆1793年憲法の革新性と限界を理解できたか? ☆農民の保守化をもたらしたことを理解できたか? ☆ロベスピエールが孤立していく状況を理解できたか? ○適宜、史料（資料）を紹介していく。
展開2 (15分)	・一連の改革 ・非キリスト教化 ・「均一な国民」	・メートル法の意図を理解する。 ・地名変更が「空間の世俗化」でもあったことを理解する。 ・革命暦の特異性を理解する。 ・「友愛」が強調された理由を考える。	○地球の全周の長さを尋ねる。 ○非キリスト教化が非宗教化ではないことを確認させ、革命祭典の重要性に触れる。 ○「改暦」が「見えない権力」の発動であることを指摘する。 ☆文化の多様性が無視されていくことに気がついたか?
整理 (5分)	・革命の終息 ・次時の授業予告	・ジロンド派（稳健派）の復活を確認する。 ・授業の感想を記す。	☆政治の安定が望まれたことを理解したか?

④準備物 教科書 帝国書院『新詳 世界史B』

副教材 帝国書院『最新世界史図説タペストリー 十訂版』

自作プリント B4版3枚

音楽「ギロチン／世紀の趣味」（「大革命のダンスとコルトダンス」

J=ルペール指揮 1989年 NECアベニュー株式会社）

パネル写真「ダントン」（山川出版社『世界史写真集 肖像編II』96）

「ロベスピエール」（山川出版社『世界史写真集 肖像編II』97）

「ルイ16世の処刑」（山川出版社『世界史写真集 増補版2』52）

黒板掲示用拡大コピー「刑場へ向かうマリー=アントワネット」（ダヴィド画）

御高評欄

（2）授業採録

【始業のチャイム】では授業を始めます。【起立礼はなし】早速ですけれども、まず音楽を聴いてもらいます。【曲を流す】

授業の始まりに相応しい曲ですが、これは220年前のフランス革命の時代に実際に演奏されていた曲です。というわけで授業プリントの右側のワークシートの1番です。いま聞

いているこの曲に対して皆さんはどのようなイメージをもちますか？ それぞれ書いてみてください。他のクラスではBGMという答えもありました。まあいろんなイメージがあると思います。続いて2番。この音楽にはもちろん曲名が付いています。フランス革命に関係するタイトルです。自分だったらどんなタイトルを付けるのか。前のクラスだったら、たとえば「自由」「目覚め」「サンキュロット」などが、そういったタイトル付けてくれる人がけっこういました。皆さんだったら、一人ひとりどういうタイトルを付けるのかということですね。では【生徒を2人指名】どんなイメージですか？

——生徒：楽しそう。

——生徒：明るい。

楽しそう。明るい…。そしたら、タイトルはどんなんのがいいかな？ 【生徒を2人指名】

——生徒：貴族からの自由。

——生徒：革命の達成。

はい、みんな革命が成功してすごく嬉しい、にこやかなイメージですが、【曲を止める】実はこのタイトルはギロチンです。ギロチン。【生徒の中に小さなどよめき】ではなぜギロチンというタイトルがつけられたのか。ワークシートの3番。その理由を自分なりに書いてください。こんな明るい爽やかな曲にギロチンと付けた理由を。大きな声で発表してくださいね。【生徒を2人指名】

——生徒：ギロチンは処刑道具で、周りの人は暗くなるので、皆の気持ちを和ませるために、わざとこの軽い曲にギロチンという名をつけた。

——生徒：えーっと、ルイ16世がギロチンで処刑されたのを喜ぶため。

なるほど、国王が処刑されたのを喜ぶというのは変な感じですけれども、革命によって身分制度が、アンシャン=レジームがつぶれたんだ。新しい時代の到来を喜ぶという意味もある。はい、いろんな意見があると思いますが、これまでのクラスで聞いたところ大きく2つありますて、一つは、革命によってまったく新しい世界が生まれた。だから少し違和感があるんだけれどもギロチンというタイトルにした。ギロチンはこれまでの処刑道具に比べて、どうだった？ 【生徒を指名】

——生徒：非常に人道的で進歩的だった。

そう。我われからみると、えっという感じですが、非常に人道的で進歩的だったのでギロチンというタイトルを付けたのだという意見もありました。いずれにしましても、こんな曲にギロチンというタイトルは変な感じがしますけれども、こういったギロチンという処刑道具が今から話をします恐怖政治の象徴になります。

では恐怖政治とは何か。国民公会で権力を握った山岳派がジロンド派を追放して、独裁政治を始めます。山岳派による独裁政治がフランス革命史の中では恐怖政治と名づけられているのです。では早速ですけれども93年の6月に始まった恐怖政治の具体的な中味についてです。まず1793年の6月に1793年憲法が出されます。91年憲法は立憲王政を前提としていましたが、王政が崩壊したので91年憲法はだめとなって、新しい憲法になる。図説の「タペストリー」の173ページを開けてください。真ん中あたりに憲法の比較をしている表が載っています。憲法で一番大切なことは、誰が政治に参加できるのかということですね。93年憲法は、91年憲法や95年憲法と比べて何が違うのか。【生徒を指名】

——生徒：立憲王政から共和政になった。

具体的に言うと？ 選挙については？

—生徒：普通選挙。

そう、今まで財産がなければ選挙に参加できなかつたけれど、男子普通選挙が制定された。山岳派は、サンキュロットや農民を、味方に取り込まなければ革命を進めることができない。だからサンキュロットや農民が革命に協力してくれるよう、彼らの支持が得られるように、財産のない人間でも選挙を認めた。残念ながら男子だけですが。まだ女性は選挙から除外されていますけれど、男性に関しては普通選挙。ただ93年憲法には但し書きがつきます。「革命が終わったら」。今すぐの実施ではないのです。もし、いま普通選挙を実施して、多くのサンキュロットや農民がもっと急進的な、もっと過激な政治を求めたら、どうにもならない。だから民衆の支持を得たいけれども、民衆が直接政治に入ってくるのは避けたかった。93年憲法は非常に革新的でしたが、その一方で、実際に政治に参加する現実の場は制約しておくという矛盾があつたということですね。

改革をすすめていった山岳派ですが、7月に山岳派のリーダーだったマラーが暗殺されます。では皆さん、「ギタールの日記」が載っているプリントを出してください。

93年7月16日火曜日の日記を読んでいきます。【最初の6行を読む】「7月13日の午後6時か7時頃、ノルマンディーのカン出身の25歳の娘に殺害されたマラーの遺体に、14日と15日の朝、防腐処置が施された。15日午後、遺体はコルドリエ教会に運ばれて、高い寝台に安置され、胸の下までむき出しにして一般に公開された。右鎖骨下のなまなましい傷痕を見ることができた。マラーは入浴中にこの凶刃をうけたのだ。遺体は今日の午後6時まで公開され、6時から長い葬列をつくって出発し、パリを一巡してコルドリエ教会の庭園にもどった」。日記の下に絵が載っています。本当にこのようなかたちで殺害されたかどうかは分かりませんが、こうだったのでは…という想像も含めてのイラストです。

シャルロット＝コルデ。貴族の娘で25歳。国王を処刑した山岳派、急進的な革命にもう我慢ができないというので、単身パリに上京。さらに単身でマラーの家に行き、面会を求める。すごく熱心な若い娘で、危険はなさそうだというので招き入れた。入浴中に招き入れるのは変な感じがしますけどね。当時マラーは皮膚病を患っていました。つまり薬湯、薬に浸かっていたのです。当時のヨーロッパの感覚では、入浴中でもこういったかたちで面会するのは、あり得たのです。入浴中のマラーに面会したシャルロット＝コルデは、隠し持っていたナイフをぐさっとマラーの左胸に突き刺した。

もう一度、「ギタールの日記」に戻ります。「…防腐処置が施された。15日午後、遺体はコルドリエ教会に運ばれて、高い寝台に安置され、胸の下までむき出しにして一般に公開された。右鎖骨下のなまなましい傷痕を見ることができた」。マラーが亡くなった。お葬式をする。遺体を安置する。それは理解できますよ。しかし遺体を棺の中に安置するのではなく、彼がどのような傷を負ったのか分かるように、なまなましい遺体をそのまま安置する。ちょっと我われの感覚とは違いますよね。なぜこのようなことになったのでしょうか？

アンシャン＝レジームの時代、国王の身体というのは、国王一人の身体ではなくて、フランス王国の象徴だったわけです。ルイ14世が「朕は国家なり」と言ったとき、彼の私生活そのものが政治そのものであり、彼の身体がフランス王国の象徴だったのですね。今回はどうでしょう。マラーは山岳派のリーダーでした。そのマラーが殺害された。いま共和

国は傷ついた。その傷ついた共和国の表象・シンボルとして、マラーのなまなましい傷痕を見せるようななかたちで公開した。

我われは自分の身体は自分自身のものだと考えています。誰のものでもない、自分の身体は自分のものだと。しかし時には、自分の身体が自分だけのものではなく、公、公共のものとして、「利用」されることがある。まさに今回のマラーの場合がそうですね。傷ついた共和国を皆に示すために。そしてその共和国をもう一度復活させるのだ…と。

さてシャルロット＝コルデです。当然マラーを殺害したのでギロチンで処刑されます。ところが、とんでもない事件がおこったのです。処刑の後、死刑執行人がコルデの首を持って、間違いなく首を切り落としたと、皆に見せるわけですね。そのとき、ある人物が処刑台に上ってきて、執行人からコルデの首を奪い取ると、いきなりその頬にバシッとびんたを食らわせたのです。理由は分かりません。本来ならば、コルデは八つ裂きにされて当然なのに、たかがギロチンでの処刑だったことに対する怒りなのかも知れません。いずれにしてもびんたを食らったコルデの頬は真っ赤に腫れ上がったと、新聞などの公共メディアに記録されています。コルデは、辱めを受けて耐えられないと思い頬が真っ赤にならなかったのだ。コルデは生きていたのだ…。そんなはずはないでしょう。しかし、生きていなければあんなに真っ赤になるはずはない…という噂があつたという間に広まった。ギロチンは人道的だというには本当なのか？ そういう疑惑が民衆の間で広まっていきます。

マラー暗殺の後、次の指導者になったのがロベスピエールでした。【ロベスピエールのパネルを見せる】この人物がどうだこうだというのはあまり言いたくないのですが、ロベスピエールはルソーを尊敬していました。純粹に革命を進めようとしていた。私利私欲のなかった人物だと言われています。もと弁護士でした。貧しい民衆のためにブルジョワや権力者と戦って、法廷で貧しい民衆の味方をしていた。そういうなかで社会を変えなければならないと考え、三部会に参加し、革命に関わっていくのです。

このロベスピエールが政治を担っていきます。7月、封建的特權の無償廃止が行なわれます。89年の8月、領主権が廃止されましたが、それは有償だった。買い戻しをしなければならなかった。しかし本当に平等を実現するならば、無償廃止しかないんだ！とロベスピエールは断固これを実行します。理想に燃えていたんですね。本当に平等な社会を創るのだと。一方で、もう一つ重要な意味がありました。農民たちの支持を得たかったのです。なぜなのか。この頃まだフランスの北西部ではヴァンデの反乱が続いていました。徴兵制に対する不満が農民の中にあったのです。この徴兵制に対する不満を和らげたい。そこでただで貴族の土地を農民に分け与える。お前たちは財産を手に入れたのだ。その財産を守るためにも、革命フランスを外国から守らなければいけないんだ…というギブ・アンド・テイクの関係ですね。ただし皮肉なことに、土地を得た農民は、もうこれで革命は十分だ、と急速に保守化していきます。欲しかった土地がただで手にいった。これ以上望むことはないと。ロベスピエールにとって、思いもよらぬ展開となっていました。

また革命裁判所が中心となって、反革命の容疑で様ざまな人が処刑されていきます。なんといっても有名なのがマリー＝アントワネットですね。皆さんもう一度、「ギタールの日記」のプリントを見てください。10月14日月曜日の日記です。【5行を読む】「セリエ夫妻と昼食。薪を一車買う。マリー＝アントワネットが革命裁判所に出廷し、第1回の尋問をうける。15日午前4時、死刑の宣告。16日正午、革命広場で処刑。特別な囚人として、二輪馬

車に一人のせられ、刑場へ運ばれた。監獄を出るときから、髪を切られ、両手を後ろ手に縛られていた。王妃は白い部屋着姿であった。なぜ、マリー=アントワネットは髪の毛を切られていたのでしょうか？ ワークシートの4番です。そもそも自分で髪の毛を切ったのか、役人が切ったのかは分からぬのですが。【マリー=アントワネットの肖像画の拡大コピーを黒板に掲示する】これはダヴィッドの描いたアントワネットの最後の肖像画です。

「テニスコートの誓い」を描いた、フランス革命期とナポレオン時代を代表する画家のダヴィッドです。なぜアントワネットは髪を切ったのか？ 【生徒を2人指名】

——生徒：髪の毛が長いと豊かなイメージがあるから、死刑の前に髪を切られた。

——生徒：長い髪を切って、プライドをすたずたにした。

髪は女性の命という言い方がありますが、やはりそうなのですね。さて髪を切ったリアルな理由が2つあります。一つ目はギロチンの際に邪魔になるから。長い髪だと。二つ目は、髪の毛そのものに対して、皆さんが持っているイメージです。ヨーロッパの前近代では、女性はロングヘアでなければいけない。男性と区別をするために。しかもそのロングヘアは必ず結うか編み込まなければならなかつた。よくシャンプーやリンスのコマーシャルで、ロングヘアをさらさらと女優さんがしていますが、あの仕草を前近代のヨーロッパでやつたら大変ですよ。あの仕草には、ちゃんとした意味があるんです。「私はあなたのもの。自由にして」という意味なのです。ですから貞淑な女性は、髪の毛を編み込んでいました。でもその髪の毛をぱっさりと切る。つまり女性らしさがそこで損なわれたわけです。キリスト教の尼僧、尼さんは髪を切ってないけれども、髪の毛が見えないようになっていますよね。そうすることで、髪の毛を切ったと見なしているわけです。

もう一つ、実はとんでもない話がありまして、マリー=アントワネット、最後にとんでもない濡れ衣を着せられました。自分の息子と性的に良からぬ関係にあったとでっち上げられた。アントワネットを貶めるためでっち上げだったのですが。当時のヨーロッパでは、性的にみだらなことをした女性に対してはシャリヴァリという民衆のリンチがありました。それは、たとえば不倫をした女性の髪を、みんなで寄って集めてジョキジョキと切って坊主頭にして、辱めるのです。そうされた女性は浮氣をしたということが一目瞭然。見せしめにされたのです。ただし髪の毛が伸びてきいたら、もう水に流そうということでもあった…シャリヴァリはね。今回、マリー=アントワネットの髪の毛が伸びることはありませんでした。彼女は処刑されましたから。王妃としての威儀をもって処刑台に臨んだといわれていますけれども、傍目には惨めな一人の人間、女性性を奪われた人間として処刑されている。フランス王国の滅亡が再確認されることとなる。

マリー=アントワネットの次に、ある有名な女性が処刑されました。ロラン夫人です。ワークシートの5番を見てください。彼女は処刑される前に有名な言葉を残しました。あるものに対して「お前の名の下においていかに多くの人が殺されたことか」と。ロラン夫人は、ジロンド派の有力者でした。【ルイ16世の処刑のパネルを掲げる】これはルイ16世が処刑されたときの情景ですが、ロラン夫人も同じこの処刑台に上りました。そして処刑前に、あるものを見上げたのです。自由の女神です。「自由よ、汝の名の下でいかに多くの罪が犯されたことか」と。抽象的な自由ではなく、処刑台を見下ろしている自由の女神の影像に向かってロラン夫人はこう訴えたのです。5番に入る言葉は「自由」でした。

これに対して、ロベスピエールはどのように言っているのか。もう一度繰り返します。

ロベスピエールは純真な人間でした。私利私欲なく革命を進めようとした。彼はこう言っています。「徳が無ければ、あるものは有害であり、あるものが無ければ徳は無力である」。徳とは何でしょう。革命を進めるための理想・情熱・理念・正義…すべてひっくるめて、徳。徳が無ければ、あるものは有害である。でもそれが無ければ徳は無力である…と。どんな言葉が入るでしょう？「恐怖」です。「徳が無ければ、恐怖はおぞましい。しかし恐怖が無ければ徳は無力である」。革命を実現することはできないということなのですね。

ロベスピエールは革命を進めていくために、結果として、山岳派の中での勢力争い、権力争いを始めていきます。94年の3月には、エペールとそのグループを粋清します。理由は反革命です。エペールは、山岳派の中でも極端な左派・急進派でした。もっとサンキュロットや民衆と協同しなければいけない。それがエペール。ところがなんとその1か月後、今度はダントンとその仲間が処刑されます。ダントンは山岳派の中の右派です。これがダントンです。【ダントンのパネルを見せる】ダントンは非常に人脈の広い人間でした。山岳派でしたが、ジロンド派とも仲が良かった。なんと王党派とも仲が良かった。その人当たりのよさ、人脈の広さを生かしていろんな人と協力して革命を進めていこうという人物だったのです。ところがそのダントンを、反革命という理由でロベスピエールは処刑する。ダントンはまさか自分が処刑されるとは思っていない。逮捕されて処刑場に向かう時、馬車に乗せられたのですが、その馬車がたまたまロベスピエールの家の前を通ったのですね。ダントンはロベスピエールの家の方に向かってこう叫んだ。「ロベスピエール！ 次はお前の番だぞ」。俺のような人脈の広い人間を殺してしまったら、お前はどんどん孤立していくぞ…仲間が無くなっていくぞ、と言うのです。しかしダントンも処刑されました。

6月、ますます反革命容疑者の処刑が激しくなっていきます。ワークシートの5番の続きです。93年の4月から94年の6月10日まで、パリだけで1251人が反革命の容疑で正式に処刑されました。そして6月11日から7月27日までのわずか1か月半で1376人がギロチンによって処刑されています。すさまじい数です。フランス全体ではこの恐怖政治の間に、反革命の容疑で逮捕された人間は約50万人。そして処刑された人間は1万6000人。アンシャンレジームの時代では、フランス全土で1年間に50人も処刑されなかったのに、それがこんな状態になってしまったのです。

では、ワークシートの6番・7番です。恐怖政治とか、死刑制度そのものは少し脇において、処刑道具のギロチンそのものに焦点をあててみます。ギロチンという処刑道具に対して、上流階級は肯定的であったか、否定的であったか。皆さんどちらかを選んでください。その理由も書いてください。同じく7番。民衆はギロチンを人道的・進歩的と思って肯定的だったのか、あるいはギロチンはだめと否定的だったのか。○か×か、どちらかを選んでください。理由も書いてください。上流階級や民衆は、処刑道具としてのギロチンをどのように評価していたのか。

時間が無いので、みんなに聞いてみようと思います。6番の方です。上流階級（ブルジョワや貴族）は、ギロチンに肯定的だったと思った人は手を挙げて。【5～6人が挙手】少ないですね。なぜそう思ったの？【生徒を指名】

——生徒：革命前は、貴族がどういう処刑をされていたのか分からなければども、もう革

命が始まったんだから平等でもしようがない。

貴族やブルジョワは嫌だったと思った人。【大半が挙手】多いですね。【生徒を指名】
——生徒：上流階級は上品だったので、生理的に嫌だった。

うーん。たしかに生理的に嫌だったでしょうね。ただ先ほどの答えの裏返しですが、上流階級はやはり自分たちは庶民とは違うというエリート意識があったのです。彼らの処刑は、かつては斬首でした。庶民と同じ処刑方法というのは耐えられなかったのです。

はい、ここでもう一度、「ギタールの日記」に戻ってください。94年5月8日の日記です。「今日5月8日、総括徴税請負人28名が処刑された」。すらすらとギタールは名前を書き連ねていますが、4番目を見てください。「ラヴォアジェ、50歳。パリ生まれ。もと貴族、旧科学アカデミー会員。火薬、硝石管理官。国庫監査官。ヨーロッパで最も博識な化学者一人。文士」。皆さん気が知っている、あの有名な化学者ラヴォアジェですね。名前を挙げていっていますが、あまりにも多いので8名以降は省略。さてその次にギタールはこう書いています。「以上の罪で全員死刑の判決を受け、6時15分頃処刑された。執行はわずか24分で終わった。私はその処刑を見物した。4台の車に分乗して到着したが、数名をのぞいて、さほど深刻な表情はしていなかった」。なぜ、さほど深刻な表情はしていなかったのか？ 平然と無表情な態度で処刑されることが、死刑囚の間では流行していたのです。

さて、この文章の最後の3行です。私が初めてここを読んだとき、ゾクッとした部分があるのですが、それはどこでしょうか？【生徒を指名】その部分を読み上げて。

——生徒：「執行はわずか24分で終わった」

そうです。28人がたった24分です。さて民衆は、このギロチンに対してYESだったのかNOだったのか。○を選んだ人、手を挙げてください。【6割ほど挙手】反対だと思う人。【5～6人】時間が無いので、結論を言ってしまいますと、民衆も実はギロチンによる処刑はやめてくれという気持ちでした。

変な感じですよね。【ルイ16世の処刑のパネルを提示】見てください。皆、処刑を見に行ってるのですよ。公開処刑だから。嫌なら見に行かなければいいのに、やっぱり皆、見に行ってる。それなのに、ギロチンはやめてくれと思っているんですよ。なぜか。人間としての死じゃないからです。残酷ですよ。処刑というのは。でもアンシャン=レジームの、ギロチン以前の処刑というのは、最後に神に許しを与えられて、この世ではこのような形で終わるけれども、来世での復活、救いが約束されて、彼らは死に臨んだのです。あえて言いますと、死刑を見ることは娯楽でもありました。ひどい言い方ですけれども。だって小さい子供もここにいますよ。小さな子供も見に行ってるのです。でもたんなる娯楽じゃなくて、犯罪者がこの世界と和解をする最後の場を見る…そういったドラマのような意味合いもあったのです。それがあまりにも無機質に、死の連続となってしまった。まるで大根やニンジンを切り落とすようにスパスバと首が切り落とされる。そこには何ら人間的な要素が無い。いずれにせよ残酷な処刑ですが、そういったことに対する反発から、民衆もギロチンが大嫌いだった。これが恐怖政治の模様。

では、急ぎます。政治文化の創造について。革命政府は、まったく新しい社会変革も行なった…ということで後半です。

いま我われが生活している日常生活をまるっきり変えてしまおう、過去とは全く違う社

会に。あるいは他の外国とはまったく違う社会を創ろうという改革を、革命政府は始めます。新しい政治文化の創造です。具体的にいうと、均一な国民を作り上げようと考えたのですね。

日常生活が…何か特別なことはしないんだけれども、昔とは違う、他の外国とも違う、自分たちは特別な国に住んでいるんだという印象をつくりあげる。たとえば、革命の時代に始まって今でも続いているのがメートル法。アンシャンレジームの時代、フランス各地で度量衡はばらばら。長さの単位、重さの単位はばらばら。流通・経済活動に不便なので統一しよう…それは分かりますが、たとえばパリの度量衡を基準にしてフランス全土を統一すればいいのですよね。ところが、今までの度量衡とは違うまったく新しいメートル法という基準を作ったのです。ちょっと訊いてみましょう。【生徒を指名】地球一周って何kmくらい？

——生徒：3万km？

うーん、惜しい。地球一周は4万kmです。すごくキリのいい数字じゃないですか。本当は端数があるけれども。でも、これは逆なんです。地球一周を規準として長さの単位を決めたんですね。パリを通る子午線の赤道から北極までの1000万分の1を1mとするというふうに、地球を基準として作ったのです。皆さんのワークシートの8番。なぜ長さの単位の規準を地球としたのでしょうか？ 時間が無いので、答えてしまいますが、それまでの長さの単位というのは、人間の身体を規準としていました。たとえば日本でいうならば寸というものは、親指の幅です。尺というものは、もともとは親指から中指までの長さです。英語だけれども、インチというのは、本来は親指の幅で、フィートは足の長さでした。人間の身体を規準として長さの単位は決められていた。だけども人間の身体の大きさは人によって違うじゃないですか。それは良くない、やっぱり普遍的な何か統一されたものがいいというので、それならば人間が生活しているこの地球を規準としようとなり、このメートル法が考え出されたのです。私たちは生まれた時からこのメートル法に馴染んでいるので、なんとも思わないのですが、よくよく考えると、1メートルという長さは人間の身体にとってすごく中途半端な長さです。この頃は洋風化した生活ですから皆さんの家には畳がないかもしれません、畳の大きさというものは人間の身長と幅にマッチしているんですよ。人間の身体とは合わないんだけれども、理性的に地球を規準としたメートル法。このように空間の感覚を変えていく。

空間の感覚を変えていくのはメートル法だけではありません。地名もそうです。どんどん地名が変えられました。皆さんはフランスの有名な都市、リヨンとかマルセイユは聞いたことがあると思います。リヨン、マルセイユ、共に反革命の都市だった。そして革命政府と戦い、鎮圧されましたが、その後、都市の名前を変えられてしまいました。リヨンはヴィル＝アフラン、解放された都市、自由にされた都市。マルセイユはもっと酷いですよ。ヴィル＝サン＝ノン、名前の無い都市、名無しの権兵衛ですから。そんな名前を付けられたのです。自分たちの住んでいる場所は変わらなくても、引っ越しをしなくても地名が変わったら、住所表記が変わったら、世界が変わったなあという雰囲気あるじゃないですか。たとえば十年ほど前かな、平成の大合併が行なわれた頃、家は引っ越ししてなくとも地名が変わった、住所表記が変わったという人いるでしょう。大阪も府市統合したら、また地名がかわるかも知れませんね。

さらにこの処刑台のあった広場。【ルイ16世の処刑のパネルを掲げる】革命前はルイ15世広場と呼ばれていました。革命の最中は文字通り革命広場と名付けられました。ルイ15世などの王族の名前はけしからん。キリスト教にちなんだ地名もいっぱいあったんですが、全部消していきます。地名の変更とは、過去のしがらみを断ち切ることなんですね。

そしてもっと強烈なのが革命暦です。まったく違う暦を作ろうというのです。ひと月をすべて30日にしました。1か月はすべて30日。大の月、小の月というのは良くない。公平じゃない、大の月、小の月というのは…。30日が12か月だと、5日か6日ありますよね。それを年末に持ってきてサンキュロットの祝日としました。それだけじゃありません。元日を9月22日にしました。ワークシートの9番。革命暦の元日を9月22日にしたのはなぜでしょう。少し難しいかもしませんが。【生徒を指名】なぜ9月22日なのでしょう。ヒント。9月22日の前後、日本でも祝日があります…。秋分の日とは、どんな日？

——生徒：（無言）

昼の長さと夜の長さが同じ日ですね。平等・公平ですよ。9月22日は、秋分の日で、かつ偶然ですが、国民公会が共和国の宣言をした日なのです。ですから共和政のスタートとして相応しい。月の名前を変え、ひと月を30日で平等にして、1年の始まりを9月22日にして、革命暦1年、革命暦2年と新しく始まっていく。これまでの暦はキリスト教に関係していたんですね。西暦というのはキリスト教暦でした。それはけしからん。新しい社会を創るなら、キリスト教を排除した革命暦だ。一週間制も廃止されました。曜日が消えたのです。上旬・中旬・下旬で一つの区切り。徹底的に時間の感覚を変えようとした。

でも、これだけじゃ面白くない。大抵の教科書にはここまでしか書いていませんが、革命暦の面白いのはその次なのです。時間の間隔を変えたのです。時間の区切りを。1日を10時間にしたのです。皆さん理解できた？ 1日10時間の意味。よくあるんですよ、1日10時間だというと、あの14時間はどうなったんですか？という質問が。1日を10等分するのです。24時間制じゃなく、10時間制にするのです。そして1時間は100分、1分は100秒という徹底した十進法です。全然感覚が違ってきますよ。ですから、革命暦の5時というのは、正午です。私のこの授業、残念ながら延長する危険性があるのですが、うまくいけば革命暦の4時76分頃に授業が終わるのです。【生徒の中に小さな笑い】ややこしいけれども、まあ慣れるだろう、たんに時間の間隔が変わっただけだと思つてはダメですよ。目で見えるものにも違いが出てくるわけです。【黒板の上の壁時計を指差す】あの文字盤、12まで数字がありますよね。これはまずい。反革命です。10までの数字の文字盤じゃないと…というわけで新しい文字盤の時計がどんどん作られています。

空間も時間もすっかり変えてしまう。新しい社会で我われはフランスの国民として生活をするんだ。それが政治文化の創造なんですね。肉体感覚や身体感覚も変わっていく。

お祭りも数多く行なわれました。キリスト教の祝日が禁止されたので、それに代わる、例えば理性の祭典が催されます。キリスト教は否定したのですが、宗教を否定したのではないのです。わかる？ 何かを信じなくては人間は生きていけないということを、革命政府もよく理解していたんですね。その代わり、キリスト教じゃなく理性というものを我われの信仰・崇拜の対象にしようじゃないか…まさに啓蒙思想の流れなのです。さらに代わって、恐怖政治の後半は最高存在の祭典というふうに、キリスト教は否定しながらも祝祭は行なわれます。こういったお祭りを通して、お祭りに参加することによって新しい社

会を皆で経験し、国民としての一体感を保つ。そして最初に聞いてもらった曲です。【曲をかける】多くの人が命を失っている。【終業のチャイム】ある種の明るさ、あえてこういう明るさを作り出さなければやっていけない。そういったメンタリティ・集団心性というものが形成されたのかもしれません。分かりませんよ。真相は、しかし革命祭典でこのような音楽が流れ、ダンスをした。

チャイムになりましたが、少し延長します。最後が言語の統一です。もう一度「ギターの日記」のプリントを見てください。いちばん左下です。フランスの白地図が載っています。実はすべてのフランス人がフランス語を喋るのではありません。フランスは、ヨーロッパでも代表的な多言語国家なのです。フランス語というのは、あくまでもパリを中心とした北フランスの言葉です。ところが共和国政府は、フランス国民は皆同じでなければならない。フランス国民の条件として、フランス語ができることと定めたのです。地図を見てください。フランス語を喋る人間はせいぜい7割もいなかつた。ところが、フランス国民である以上、皆フランス語を喋らなければいけないとしました。つまり均一なこと…皆が同じことをするから平等なのだと。皆がバラバラでは、平等じゃないのです。皆が同じことをするから平等。皆バラバラでも、その個性を生かして、お互いに人間として平等というのではなかったのです。

マリー=アントワネットの本名を知ってる？ オーストリアから来た女性ですよね。本名はドイツ語でマリア=アントニア。マリア=アントニアがフランス風にマリー=アントワネットと呼ばれたのです。彼女は生涯、自分の名前がフランス風に呼ばれることに強い違和感があったといわれています。オーストリアで生まれ育ったマリア=アントニアが、マリー=アントワネットになった。フランス王妃だから当然といえば当然ですが。そのようにすべてのフランス国民にフランス語が強要されることになったのです。

このような思い切った改革がロベスピエールの時代に次つぎと始まっていきました。で、どうなったのか？ 社会は大混乱となる。恐怖政治は非常に極端である。このような状況の中で我われはどうやって生きていくべきか。友愛なんですね。フランス語ではフランチ。日本では博愛と訳されることが多いけれども、正しくは「兄弟のような愛」。たんなる友愛じゃなくて、血を分けた兄弟として、自由・平等の混乱の時代を生きていこう。血を分けた兄弟のようにしてこの国を作っていくなければ、革命フランスは守れない。だからフランチ。三色旗の色の意味が、自由・平等・友愛と、ここで変えられたのです。

ロベスピエールに対して、ついにクーデタが起こりました。テルミドール9日の反動です。革命暦のテルミドールという月の9日に起こった事件です。反革命という理由で、今回はなんとロベスピエールが逮捕されました。そして翌日に処刑です。

独裁政治はまずい。急進的な政治はもうたくさんだ…ということで、93年憲法は（制定されましたが、実施されていなかったのですが）、廃止され、3度目の憲法が出されました。1795年憲法です。この95年憲法は、財産のある人間しか政治に参加できません。そして独裁政治を防ぐために5人の総裁が話し合いで政治を進めていく総裁政治となりました。もう分かるでしょう？ 決まらないんですよ。まとまらないんです。決められない政治の中で誰が何を決めていくのか？ というわけで、次回はナポレオンの話です。今日は、これで終わります。今日の授業の感想を、たくさん書いてください。【6分延長】

12・56・2年 世界史ノート-37 フランス革命④

投票の意…それでも自由・平等・友愛…

(6) 恐怖政治 (1793年6月～94年7月)

→ 山岳派の独裁

* 1793年6月 1793年憲法の採択

7月 マラード階級 → ロベスピエールが中心に

7月 封建的特權の無償廢止

* 1794年3月 エペール派の粛清

4月 ダントン派の粛清

6月 反革命容疑者の処刑激化

(7) 政治文化の創造 (キリスト教の否定)

* 「均一な国民」の形成

* メートル法の提案 (90年)

* 地名の変更 (隨時)

* 革命暦の採用 (93年10月)

* 理性の祭典 (93年11月)

→ 最高存在の祭典 (94年6月)

* 言語の統一

(8) 革命の終息へ

* 1794年7月27日 テルミドール9日の反動

95年8月 1795年憲法の制定

10月 総裁政府の成立。しかし不安定

ワークシート

Ⅱ年 組 番 氏名 _____

1: この曲に対して、どのような印象を持きましたか?

2: この曲に「フランス革命」にちなんだ曲名をつけてください。

3: 理由

4: マリーアントワネットが髪を切っている理由は?

5: ロラン夫人:

_____よ、故の名の下でいかに多くの罪が犯されたことか!

ロベスピエール:

「髪が無ければ_____は有罪であり、_____が無ければ彼は無力である」

c.f.: (ナリ) 93年4月～94年6月10日～1251人 ⇒ 6月11日～7月27日～1376人
(全土) 反革命容疑での逮捕判決者は約50万人。裁判終了判決された者は約1万6千人。

6: 上高階級の粛清は?... ○ or ×

(理由)

7: 民衆の粛清は?... ○ or ×

(理由)

8: 革命が基礎とされた理由は?

9: 9月22日が元日とされた理由は?

10: 今日の投票について...

投票率	5	4	3	2	1	/	投票率
(投票の感想及質問など)							

3. 研究協議

授業後に行なわれた研究協議の概略を示しておく。前半の“授業の意図”は、当日の筆者の報告をまとめたものである（参会者に配布したレジュメは省略した）。また後半の“質疑応答”は、その一部を筆者の責任で再構成した（一は、意見や質問。Sは、筆者）。

（1）授業の意図

本年度の社会・地歴科の主題は「時代が見える歴史の授業」でした。じつは6年前の研究会でも、同じ主題で私は、研究授業と報告をしています。そのときは「ジャズエイジと進化論裁判」というタイトルで1920年代の合衆国を取り上げました。今回の報告では、6年前の研究会での研究討議も踏まえつつ、あらためて、どうすれば「時代が見える」のかを考えてみたいと思います。

まず「時代が見える」と生徒に思わせ、教師自身も納得することが出来るお手軽な方法は「変化」、それも劇的な変化を示すことだと思います。その際にもっとも有力なのは「外的アプローチ」でしょう。その一つめは「時代的変化」。新しく出た法律によって、政治や経済制度が大きく変化した。あるいは統計資料などを用いて過去との相違を明確にすることです。二つめは「地域間比較」です。これも政治や社会体制を比較するだけでなく、貿易や生産に関わる統計数値などを示すことが重要です。とくに数字の変化というものは大きな説得力を持っています。ある種の客観性も有していますし…。

しかし私は、こういった「外的アプローチ」だけでなく、「内的アプローチ」にも心配りをしたい。当時の人々が、何を考え／感じていたのかという点を示さなければ、人間不在の歴史となってしまいます。フランスのアナール派の社会史などの成果も、可能な範囲で取り込んでいこうと考えています。ただしこの点に関しては、異論をお持ちの方も多いようです。以前、宗教改革と宗教戦争のまとめとして、魔女裁判をテーマにした授業をした際に「社会史は魅力的だが、通史が頭に入っていない高校生には、混乱をもたらす危険性が高い」と評されました。正直、私には意外なコメントでした。まず通史、余裕があれば社会史も…というスタンスでは、結局、高校生には政治・経済などの「制度」を教えるだけで終わってしまいます。くり返しますが、当時の人びとの集団心性（マンタリテ）いわゆる「感性」のあり方を生徒には示したいと思います。今回の授業で、「恐怖政治の過程」とならんで「政治文化の創造」を重視したのもそういう視点からです。

先ほど「時代が見える」には「変化」を示すことが有効だと申しましたが、それと同時に「変化しないもの（変化に抗うもの）」が存在することを生徒たちに気づかせたい。

「変化しないもの」は、たんに頑迷固陋なのではなく、しばしば社会の深層に根ざしたものであることが多い。そしてこの両者を示すことで、社会の変化を、よりダイナミックに理解させが出来るからです。

今回は「変化しないもの／変化に抗うもの」として、フランスにおけるカトリック信仰を強調するつもりでした。実際には時間的な制約もあり、あまり強調できなかったのですが…。革命政府の打ち出した諸政策…「地名の変更」や「革命暦」あるいは「様ざまな革命祭典」が目の敵にしたのは、消え去ろうとしないカトリックだったからです。

「政治文化の創造」とも関連していますので、授業で取り上げた「メートル法」「地名

の変更」「革命暦」「理性の祭典や最高存在の祭典」そして「言語の統一」について簡潔に触れておきます。まずメートル法に関して。たんにフランス各地のバラバラであった度量衡を統一し、経済・流通面での合理化をはかったというだけではありません。従来の人間の身体を規準とした長さの単位ではなく、人類が生存している共通の場としての地球を規準とした点が重要です。

地名の変更は、カトリックの聖人や過去の王族の名に因む都市や村落あるいは広場や橋などの地名を廃し、革命に関わる言葉（自由・平等・共和国・憲法など）に変更していきました。研究者は「空間の世俗化」と名づけており、なるほどという思いです。また授業では触れませんでしたが、革命の初期に行政区が変更されています。従来の州が県に改変されたのですが、その際に、各県の面積がほぼ同じになるように80以上に細分されました。

革命暦の説明は詳しくすればきりがないので授業ではコンパクトにまとめました。私は、暦に代表される時間の管理を「見えない権力」と名づけています。古代ローマのユリウス暦や中華王朝における元号などは、その端的な例といえます。革命暦によってカトリックの祝祭日は一掃されました。まさに革命暦の採用は「時間の世俗化」でもありました。

革命祭典は、カトリックの様ざまな祝祭に変わる祭典として企画・運営されました。授業では詳しく取り上げませんでしたが、革命政府が、祭典を、参加した人びとに革命フランスの国民としての一体感を抱かせる貴重な手段とみなしていたことは重要です。革命祭典はエリートの啓蒙主義と民衆の伝統的な習俗とがせめぎあう場となりました。革命家たちがキリスト教を否定する一方で信教の自由を保障する立場に立ち、また無神論には抵抗があったことも見えてきます。

また祭典とも関連して町の中に設置・建造された様ざまなオブジェや影像にも、生徒たちにもっと注目させたかったところです。建造物や影像を私は「見える権力」と名づけ、権力者による空間の支配だと授業では指摘しているからです。フランス革命の2回目の授業では「見える権力」であったバスティーユ牢獄が、襲撃後すぐに解体されたことを紹介しています。ちなみに授業でも触れたロラン夫人の「自由よ、汝の名の下でいかに多くの罪が犯されたことか」という言葉は、処刑台の間近に設置されてあった「自由の像」に向かって言ったとされています。

なお非カトリック化の重要な政策としては、公教育の改革を外すことは出来ないですが、授業では時間の都合もあり省略しました。

さて6年前の研究会では、指導助言の先生より次のような言葉を戴きました。「時代が見える歴史の授業とは、逆説的だが、見えないものーある現象の表面を追いかけるのではなく、その背後にある構造や連関・関係性ーを見るようとする授業である」と。

授業では、21世紀初めの日本で高校生として生活している、生徒一人ひとりに、特定のある時代／社会を生きた「人間」との「距離感」「遠近感」をつかませることが重要だと考えています。その際に注意したいのは、その時代を生きた「人間」は有名人ばかりではないということです。教科書に載っているビッグネームだけでなく、無名の人にも目配りをしたい。また一個人だけではなく、様ざまな人間集団も取り上げたいと思います。

さて「距離感」についてです。私がいま述べている「距離感」とは、もちろん空間的な

ものではなく、心理的なものです。そしてこの「遠さ／近さ」を生徒一人ひとりに、自分自身のものとして感じさせることができです。授業で取り上げた時代／社会に、生徒を“遭遇”させる手段として、「もの」を用いることは有効です。おそらく多くの先生方と同じように、私も香辛料やパピルスなどを生徒に回観します。しかしこれには限界があります。そこで私がときおり試みるのが「歴史的な場」を設定することです。ある事件／状況の枠組みを示して、その場に生徒を投げ込み、臨場感／緊迫感を味わわせる。そういう点で、今回の授業では「ギロチン」という音楽に注目しました。なぜあの軽快な音楽に「ギロチン」という物騒な名がつけられたのか。定まった一つの正解はないのですが、それを考えていく中で「時代の激動」を感じとてもらえば…と思った次第です。

私は、今回の授業テーマを「フランス革命期の『身体』」としました。なぜ「身体」なのか？ 私たちは日常で自分の身体を意識して生活することはあまりありません。残念ながら怪我や病気などで不調な時に、はじめて意識するものといえるでしょう。歴史においても、同じではないでしょうか。行動や思想の主体としての人格は取り上げられても、身体は、舞台上の黒子のように「見えない」存在となっています。これって何か変ではないかという思いが昔からありました。そこで私は以前から「身体／身体性」にかかわる話を授業するようにしてきました。しかし最近は、さらにそのことを意識しています。資料の「2012年度第2学年の授業一覧」（本稿では省略）をご覧ください。すべての授業に「身体／身体性」に関わる話を入れることは出来ませんが、今年度の2年生の授業は、このような感じで進めています。

今回は、恐怖政治におけるギロチンをメインに、政治文化のメートル法をサブとして授業を構成しました。ギロチンが非常時における身体について、メートル法が日常における身体について考える有効な入り口になると考へたからです。どのような時代であっても変化するはずがないと生徒が決め付けていた、「確固たる」身体が、革命によって「搖らぐ」瞬間に気づいて欲しかったのですが、どうだったでしょうか？

世界史の授業で「身体／身体性」を、より意識的に取り上げるきっかけとなったのは、リストカットをする生徒たちの存在でした。生徒指導の観点から「リストカットなどしないよう」と話すのとは別に、教科指導の場において何かできないだろうか？と考えたことが始まりです。もちろん歴史上のエピソードにかこつけて「自分の身体を大切にしなさい」と話をするのではありません。「（心も含めた）身体」というものがそれぞれの時代や社会のなかでどのように扱われ、変化してきたのかを知ること／考えることが、リストカットをする生徒たちにとって何らかのヒントになればと思ったからです。

とはいって「ギロチン」が話題となるのは、一部の生徒にはきつかったと思います。前回の授業の最後に「次の授業はちょっとスプラッター（血まみれ）だけど…」と予告をしましたし、本番でも面白半分の取り上げ方とならないように注意をしましたが。しかしフランス革命を（あるいは他の戦争を）語る際に、実際にあった「流血」を過度に避けるのは良くないと考えています。もちろんこれに関しては賛否両論があるでしょうが…。

なお今回の授業とは直接関係しませんが、人物史について一言。小中学校では生徒の発達段階に応じ、人物を中心とする歴史が重視されています。高校の歴史教育ではどうでしょうか？ フランス革命では多彩な人物が数多く登場します。一人ひとりの生涯や業績を詳しく語ろうとすれば、きりがありません。私は、人物史は評伝となりがちなので、

「歴史」よりも「文学」の範疇の方が相応しいと考えています。歴史はあくまでも一個人ではなく集団としての人間＝社会を扱うものだと考えているからです。このようなことを強調するのは、かつて世界史未履修問題がおきたとき、日本を代表する新聞が、カエサルの活躍を例に出し、世の中や人情の機微を知る機会としても世界史教育は必要だと論説記事を載せたことに反発があるからです。とは言え、実際の授業では評伝めいたコメントをしばしば行なっているのも事実です。まあ今このように人物史について歯切れの悪いコメントをしているのは、フランス革命の次にナポレオンを扱うからです。いうまでもなく、彼は、高校世界史の教科書の目次に、名前が項目として載る唯一の人物だからです。

最後に、私は、受験用語集の頻度数の高い「歴史用語」を説明しても、必ずしも「時代が見える」ようにはならないと思っています。むしろその時代を代表する「普通名詞」や「フレーズ（文言／台詞）」の方が、「時代を語ってくれる」と考えています。

「時代が見える」授業とは、結局、その社会の構造的变化が、その時代を生きている人々の「生活のあり方」を通して見えるようにすることではないか。6年前もそして現在でも、私はそのように考えています。そういう意味では、政治（法律）／経済（土地・税）制度の变化は、もちろん重要ですが、それを示すだけで「よし」とすることには違和感があります。私は、広い意味での“文化史”が重要だと思っています。言い換えるならば、政治史・経済史、そして狭い意味での文化史などの個別史・分野史の寄せ集めではない、全体史の視点を失わないことが、「時代が見える歴史の授業」に必要だと考えています。

（2）質疑応答

- フランス期の身体性を扱う場合、ギロチンの他に適切な題材はないのでしょうか？
S：ギロチンに関しては、興味本位になってしまふおそれがあるので、十分注意しなければならないと思います。ただし今回のテーマに関しては、ギロチンがいちばん分かりやすい題材だったと考えています。そして、処刑という非日常性だけではなく、日常における身体性の変化としてメートル法に関する説明も十分にしたつもりです。
- 内容は面白いのですが、生徒の意見交換が少なかったのが気になりました。
S：正直なところ、普段の授業は一斉講義で、個々の生徒への質問はありません。授業時間との兼ね合いで、ついつい省略してしまいます。その代わり、全体に問いかけるように話術を工夫したり、ある事柄の賛否や有無について挙手させることはあります…。というわけで、今回は私としては、生徒の発言を引き出そうとかなり頑張った方です。その分、授業をかなり延長してしまうことになってしまいました。
- ワークシートの下の「今日の授業について…」は、毎時間実施されているのですか？
S：今回は、全員に感想を書いてもらっていますが、普段は各クラス4人ほどにB6版の紙を渡して、感想や質問をローテーションで書いてもらっています。そして回収した生徒の感想文を編集し、教科通信として次回の授業時に配布しています。
- 「身体」の所有権に関する歴史的意味とは？
S：一言ではとても答えられない質問ですが…。前近代では奴隸や隸属民が存在した。つ

まり自分の身体でありながら、自分には「決定権」がなかった。やがて基本的人権が保障されていくなかで、自分の身体は自分の所有物だと考えられるようになります。しかし授業で触れたように、身体は、私（個人）のものでありながら、公（公共）のものもある。また時代や地域によって身体（肉体）と精神（心や魂）の関係も様ざまである。今回の授業だけでは不可能ですが、世界史の授業全体を通じて、そういったことに生徒たちが気づいてくれればと思っています。

— 評価はどのように行なわれているのか？

S：（全員ではありませんが）授業の感想文をチェックしたり、あるいは定期考査での記述問題の答を確認したり…ということになるでしょうか。

— 政治文化の主体性について、どう考えられていますか？

S：いわゆるエリート（上流階級や権力者）の描いたシナリオどおりに民衆が動くはずはありません。ありきたりな言い方になりますが、エリートと民衆との間での作用・反作用（過剰な反応や無視あるいは反抗）を丁寧に示すことが重要だと思います。

（3） 参会者による授業評価

教育研究会の参会者には、授業「フランス革命期の『身体』」に対する＜授業評価表＞への回答をお願いした。ご協力いただいた23名（参会者のほぼ半数）の回答と、各項目に記していただいたコメントの一部を紹介する。

＜授業評価表＞ 5（たしかにそう思う）－4（ややそう思う）－3（ふつう）
－2（あまりそう思わない）－1（全くそう思わない）／☆（よくわからない）

指導案について

1. 授業の重点となる目標がはっきりしている。

5：14人 4：7人 3：2人 2：0人 1：0人 ☆：0人

2. 内容や教材の解釈が妥当である。

5：19人 4：2人 3：1人 2：0人 1：0人 ☆：1人

3. 想定される生徒の思考傾向や技能水準を考慮している。

5：11人 4：6人 3：5人 2：0人 1：0人 ☆：1人

4. 導入・やま場・整理の部分がすべて含まれている。

5：9人 4：7人 3：6人 2：1人 1：0人 ☆：0人

- ・テーマ設定がしっかりと伝えたいポイントが適切に盛り込まれた授業であった。
メインとサブの二部構成、とても生徒にとって分かりやすいと思った。
- ・端的な言葉で書かれているので（しかも本質をとらえて）授業時に聞きながら見るようにとても活用しやすかった。
- ・4. に関しては時間が超過したことで整理の時間が少し短くなってしまった感がある。
国民意識の形成が新しいフランス（革命フランス）形成のために時間・空間意識の変革を図ったことや、理性崇拜について具体的なイメージを持たせつつ理解を促すという点が非常に新鮮で興味深かった。

指導案と授業の対応について

5. 授業目標からみてふさわしい授業だった。

5 : 14人 4 : 5人 3 : 3人 2 : 1人 1 : 0人 ☆ : 0人

6. 時間配分は指導案どおりであった。

5 : 3人 4 : 6人 3 : 11人 2 : 3人 1 : 0人 ☆ : 0人

・説明が具体的だったので一つ一つに時間がかかったように思います。十分な史料を活用するのも大切ですが、その中でコンパクトに活用していく方法もあったと思います。

- ・しっかりと準備がなされていて、それをとても合理的に反映していたと思う。
- ・ラスト5分が必要ならば、展開をスリム化する必要があるのではないか。
- ・身体感覚などの、当時を生きる人々との距離感は、とても具体的な事例を通じ、生徒にもよく伝わったと思います。
- ・6. に関して最初2に印をつけたが、協議会での質疑応答を経て3に印をつけかえた。生徒とのやり取りはやはり大切だと考える所以、多少の延長は内容の盛りだくさんなところから考えると仕方ないのかも知れない。

授業スキルについて

7. やま場の盛り上げがたくみであった。

5 : 11人 4 : 8人 3 : 4人 2 : 0人 1 : 0人 ☆ : 0人

8. 生徒の反応に即して授業計画を柔軟に変えた。

5 : 3人 4 : 7人 3 : 9人 2 : 3人 1 : 0人 ☆ : 1人

9. 生徒の言葉や行動に注意深く対応した。

5 : 4人 4 : 10人 3 : 6人 2 : 3人 1 : 0人 ☆ : 0人

10. わかりやすい説明であった。

5 : 14人 4 : 7人 3 : 2人 2 : 0人 1 : 0人 ☆ : 0人

11. ポイントをついた説明であった。

5 : 16人 4 : 6人 3 : 1人 2 : 0人 1 : 0人 ☆ : 0人

12. 意味のよくわかる質問であった。

5 : 11人 4 : 10人 3 : 2人 2 : 0人 1 : 0人 ☆ : 0人

13. より深く考えることをうながす質問がみられた。

5 : 9人 4 : 9人 3 : 5人 2 : 0人 1 : 0人 ☆ : 0人

14. 板書内容（事項）はよくわかった。

5 : 5人 4 : 8人 3 : 8人 2 : 1人 1 : 0人 ☆ : 1人

・授業の中で「歴史の場」を設定することは、とても大切だと感じました。「個人」や「集団」が見える工夫、とても参考になりました。

・穴埋めを黄色、プラスの部分を白色で板書するのは合理的だと思った。明日から活用していきたい。

・ワークシートの発問がとてもよく工夫されていて、とても参考になりました。処刑前の

マリー=アントワネットの拡大コピー等も効果的でした。

- 導入で用いた音楽に、展開・整理部分で遅って（遅って）意味を考えさせる点、ワークシートで考察を促し、左のノートに該当する部分で知識や学習事項の整理を行い、1時間分をB4版1枚のプリントで完結させるスタイルに興味を持ちました。学習事項の理解と考察が連動している授業であることがよくわかる具体物だと思う。

授業全体を通して

- 15. 授業は、よかったです。

5 : 13人 4 : 8人 3 : 2人 2 : 0人 1 : 0人 ☆ : 0人

- 生徒が時代が見えているかどうかの確認はどうのうにしているのでしょうか。授業内の確認は生徒の発言などからわかると思います。プリントのアンケートに書いていいのを見て確認できるかと思いますが、やはりもう少し生徒の発言が聞きたかったです。プロバーでないので（略）人びとの「身体感覚」の実態を理解させるというのが、フランス革命における政治文化の創造にどうつながるのかがよくわかりませんでした。
- 当時の感性が生徒にもしっかりと伝わっている工夫のされたすばらしい授業であったと思います。
- 豊富な資料と（史料）と「身体」という生徒が身近に感じるキーワードを用いての授業は、私自身も引き込まれ、臨場感あふれるものでした。
- すごく効率の良い授業だと思いました。世界史はこのようなベースで進めないと難しいのかなとも思いました。世界史の内容は、今後の政治・経済・法などを考えていく上でとても大切なものです。このような歴史上の事実について、生徒がどのような考えを持っているのか？（略）どう判断するのか？ などもう少し聞きたかったです。
- フランス革命を社会・文化の視点から切り込んでおり、また「身体」をとりあげて、実感を伴うような授業をつくっておられ、たいへん参考になりました。
- 内容や先生のお話等、たいへん刺激的でした。どうしても「暗記」の歴史になりがちですが、「身体」をテーマに、ただの人物伝に終わらないフランス革命の全体を行なう授業で私もこういう授業がしたいと非常に感じました。
- 授業内容をたいへん興味深く、聞かせていただきました。理論立てて、また様々な資料を提示され、学ぶ楽しさを実感できました。奇をてらう感じがなく、こういう授業が本来の形でなければならないように思いました。
- 受験のための選択の段階で離れてしまう世界史離れのことを考えると今日の授業は、一通りやる受験対応を望む生徒にはどう評価されるかと考えました。本来はこういう授業、考えさせることのできる体感できる授業をしたいのですが。しかし授業計画を見てびっくりしました。一年間、貫いていらっしゃるんですね。それで選択してきた生徒は本当に力もつくでしょうし、理想です。
- 中学と高校では大きく違いがあると感じた。ワークシートの質問項目は非常に興味深いものが多く、よく教材研究をされているのが感じられた。

- ・全ての事項に裏づけ、背景がたぐみに盛り込まれ、時代を「感じる」授業であった。電子黒板を使用すれば、板書を消す時間も省略できたのではないかと感じた。
- ・「革命」が政治機構の変化という無機質なイメージに留まらず、多くの「感覚」をも変えてしまう大変化であったことがイメージできました。
- ・紹介されるエピソードがただ生徒を面白がらせるものではなく、ちゃんと流れに沿った形だったので集中力が切れなかったと思います。
- ・国民意識の形成や自由・平等・友愛（特に友愛の概念を理解させることに苦戦しているので）を具体的に理解させる構成と例示の仕方にただただ驚嘆しました。フランス革命期の劇的な変化や政策は20世紀に出現した社会主義国の政策や文化面でのコントロールに通じるものだとよく感じました。フランス革命を扱いつつ20世紀あるいは今日の社会や国家体制に関連づけて広げていくこともできるのでは？との感想ももちました。
- ・講義形式にもかかわらず、生徒を引きつける要素がふんだんに盛り込まれていて勉強になりました。

4. 生徒の反応

授業「フランス革命期の『身体』」に対する生徒の授業評価と、代表的な感想文を紹介する。以下の感想文は、SOMETIMESと名づけた教科通信に掲載した（感想文の最後の数字は、生徒の授業評価である）。この号の見出しは、「文字盤が10までの時計はオシャレ!?」とした（なお研究会当日は、前日までの3クラス分を集約したものを参考資料として配布したが、本稿では、最終的な4クラス分を載せている）。

生徒（151人）による授業評価

5：53人 4：79人 3：12人 2：1人 1：1人 ？：5人 平均：4.1

- ①ギロチンに対する民衆や貴族の評価が、興味深いと感じました。当時の人々が「無機質な死」と感じたという点が、ギロチンを思いうかべると現実的なように感じたし、人間の死として扱われないと思わせるほど、不気味な処刑方法だっただろうと思います。5
- ②処刑が一種の娯楽（といっては語弊はあります）のようになっていて、処刑そのものがおそろしい事というよりも自分の立場のアイデンティティが保てないということや、ドラマが無いという感覚があることに肌寒さを感じました。一分以内に人が次々と殺されていく様子に、人々の感覚は麻痺してしまうのでしょうか、この時代は命の重さ、価値がわかりにくくなっているように思えました。5
- ③シャルロット=コルデの処刑の話は少し怖かったです。女人なのに殺人をおかした、歴史に名を残したのは当時はかなりめずらしいことだったのではないかと思った。ギタールは、生々しい処刑の有様をくわしく記しているが、当時の人はそんな残酷な場面をよく何回も見ることができたなあと思った。フランスは、外来語に対する審査が厳しいといったことがあるが、それは「言語の統一」が影響しているのかなと思った。4

- ④ギロチンでたくさんの人々が次々と処刑されていくところを見て、市民は平気だったのか疑問に思った。曲の雰囲気のように、明るい雰囲気の中で処刑が行われていたかも知れない。 4
- ⑤革命政府がいかに「国民」をフランスに住む人達に意識させたかったのかがわかりやすかった。ロベスピエールが均一な国民を「均一な様々な国民」を認めれば、言語や住む地域を超えて革命を進めることができたのではないだろうか。 4
- ⑥ゆったりとした音楽で始まった授業が、恐怖政治を中心とする残酷な光景ばかりが目に浮かんでしまって、あまり記憶に残らなかった。ギロチンで人の首が落ちるという、今では想像もできないような行為が当たり前に高速で行われているのがもう…。もう自由が何なのであるか分からなくなってしまった。 4
- ⑦アントワネットの髪が切られた理由は前から気になっていたので知れて良かったです。テルミドールの反動でロベスピエールが処刑されたのは、ダントンの言葉が現実になったんだなあと思ってゾッとした。 4
- ⑧5分も延長するのはすごくきつい。 1
- ⑨とても面白い授業で、資料を用いた説明はイメージしやすく、分かりやすかった。ただ先生は革命を急ぎすぎたのではないか。そんなに急進的に進めたら、私達は革命についていくことができない（ノートがついていかない）。なぜ人間の感覚を度外視した単位でメートルは採用されて、1日10時間1分100秒は、採用されなかつたのかなあ？便利なのになあ…。 4
- ⑩髪の毛の話を聞いて、たしかに「ベルサイユのバラ」で女性は必ずかみを結っていたことを思い出した。男の人でもかみが長くかかれている人がいたのは脚色でしょうか？ 5
- ⑪ギロチンの虐殺の話がすごく重たかったです。28人の処刑に24分とか1人1分もかけず人の命を終わらせるのにそれがあたりまえみたいになってる感じがとてもこわかったです。同じ人間がやっていると思うとゾッとした。 4
- ⑫メートル法の採用や暦の改変など、確かに「いったん全てを壊して新しいものを作る」ということだなと思いました。もともとあった固有の文化を否定し、新しいものを押しつける、ということは「革命のため」と言えば聞こえはいいですが、欧米諸国が植民地に対して行っていた低開発にも通じる所があると思いました。 4
- ⑬難しい質問で答えにくい部分もあったが、よく考えさせられたし、おもしろかった。しかし、昔の人って、死体とか平気なんですね。 5
- ⑭同じ国内で言語が統一されていなかったのは驚き。違う言語の人同士で喋るときはどうしていたのだろうか？共通語のようなものがあったのか。 3
- ⑮現状を開拓したいとは思っていても多人数で政治をするのは現実的不可能である。しかしそれにかまけてリーダーに任せきりになってしまふと、独裁政治や恐怖政治が引き起こるのだ。そう考えると現代の日本の状況はかなり危ないと思う。 4
- ⑯ギロチン（処刑）の話がいっぱい出てきたけど、血なまぐさなくて、ドラマティックな授業だなと思いました。革命という理由でたくさんの人が処刑されたことはわかつたのですが、処刑の発端となった球戯場の誓いをするために立ち上がった人々は、多くの人が処刑されることを望んでいたわけではないだろうなと思うと、どこかむな

- しくなるというか、革命は恐ろしいなと思いました。5
- ⑯革命はすごい犠牲をともなうのに、結果があまりついてこないので、なんだかギャンブルみたいだなと思った。4
- ⑰ギロチンで死刑になるときにあまり表情が変わらなかっただという日記の記述があったのですが、自分の死さえも実感のわかないぐらい機械的であったということだとしたら、恐いなと思った。5
- ⑯ワークシートがあると、自分で理由を考えたり人の考えを聞くことができておもしろかったです。処刑方法を変えるだけでこんなにもたくさんの意見、反発があることに驚きました。「ギロチン」という曲名には驚きましたが、せめてもう少しキツめの情熱的な曲調にしても良かったのではと思いました。あまりに明るすぎるで…。5
- ⑯最後の方、スピード早かったけどもう少し解説きたかったです。4
- ⑯ワークシートの問題が面白い。出来事だけでなく、その背景やちょっとしたことでも理由を考えて当時の人たちの気持ちを感じるのが楽しい。ただいつもの授業よりあまりワクワクする内容ではなかった。4
- ⑯自由・平等・友愛。今でも良い言葉として使われることの多いものばかりですが、この言葉がもつ威力の恐ろしさを改めて認識した。平等・自由この2つの言葉がもたらす理想の世界と現実との溝をどうやって埋めていくか、今でも難問だと思います。5
- ⑯フランス革命当時の人は“死”に慣れていた。そうでないと死刑場なんていけない。4
- ⑯地名・暦そして言語まで変えられたら、普通は混乱すると思った。ロラン夫人の名言には非常に感銘を受けた。5
- ⑯ダントンの処刑の際の話のときとか、セリフに気合いが入っていて良かったです（笑）。（略）また革命暦の時間で過ごしてみたいなと思った。4

5. おわりに

「身体」を世界史の授業の中でどう位置づけるのか——このようなことを考えるようになったのは、臓器移植（法）や尊厳死をめぐる議論が活発に行なわれた1990年代半ばだったように思う。「自分の身体や生命に関する自己決定権は、哲学や倫理学の範疇だから、高校では倫理だ。世界史で扱うのは変でしょう」という人は少なくなかった。しかし丁度この頃にリストカットをする生徒が身近にいたこともあり、「身体（身体性）」を何らかの形で世界史の授業で取り上げられないだろうかと思ったのである。またHR活動等の時間ではなく、世界史という教科活動で扱うことになった背景には、敬愛する先輩教師の次の1言があった。「いまを生きる生徒たちの日常生活の中の様ざまな悩みや苦しみを（感情に流されず）理知的に解き明かし、共感することも歴史教育には必要だ」。

牽強付会かもしれないが、少し意識をしてみると、世界史の授業で「身体（身体性）」について触れる機会は意外に多い（もちろん、なにをもって「身体（身体性）」に関わっていると考えるかは意見が分かれるだろうが）。大まかな傾向としては、前近代では宗教等の儀礼に、近現代なら公衆衛生に関することがらが多くある。もちろん演劇や疾病に関わることは時代を問わない。そういう点では、今回の研究授業で扱った「フランス革命期の『身体』」を前近代と近現代の分岐点／接点としてとらえることも可能だったかもしれない。今後も、「身体（身体性）」に関わる題材を意識して授業に取り込んでいきたいと

思う。

最後になるが、今回の教育研究会でも、多くの方々のお世話になった。指導講師の奥山研司先生（花園大学文学部教授）と附属天王寺中高社会科の先生方には、準備段階から当日の研究授業・研究協議にいたるまで貴重な助言・助力をいただいた。また養護教諭の甲斐真奈美・升谷田津子両先生には、万が一の時の対応を快く了承していただいた（以前、イエスの磔刑の話をした際に貧血を起こした生徒がいたので）。

さらに大阪大学大学院文学研究科が主催する大阪大学歴史教育研究会（代表：桃木至朗教授）からも多岐にわたるご協力をいただいた。ここに記して、感謝の意を表したい。

【おもな参考文献】

- 安達正勝『死刑執行人サンソン—国王ルイ十六世の首を刎ねた男』（集英社新書・2003年）
安達正勝『物語フランス革命』（中公新書・2008年）
五十嵐武士・福井憲彦『アメリカとフランスの革命』（世界の歴史21 中央公論社・1998年）
M・ヴォヴェル 立川孝一他訳『フランス革命の心性』（NEW HISTORY 岩波書店・1992年）
小池寿子『内臓の発見 西洋美術における身体とイメージ』（筑摩選書・2011年）
A・コルパン、J-J・クルティース他監修 鶴見洋一監訳『身体の歴史 I 16—18世紀 ルネサンスから啓蒙時代まで』（藤原書店・2010年）
柴田三千雄『パリのフランス革命』（歴史学選書 東京大学出版会・1988年）
柴田三千雄『フランス革命』（岩波セミナーブックス・1989年）
柴田三千雄他『フランス史2—16世紀～19世紀なかばー』（世界歴史大系 山川出版社・1996年）
R・セディヨ 山崎耕一訳『フランス革命の代償』（草思社・1991年）
高木勇夫『フランス身体史序説—宙を舞うからだ』（スポーツ選書 叢文社・2002年）
高木勇夫『からだの文明史—フランス身体史講義』（叢文社・2003年）
多木浩二『絵で見るフランス革命』（岩波新書・1989年）
立川孝一『フランス革命』（中公新書・1989年）
逕塚忠躬『フランス革命』（岩波ジュニア選書・1997年）
B・ディディエ 小西嘉幸訳『フランス革命の文学』（クセジュ文庫・白水社・1991年）
M・バイイ編 柴田道子他訳『ギロチンの祭典 死刑執行人から見たフランス革命』（ユニテ・1989年）
浜本隆志『拷問と処刑の西洋史』（新潮選書・2007年）
R・プライス 河野肇訳『フランスの歴史』（ケンブリッジ版世界各国史 創土社・2008年）
O・プラン 辻村みよ子訳『女人権宣言』（岩波書店・1995年）
F・フュレ 大津真作訳『フランス革命を考える』（岩波書店・1989年）
F・フュレ、M・オズーフ 河野健二他訳『フランス革命事典1・2』（みすず書房・1995年）
福井憲彦編『フランス史』（新版世界各国史12 山川出版社・2001年）
M・モネスティエ著 吉田春美他訳『図説死刑全集』（原書房・1996年）

The Guillotine and the Metric System :“Body” in the French Revolution

SASAGAWA Hiroshi

This paper is to show a class on the French revolution, especially its political culture. The Revolutionary Government of France changed many systems. In my class, from a point of “body”, the following two themes are emphasized. One is the guillotine, which is supposed humane and fair means of execution for everybody. The other is the metric system which comes originally from the measurement of the earth. The metric system replaced the previous way of measuring in France that was based on the measurement of human body. These changes brought a new sense of body and space for contemporaries and had them recognize a new society. With a music in the French Revolution named “the guillotine” and the diary of a citizen, Guittard, I smoothly have students think about the political culture in the French Revolution.

Key Words : the French Revolution, Reign of Terror, political culture, the guillotine, the metric system,

小学校理科エネルギー分野の指導に関する提案

—とくに電磁気教材に関して—

ひろ せ あき ひろ
廣瀬 明浩

抄録：本稿は、小学校教員を対象とした研修会での講義内容の報告である。現行の学習指導要領では、小学校から高等学校までの学習過程においてスパイラルな学習指導を目指している。小学校理科におけるエネルギー分野の教材を、中学校および高等学校の学習指導の観点から考察し、小学校理科教員に向けた指導法の提案を試みた。

キーワード：理科教育、エネルギー、小学校理科、磁石の性質、電気の利用、内部抵抗

1. はじめに

筆者は平成24年8月に、公益社団法人日本理科教育振興協会主催の「第4回関西地区小学校教師のための理科実験セミナー」で講師を務めた。本セミナーでは小学校学習指導要領理科に示された「A物質・エネルギー」の学習内容のうち、主として磁石の性質（3年）と電気の利用（6年）に関連する実験教材の扱い方や作り方、実験結果に対する考え方を取り上げた。「磁石の性質」では磁極の分布の視覚化を行い、着磁・消磁の原理を粒子モデルで考えるための指導法を提案した。また「電気の利用」では、コンデンサの充・放電現象の考察およびコンデンサの製作を行い、また電熱線の発熱の実験指導において陥りやすい失敗例について考察を行った。

いずれの講義内容も、小学校理科におけるエネルギー分野の教材を、中学校および高等学校の学習指導の観点から考察し、小学校理科教員に対して教材理解に関する提案を試みたものである。これは、小・中・高校の理科教育を4つの共通テーマ（「粒子」、「エネルギー」、「生命」、「地球」）で構成し、各教員が他校種の学習内容まで視野に入れたスパイラルな学習指導を展開するよう求めている現指導要領の考え方とも一致する。以下本稿では、講義内容に関する詳細を報告する。

2. 講義内容

(1) コンデンサのつくりとはたらき

①コンデンサへの充放電

（充電操作と仕事）

大容量コンデンサ（電気二重層型 2.3V-10F）と手回し発電機を極性に注意して接続し、ハンドルを一定の速さで回して充電する。充電中にハンドルを回しながら接続を切る

と、ハンドルの回転が急に軽くなることを実感できる。コンデンサに充電する過程では、回路内で電子が動かされるため電子のエネルギーが増大する。この増加量に相当する仕事を手が行う必要があるので、ハンドルの手応えが重くなる。小学校理科では仕事量を扱わないため、講義では仕事の定義とエネルギーの増減と仕事のやりとりの関係について説明を行った。

〈充放電特性と仕事〉

コンデンサに電流計を接続した状態で充電を行い、充電過程での電流値の変化と、手回し発電機のハンドルを回す仕事との関係を考えた。コンデンサ内部では極板間が絶縁されているので、充電によって電子がコンデンサ内部に詰め込まれていくイメージを説明した後に、充電過程における電流計の示度の変化を受講者に予想させた。その後、充電過程での電流値の変化を演示した。なおコンデンサの充電時には、図1に示すような電流値の変化が観察される。

最後に、充電過程でのハンドルの手応えの変化を予想させた。充電が進むと電流値が減少するので手がする仕事も減少し、手応えは徐々に軽くなる。多くの受講者は、電流値の変化と前項（〈充電操作と仕事〉）での学習結果をもとに、正しく結果を予想することができた。

〈充電電流とハンドルの回転の向き〉

充電中に手回し発電機のハンドルから手を離すと、コンデンサから放電されるのでそれはたらきでハンドルがひとりでに回転する。このときの回転の向きを予想させると、ほぼ全員が充電時と反対向きに回転すると考える。ぜんまいやゴムなど力学的なはたらきを関連づけたり、充電時と放電時では電流の向きが逆になることから判断した結果であるが、実際には充電時と放電時でハンドルの回転の向きは同じである。

受講生は一様に意外な結果に驚くが、その仕組みを小学生に説明するのは不可能といってよい。電磁誘導に関わって、高校で学ぶレンツの法則の理解が求められるからである。図2は手回し発電機に用いられている模型用モーターの構造を、模式的に示したものである。いま、鉄芯を含んだコイルABを、時計回りに回転させたときに生じる誘導電流の向きを考える。レンツの法則より、A端にS

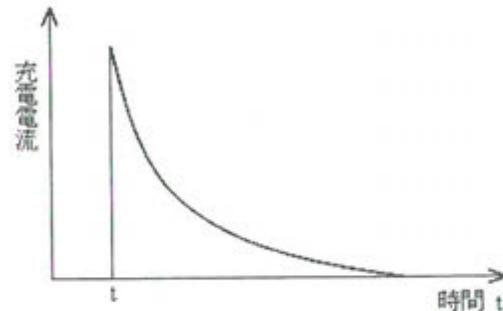


図1 コンデンサの充電電流特性
(tから充電が始まった)

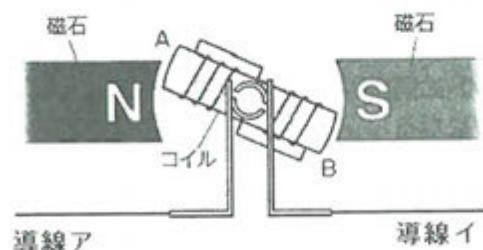


図2 模型用モーターの構造中学校理科
教科書「未来に広がるサイエンスマ
イノート」啓林館に加筆修正

極が生じるように（あるいはB端にN極が生じるように）コイルに誘導電流が流れるので、この電流は導線アからコイルを通って導線イの向きとなる。したがって、コンデンサの電極のうち導線イにつないだ側が+極となる。次に接続を保ったまま放電させると、コ

ンデンサからの電流は導線イからコイルを通って導線アの向きとなる。コイルに流れる電流の向きから、A端にはN極が、B端にはS極が生じるので、コイルは時計回りに回転する。このように手回し発電機とコンデンサの接続を変えなければ、充電時と放電時でハンドルの回転の向きは一致する。

このように結果の意外性という観点から見るとおもしろい実験ではあるが、仕組みの説明には、モーターおよび発電機の構造と電磁気現象を関連づけて理解する必要があり、教員研修において取り扱うことはあっても、小学生の学習に適したものであるとは言い難い。

②コンデンサのつくり

小学校の指導要領では、「身の回りには、電気をつくりだしたり蓄えたり、変換したりするなどの電気の性質や働きを利用した様々な道具があることをとらえるようにする。ここで扱う対象としては、電気を蓄えるものとして、例えば、コンデンサなどの蓄電器が考えられる。」とあるだけで、コンデンサの構造については何もふれられていない。コンデンサの構造について学ぶのは、現行指導要領においても高等学校物理においてだけであり、これは高校で理系を選択したものだけが学ぶ内容であると考えてよい。したがって小学校教員の場合、ほとんどの者がコンデンサの構造を知らずに授業で扱っていると考えられるので、本研修ではその基本的な構造を、簡単な工作を通して理解する内容とした。

コンデンサは、2枚の導体板で絶縁体をはさむことで、簡単に作ることができる。アルミホイル、フィルムケース、ゼムクリップを使って図3のような工作を行い、帯電させた塩化ビニル棒をゼムクリップの先端に数回こすりつけると蓄電される。その後、片手でアルミホイル部分を持ち、もう一方の指先をゼムクリップの先端にふれるとゼムクリップと指先の間で放電が起り、軽い電気ショックを感じる。

(2) いろいろな磁石と磁化のしくみ

①身の回りに見られるいろいろな磁石と磁化のされ方の観察

黒板への掲示物を作成するのに、板状ゴム磁石は非常に便利である。加工が簡単なだけでなく、板状ゴム磁石どうしをどのような向きに合わせても、反発することなく互いに磁力で引き合う。この現象は、磁極には単極子が存在しないことと一見矛盾するように思われる。図4は板状ゴム磁石の磁力面に鉄粉を散布することによって得られたパターンである。N

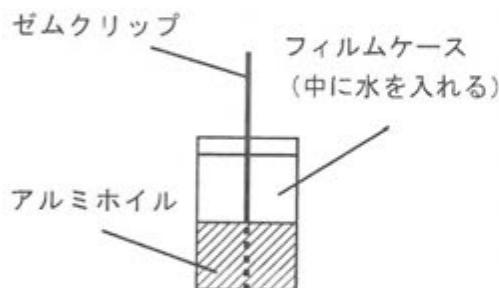


図3 簡単なコンデンサ

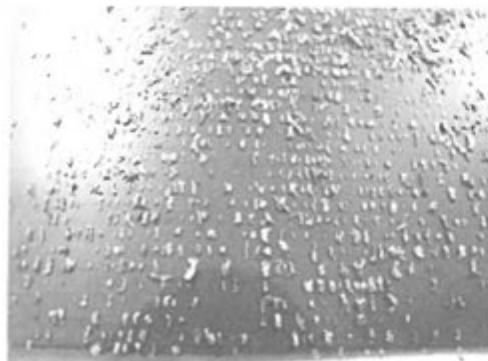


図4 板状ゴム磁石の磁化パターン

極と S 極が縞模様状に交互に並んでいることが推測できる。受講者には、板状ゴム磁石が磁力によって自由に貼り付くことを確認させた後に、磁極のでき方を推測してもらった。普段使い慣れているものであるが、その便利さを支える工夫を視覚的に観察できることに、非常に興味を示していた。

円盤形のフェライト磁石は、いろいろな磁化のパターンを呈する。図 5 は理科の実験教材として販売されているもので、面全体が同極であることがわかる。これに対してホームセンターなどで販売されているものの中には、図 6 のようなパターンを呈する場合がある。板状ゴム磁石ほどパターンが緻密でないので、図 6 右のようにずれを生じたままで引きつけ合うことになる。

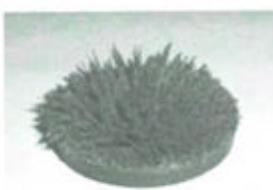


図 5 面全体が同一の
磁極の場合

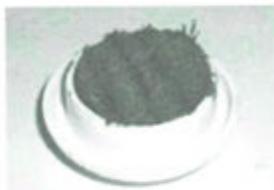


図 6 面が交互に磁化されている場合



② 磁化現象を粒子概念で

市販のフェライト磁石を使って、着磁および消磁現象を粒子モデルで考えることを試みた。フェライト磁石を鉄製乳鉢で丹念に碎くと、図 7 のような小片の集まりができる。小片には磁極が存在するので、互いに弱く引きつけあっている。乾燥しているが粘着性があるので、不思議な手触りを呈する。これを手のひらでよく「練り」、試験管を入れる。この状態では磁極の向きがばらばらなので、全体として磁力は生じない。次に強力な磁石の一方の極で、「縫い針を磁化する」要領で試験管を一方向にこする。小片の磁極の向きが揃うので、鉄粉や小型のゼムクリップを引きつけるだけの磁力が生じる。さらに、試験管を激しく振ると磁極の向きにばらつきが生じるので、再度磁力が消失する。

受講者にこの現象を確認させたあと、磁石の小片を分子磁石のモデルと置き換えて着磁と消磁をモデルを使って説明した(図 8)。さらに、磁化した鉄棒の消磁法を考えさせた。アルニコ磁石を使って磁化させ



図 7 フェライト磁石を碎いたもの

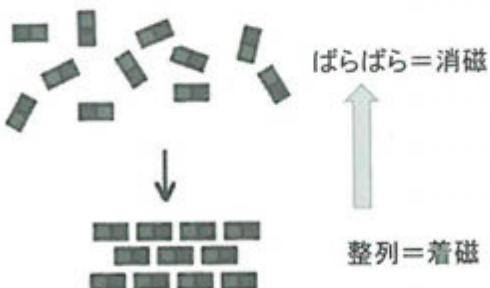


図 8 着磁・消磁の粒子モデル

た鉄棒は、ハンマーによる打撃やバーナーによる加熱で容易に消磁させることができる。いずれの場合も、分子磁石の向きがばらばらになることによって起こる現象である。

(3) 電流による発熱

現行の小学校学習指導要領解説 理科編の第6学年「A(3)ーウ」には、「電熱線に電流を流すと発熱するが、電熱線の長さを一定にして、電熱線の太さを変えると発熱する程度が変わることをとらえるようにする。」とある。電熱線に加わる電圧と電熱線の長さが一定のとき、電熱線が太いほど消費電力が大きくなるが、指導要領にこの関係が明確に記述されているわけではない。しかしシェアの大きい教科書（啓林館、東京書籍、大日本書籍）にはいずれも、「電熱線が太いほど発熱量は大きくなる。」との記述が見られる。単純な関係であるので、実験の再現性も高いと思われがちであるが、電源の種類や状態によってはこの関係を再現できないことがある。また小学校理科の電流に関する学習では、電圧の概念が一切扱われないので、教員にも電圧に関する理解が不足している可能性がある。したがって本研修では、電源の種類によって結果にばらつきが生じることを示し、教員自身が電圧の概念を理解して指導を行うことの重要性を提案した。

①電源の内部抵抗と電熱線の発熱量

図9のように、起電力 E (V)、内部抵抗 r (Ω) の電池を用いて、回路に I (A) の電流を流そうとするときについて考える。回路が閉じていなければ、電流は流れない。このとき、電池の両極に電圧計を接続して測定すると、 E (V) を示す。次に回路を閉じて I (A) の電流を流すと、内部抵抗の部分では $I r$ (V) の電位降下を示す。さらに外部抵抗の部分で V (V) の電位降下が生じる。電位降下の和 ($I r + V$) が電位上昇つまり電池の起電力に等しい。

よって $E = I r + V$ これを変形して

$$V = E - I r$$

この式から2つのことが読み取れる。ひとつは、無負荷のときに測定した電源の電圧値より負荷抵抗に加わる電圧値の方が小さくなるということ。もうひとつは、電池の起電力 E が一定なら、電流 I が強く流れるときつまり電熱線が太いほど、電熱線に加わる電圧 V が小さくなることである。消耗した電池では、電池の起電力 E が小さくなり内部抵抗 r が大きくなるので、この傾向はさらに顕著になる。

次に、電熱線での発熱量を電熱線の消費電力で考える。電熱線の電気抵抗を R (Ω) とする。 $V = E - I r$ は、 $I R = E - I r$ と書き換わる。

電熱線での消費電力 P (W) は $P = V \times I$ これをオームの法則 ($V = I R$) を使って書き換えると

$$P = I \times I R = I \times (E - I r)$$

よって

$$P (W) = I E - I^2 r$$

この式は、乾電池を用いて回路に電流を流すとき、電流が強くなるほど内部抵抗による影響が大きくなり、乾電池の能力が小さくなることを意味している。この式に充電式ニッケル水素電池（単三型）およびマンガン乾電池（単一型）の平均的な起電力と内部抵抗の

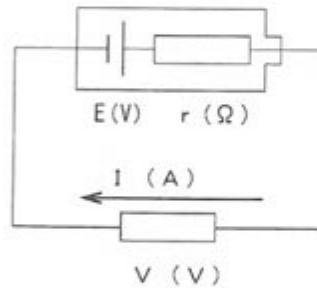


図9 乾電池の内部抵抗

値をあてはめ、電熱線に流れる電流と消費電力の関係をグラフ化したものを図10に示す。マンガン乾電池よりも充電式ニッケル水素電池の方が、大電流に対応する能力が高いことがわかる。

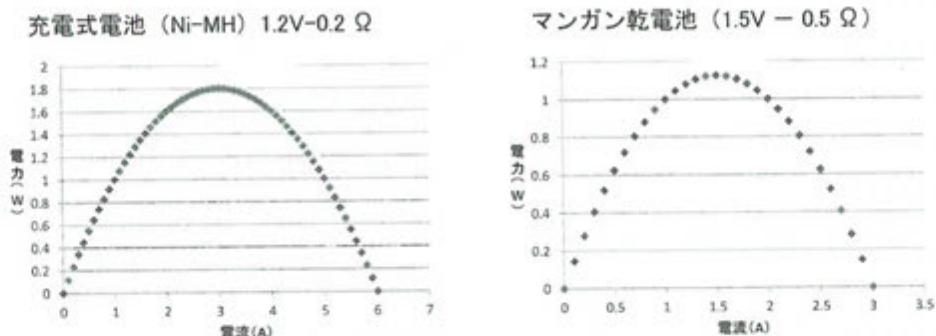


図10 電熱線に流れる電流と消費電力の関係の比較

②電源電圧と負荷電圧の違い

小学校理科では電圧を扱うことはないが、回路に流れる電流の強さを決定する要因は、素子に加わる電圧と素子の電気抵抗である。前述のように乾電池には内部抵抗が存在するので、電源の電圧が変化しなくとも、素子の抵抗値によって素子に加わる電圧は変化する。電源に電源装置を用いても同じである。一方で、乾電池を直列に2個接続した場合は1個のときより豆電球が明るく点灯するので、乾電池の2個直列によって豆電球に3.0Vの電圧が加わると考えてしまうことが多い。とくに電流による発熱現象など消費電力に着目して考えねばならないときは、素子に加わる電圧を無視して実験指導を行うと、細い電熱線の方が発熱量が大きいという結果になる場合がある。こうした誤解を少しでも解消するために、以下に示すような方法で、電源電圧と負荷電圧の違いを明確化することを試みた。

まずはじめにニクロム線にU字型にしたみつろう粘土を置き、通電による発熱でみつろう粘土が溶け落ちることを確認した。その後、電流による発熱量が次の式で決まるのを説明した。

$$\text{発熱量 [J]} = \text{電圧の大きさ [V]} \times \text{電流の強さ [A]} \times \text{通電時間 [秒]}$$

次に電源装置を使って次の手順で測定を行った。

- ① 電源装置の出力端子にデジタルテスターを接続し、電熱線はつながずにスイッチを入れ、電圧調整つまみをまわしてテスターの表示が1.5Vになるようにする。
- ② 電熱線を電源装置に接続し、スイッチを入れる。
- ③ テスターを用いて電熱線に加わる電圧を測定したときの値を予想させる。
- ④ 電熱線に加わる電圧を測定し、結果を確かめる。

③ではほぼ全員が1.5Vになると考えた。④の測定結果は1.1V前後であった。この結果を受け乾電池や電源装置に内部抵抗が存在することを説明した。

最後に結論として、電熱線の太さによる発熱の違いを実験する場合は、内部抵抗の小さな充電式ニッケル水素電池を使うのがベストであること、無ければ新品のアルカリ乾電池を使うこと、マンガン乾電池は内部抵抗が大きいので使わないことを提案した。また、電

流に関する学習指導を行う場合は、教員として理解しておくべき内容として次の4項目を提案した。

- ①電圧がはたらかないと、回路に電流は流れない。
- ②電圧は電位差ともいう。電流は電位の高い方から低い方へ流れる。
- ③抵抗のあるところを電流が通過することによって、電位が下がる。
- ④導線では電位に変化はないと考えてよい。
- ⑤電源の一極の電位はいつも0(V)である。

3. おわりに

教員免許法の改正に伴い、小学校教員養成課程を有する大学が急増している。また教員の世代交代もすすみ、若手教員の増加が著しい。そんな中で小学校教員からは、「理科の実験が苦手である。」「理科の授業の準備に時間がかかり面倒である。」といった声を耳にすることがある。現行指導要領では、言語活動の充実とともに理数教育の充実がうたわれている。しかし科学教育振興機構の調査によれば、小学校教員の半数以上は理科が苦手であるという。

こうした現状を少しでも改善するために、中・高の理科教員が専門的な見地を適度に導入した教材のあり方を提案することは、有意義なことであると考える。「小学校でもっとしっかりやってほしい。」などと批判的な意見ばかりを言うのではなく、相互に情報交換を行いつながりを深めていくことが、教育現場では最も大切なことではないかと考える。

■参考文献

- ・小学校理科教科書 「わくわく理科6年」 啓林館
- ・小学校理科教科書 「新しい理科6年」 東京書籍
- ・小学校理科教科書 「たのしい理科6年-2」 大日本図書

A Proposal about the Academic Guidance of the Electromagnetics Learned in Elementary Education

HIROSE Akihiro

This report describes details of the training for elementary school teachers. The designated "Course of Study" requires teachers to provide continuous guidance from elementary through to advanced education. Electromagnetics subject matter learned in the elementary schools were studied from the viewpoints of jr. and sr. high school teachers, and teaching methods were adjusted for elementary school teachers.

スピーキング練習法「OSB」の推定される効果

—初学者の場合—

しの
篠 崎 文哉

抄録：これまで様々なスピーキング練習法（指導法）が開発され、教育現場で実践されている。Oral Sentence Building（口頭並べ替え、以降OSB）もそのひとつであるが、依然として広くは認知されていない。その一因として、大学生等を対象とした研究結果は報告されているものの、入門期である初学者に対しての効果については十分な議論がされておらず、具体的な影響が不透明であることが挙げられる。そこで、中学1年生が継続的にOSBを行った結果、どのような効果があったと思われるかをアンケートで調査した。

キーワード：OSB、口頭並べ替え、スピーキング、構文力、ワーキングメモリ

I. はじめに

中学校や高等学校においてスピーキング力の改善が課題として挙げられて久しい。小学校では2011年に外国語活動が開始され、一層音声指導の重要さが際立ってきた。四技能（リスニング力、スピーキング力、リーディング力、ライティング力）を偏りなく育成する必要があることから様々な教授法やアプローチ、活動等が提案されてきたが、日本人が特に不得手としているスピーキングの技能を（理想的には他技能もあわせて）より効果的かつ効率的に伸ばす方法はこれまでにも増して模索しなければならないであろう。その一端を担うため、僅かであるがスピーキング練習法「OSB」の効果について考察したい。

II. Oral Sentence Building とは

OSBとは、予め一つの英文が3つに区切られ、順番が入れ替わったものを聞き、意味が通るように並べ替え、口頭で再生する練習法である。文字に頼ることなく行われる。具体的な手順は表1（次頁）の通りである。基本的に英文はチャンク（意味をなす語の塊）で区切られており、不自然な分け方はされない。例えば、(a special / my sister makes / cake for my birthday) のようなものは使用されない。

表1 Oral Sentence Building の手順

問題	a special cake / my sister makes / for my birthday
ステップ1	a special cake を聞き取る。
ステップ2	約1秒後、my sister makes を聞き取る。
ステップ3	約1秒後、for my birthday を聞き取る。
ステップ4	3つのチャンクを意味が通るように並べ替え、My sister makes a special cake for my birthday. と答える。

III. Oral Sentence Building 中の脳活動

1. Shadowing・Repeatingとの比較

このように英語の音声を開き、再生する練習は Shadowing（以降 SH）や Repeating（以降 RP）に似ており、共通点が多い。玉井（2002）は SH を学習者が入力情報を傾聴している際、聞こえてきた発話を追いかけ、可能な限り厳密に繰り返すリスニングタスクだと定義している。RP は元の発話を聞いた後、一定の休止があり、その間に各文を繰り返す練習法だとされている（Hiramatsu, 1999）。つまり、通常 SH は連続した文が流れ続けるが、RP は文ごとに区切られている。（現在、SH や RP には様々な効果を狙った複数の行い方があるが、ここでは割愛する。）

また、門田（2007）は、SH を「オンライン活動」、RP を「オフライン活動」とみなしている。それは、RP を行っている際、学習者は入力情報を処理する時間をより多く与えられているからである。言い換れば、RP はより意味分析を伴っている可能性が高い。文単位での発話であり、休止があることでより意味分析を行う機会があることから、OSB は SH よりも RP に近い存在であると言える。しかしながら、RP とは大きく異なる点がある。次項に、その点について意味分析に焦点を当てながら論ずる。

2. 自動化と処理水準

自動化とは、意識をしなくとも入力情報を処理できる能力のことを指すが、これは流暢な話者であるほど身に付いているものだと考えられ、自動化が進んでいると表現できる。The Attention-Processing Model では、語彙や文法に関わる低次処理は学習を積み重ねれば自動化され、高次の認知処理により注意を払うことが可能になるとしている。加えて、コントロール処理される知識は一時的な能力であるのに対し、自動処理される知識はほぼ永久的だとしている（McLaughlin, 1987; 1990）。処理速度は、どの程度自動化が進んでいるかで異なってくるが、同時通訳者がスムーズに訳せるのは自動化を促進するような練習を大量に積んできたからであろう。

次に、処理水準とは、ここでは単語や文などの入力された聴覚情報をどれほど深く処理しているかを指す。Craik & Lockhart (1972) は、より意味的ないし認知的な分析を行っているほど、処理の深さは深いと述べている。更に、意味的・認知的分析を要する刺激を与えられた時の方が、要しない刺激を与えられた時よりもインプットは長く持続すると主張している。これは意味的・認知的分析を行う方がより多くの注意資源を使用しているからであると考えられる。こういった分析は処理水準としては最も深いレベルであり、精緻化（既に備わっている知識と新情報を結びつけ、記憶に残りやすいようにすること）が最

大値に達することを示している。前項でも述べたように、RPは意味分析を行う時間を比較的多く与えられていることから、より処理水準が深い練習方法であるが、OSBは更に認知的負荷がかかっている可能性がある。

それはOSBが二重課題であるからである。Baddeley & Hitch (1974)は、二重課題について説明しており、はじめに行う課題を第一タスク、次に行うものを第二タスクと呼んだ。SHやRPでは、端的に言えば聞いた発話を繰り返す第一タスクのみであるのに対し、OSBでは、聞き取った3つのチャンクを並べ替え（第一タスク）、発話する（第二タスク）必要がある。チャンクごとにリハーサル（内語反復；次項で詳述）を行うことから、入力情報（学習事項）をより長時間保持することができるのでないかと予想できる。

3. 記憶の過程とワーキングメモリ

Atkinson & Shiffrin (1971)のモデル（図1）によると、五感から入力される情報は3種類（感覚記憶・短期記憶・長期記憶）の記憶に分けられる。その中で、特にOSBと深い関係があると思われる的是短期記憶である。まず、入力される情報は感覚登録器で感覚記憶としてごく短時間保持される。次に、選択的注意によって必要だと判断された情報のみが短期貯蔵庫に短期記憶として一時的に保持される。Peterson & Peterson (1959)の研究では、短期記憶に移された情報は約15秒程度しか保持されず、その間何も施されなければ約90%もの情報が忘却されるとしている。

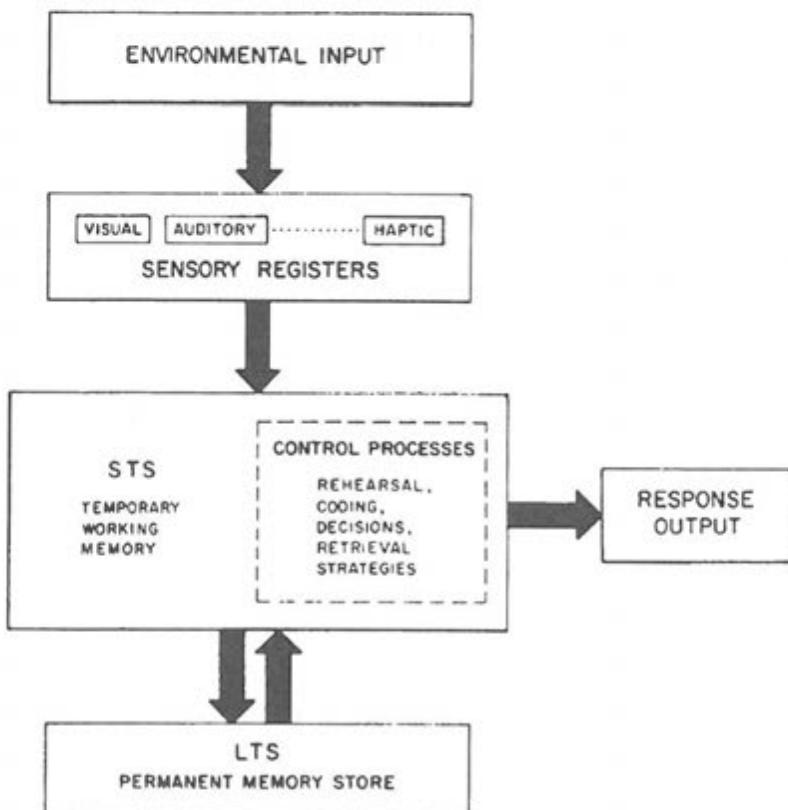


図1 Atkinson & Shiffrinの記憶モデル (Atkinson & Shiffrin, 1971)

そこで、より長時間記憶に留めておくためにリハーサルを行う必要がある。リハーサルには維持リハーサルと精緻化リハーサルがある。維持リハーサルとは、情報をその役割が終えるまで短期記憶内で保持するために内的もしくは外的に反復することである。例えば、人の名前を一時的に覚えておくために何度も頭の中でその名前を繰り返すことが挙げられる。精緻化リハーサルとは、情報を他の知識と関連付けながら反復することである。人の名前を覚えるために、その人の趣味や職業等と結び付けることなどがその例である。門田(2007)のモデルによれば、新情報は精緻化リハーサルを行うことで長期記憶に転送され、獲得されるとしている。このことからも、新出単語や文法を学習する際には、より分析的な視点を持つことが記憶の定着につながることが分かる。

前述したように、OSBと特に関係性が強いのは短期記憶だと思われるが、情報を保持するだけではなく、タスクを達成するために処理もしていると考えられている。この処理機能を強調した考えがワーキングメモリ（作業記憶、以降 WM）である（Baddeley & Hitch, 1974）。例えば、電話番号を一時的に記憶し、すぐに電話をかけるといったことである。会話をする時や車を運転する時など、日常生活においても程度の差はあれWMを使っている。よく英語の授業中に行われる Read & look up（生徒が英文を黙読した後、教師の合図で顔を上げ、英文をそのまま口頭で再生すること。）は WM を十分に使用した練習方法である。当然、SH や RP、OSB を行う際も WM を使用していると考えられる。

4. 音韻ループと Oral Sentence Building

WM は、図 2（次頁）のように 4 つのサブシステム（中央実行系・視空間スケッチパッド・エピソードバッファ・音韻ループ）から構成されている（Baddeley, 2003）。OSB は、この中でもとりわけ音韻ループと深い関わりがあると思われる。音韻ループとは、入力された情報を処理する時、その種類（言葉や図など）によらず言葉で表せるものを一時的に保持し、長期記憶から引き出すことのできる言語知識と相互作用するシステムである。音韻ループは、音韻性短期ストア（情報を受動的に扱う）とサブボーカル・リハーサル（情報を能動的に扱う）の大きく 2 つのシステムに分けられる。音韻性短期ストアとは、入力された音情報を音のまま一時的に記憶しておく場所のことを指す。この音情報は約 2 秒程度で消えるとされている。また、サブボーカル・リハーサルとは、音韻性短期ストアに一時記憶された音情報が約 2 秒間で消去されないように言葉で表し、頭の中で繰り返すことを指す。（門田, 2007 ; Baddeley, 2002）。

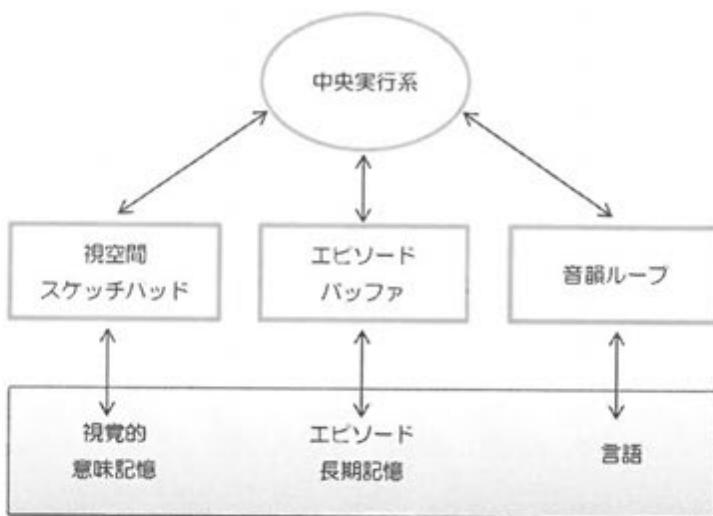


図2 ワーキングメモリのモデル (Baddeley, 2000より筆者翻訳)

表1で示したOSBの例題を元に音韻ループとの関係を見ていく。まず、「a special cake」という音を聞いた時、サブボーカル・リハーサルを行い言語として認知できれば音韻ループが関わってくる。その音情報は、先述の通り、音韻性短期ストアで保持される。その後に維持または精緻化リハーサルを行わなければ、瞬時に言語情報「a special cake」は抹消される。約1秒後、次のチャンクである「my sister makes」を同様に聞き取る必要があるが、同時に「a special cake」もリハーサルし続けていなければならない。また、文法知識が備わっている学習者であれば、この2つのチャンクをリハーサルしながら、どちらが先に来るか考えることができる。もしくは、その語順自体が学習事項であった場合、リハーサルしながら考えることで定着につながると推測できる。更に約1秒後、最後のチャンクである「for my birthday」を聞き取り、3つのチャンクをリハーサルしつつ最も適当だと思われる語順に並べ替え、可能な限り発音やプロソディに注意し、再生する。

以上からOSBは、各チャンク（音情報）を言語情報として音韻性短期ストアに一時的に保持し、リハーサルを繰り返しながら並べ替えをし、発声する練習であると説明できる。

IV. 中・上級者を対象とした先行研究

現在、OSBが及ぼす効果についてはほとんど検証されていないが、国立大学の大学生17名、同大学院生11人、中国人研究生1人、科目等履修生1人の計30人を対象に行った研究結果が報告されている(Shinozaki, 2013)。当研究の実験協力者の英語力は、中レベルから上レベルであった。事前テストには、WMの個人差を測るために考案された二重課題であるリーディング・スパン・テスト（一文ごとに提示される文を読み、文法性判断と文末語の暗記を同時に行い、最後に暗記した単語を可能な限り全て入力するテスト、以降RST)(Daneman & Carpenter, 1980)、リスニング・スパン・テスト(RSTと同様の二重課題であるが、読むのではなく聞いて行うテスト、以降LST)(芋阪, 2002)、絵描写課題(4コマ漫画の描写)、及びOSBテストが課された。事後テストには、絵描写課題とOSBテストが実施された。事前・事後テストの間に、協力者は10週間(週3回、1回10問)に

わたって各自 OSB 練習に取り組んだ。

RST・LST のスコア、もしくは各自が取り組んだ OSB の練習回数と事前テストから事後テストにかけての OSB テストスコアの変化並びに絵描写課題で発せられた語数の変化について相関分析が行われ、顕著な伸びが見られた協力者にはインタビューが行われた。OSB テストの採点には、完答で正解とするもの【基準 A】とグローバルエラーが無く、並びの順番が正しければ正解とするもの【基準 B】の 2 種類が設けられた。

OSB の練習回数と OSB テストスコアの増減について相関分析が行われた結果、基準 A で中程度の相関 ($r = .366, df = 28, p = .046$) が見られた。つまり、OSB に一定数取り組めば、機能語（前置詞や冠詞等）に注意を向けることができるようになり、文法的正確性が向上したと考えられる。加えて、インタビューの結果から OSB は構文力を向上させる可能性があることが示唆されている。

また、OSB の練習回数と絵描写課題における発話総語数 ($r = -.130, df = 28, p = .492$) や発話異語数 ($r = -.176, df = 28, p = .352$) とに有意な相関が見られなかったことから、OSB は流暢さの向上には直接繋がらなかつたことが報告されている。しかし、非流暢さ（言い直し、中断、反復等）に関するエラー数は有意 ($r = -.402, df = 28, p = .028$) に減少したため、より正確な表現を選び、使用することができるようになったことが推測されている。インタビューの結果からは、流暢さが改善されたという意見もあったが、概して OSB は流暢さよりも正確さに肯定的な効果があると示唆されている。

V. 中学1年生（初学者）を対象としたアンケート調査

大学生以上（中・上級者）に対する OSB の効果は前項でまとめたものが報告されているが、初学者に対する研究は未開拓であると言える。そこで、本研究では初学者である大阪教育大学附属中学校1年生（154人）を対象に、2013年5月中旬から同年12月の間（ただし、夏期休暇中や基本実習中の実施は無し）にあった授業中にそれぞれ約10分程度を割き、計8回 OSB を行った。その後、「継続して OSB を行った結果、自身にどのような効果があったと思われるか」についてアンケート調査を実施した。

実際使用した OSB 問題文は、授業で使用している検定教科書「ONE WORLD English Course 1」（教育出版）からの抜粋に加え、その単元の新出単語や文法を主に含め作成した類似問題であった。OSB を行うタイミングは、文法事項等を導入した授業の次の時間を基本としている。手順としては、まず生徒は2人1組になり、問題を出し合う。その次に、教師が出題し、クラス全体が声を出して問題を解く。その後、発音やプロソディに注意を向かせながら正解文を教師に統いて復唱させる（余裕がある生徒には、問題文や正解文を見ずに RP するように促す）。生徒は各 OSB の問題を少なくとも2回解き、その後1回音読（もしくは RP）しているため、計3回は各文に触れる事になっている。

上記の過程を経て、生徒自身が実感していることをアンケート（自由記述式）で調査した。次頁に実際の意見（どのような力がつく・ついたと思うか）を一部紹介する。2項目以上にまたがる場合は、より重要だと思われる方に分類した。

全般的なこと・四技能について

- ・英語の全体的な力
- ・少し長い文が書けるようになった
- ・すらすらと文章を読めるようになった
- ・リーディングの力がついた
- ・長い文章を理解する力
- ・考える力
- ・考えて話すようになった
- ・少しはやく文が出てくるようになった
- ・文法を理解し、自分の思っていることを伝える力
- ・スピーキング力が伸びる
- ・難しいが、言われた英語を一時記憶して、その意味も考えるからいいと思う
- ・かたまりごとに意味を理解する力がついた
- ・頭の中で整理しながら、英語を正しく聞き取る力

単語について

- ・単語を覚えることができ、テストでも間違いにくくなると思う
- ・単語を1つのかたまりだと考えて書いたりできるようになった
- ・セットで覚えることができるので、テストでも迷わずすらすら書ける

文法（構文）について

- ・文の区切り方が分かった
- ・整理する力がつく
- ・文法のリズム
- ・文の構成が分かるようになった
- ・文がいくつかの部分に分かれて頭に入るので、応用ができるようになったと思う
- ・はやく文を作るのに役立つ
- ・意味を理解して文を組み立てる力
- ・頭の中で文の構造を考えるようになった
- ・単語の順番はなんとなくつかめた
- ・文法が前よりできるようになった
- ・主語の後に動詞がくるなど、順番が分かるようになる
- ・動詞の前後に～を入れるなどが分かる
- ・続けてみて、文を組み立てる力が少しずつついた
- ・一つひとつの単語で文を作るのは難しいが、Oral Sentence Buildingではかたまりで覚えることができる
- ・フレーズで覚えられるし、同じタイプの文法であれば単語を入れ替えればいいので応用力がついた
- ・肯定文なのか疑問文なのかの区別する力がつく

以上から、OSBを繰り返し行うことで「文を一単語ごとに捉えることが減り、かたまり(=チャンク)で理解できるようになるため、その結果、リスニング時の理解速度を上げ、また文を構築する速度が向上したことで、スピーキングやライティング時にも肯定的な影

響を与える」ということが可能性として見いだされた。また、意味分析を行っていることがアンケート結果からも見受けられ、加えて OSB は並べ替えるというタスクの分、注意資源が多く使われると思われるため、やはり認知的負荷の大きい練習方法であることが分かる。

単語や文法の定着という意味では、認知的負荷の大きい方が効果はあるかもしれないが、実際の会話で流暢に話すためには極力英文構築に注意力が削がれないようにならなければならない。その方法の一つとして、語を單一的に考えるのではなく、チャンク化することが挙げられる。そして、チャンク化することで注意資源を使う対象数が減り、認知的負荷が軽減され、WM を効率よく使うことが可能になると思われる。チャンクをリハーサルしながら組み立て音声化する作業である OSB を継続的に行なうことで、チャンクの感覚が養われ、WM をより有効に使うことができるようになり、徐々に英文構築の自動化に繋がると推測される。

VI. おわりに

本研究結果は、OSB の効果を主観的な意見から推測したものであるため、より客観的な指標が今後求められる。

参考文献

- Atkinson, R. C., & Shiffrin, R. N. (1971). The control processes of short-term memory." *Technical Report 173. Psychology Series. Institute for Mathematical Studies in the Social Sciences, Stanford University.*
- Baddeley, A. (2000). The Episodic Buffer: A new component of working memory? *Trends in cognitive Sciences, 4*, 417-423.
- Baddeley, A.D. (2002). Is working memory still working? *European Psychologist, 7*, 2, 85-97.
- Baddeley, A. (2003). Working Memory: Looking back and looking forward. *Nature Reviews: Neuroscience, 4*, 829-839.
- Baddeley, A. D., & Hitch, G. J. (1974). Working memory. In G.A. Bower (Ed.), *Recent advances in learning and motivation, 8*, 47-90. New York: Academic Press.
- Craik, M., & Lockhart, S. (1972). Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 11*, 671-684.
- Daneman, M., & Carpenter, P.A. (1980). Individual differences in working memory and reading. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 19*, 450-466.
- Hiramatsu S. (1999). Inferencing tasks as a process-oriented approach to second language acquisition. *Chugoku Tanki Daigaku Kyou, 30*, 173-184
- McLaughlin, B. (1987). *Theories of Second-language Learning*. London: Edward Arnold.
- McLaughlin, B. (1990). Restructuring. *Applied Linguistics, 11*, 2, 113-128.
- Peterson, L. R., & Peterson, M. J. (1959). Short-term retention of individual verbal items. *Journal of Experimental Psychology, 58*, 193-198.
- Shinozaki, F. (2013). A Practical Evaluation of the Effects of Oral Sentence Building

Training: Possible improvements in speaking ability. 大阪教育大学大学院教育学研究科修士論文. (未刊行).

芋阪満里子. (2002). 「脳のメモ帳ワーキングメモリ」 東京：新曜社.

門田修平. (2007). 「シャドーイングと音読の科学」 東京：コスマビア.

玉井健. (2002). 「リスニング力向上におけるシャドーイングの効果について」 日本通訳学会第3回年次大会講演. 9月23日.

Estimated Effects of Using “OSB”Speaking Exercises

—In the Case of Beginners—

SHINOZAKI Fumiya

Up to now, various kinds of speaking exercises have been developed and practiced in the classrooms. An exercise called Oral Sentence Building (OSB) is one of them, but still not recognized widely. One possible reason is that the effects of OSB for beginners have not been studied sufficiently and concrete influence is unclear. Therefore, after conducting OSB to first-year students at junior high school continuously, a questionnaire was administered to learn what seemed to be the effects of OSB.

Key Words : OSB, Oral Sentence Building, speaking, sentence structure, working memory

洋楽鑑賞教室

—物語と歌詞の幸福な出会い— ケミストリー

いとうよう一
伊藤洋一

抄録：私たちが外国語を学ぶ目的は一様ではない。かつて洋楽は音楽好きの若者の生活の一部であり、英語を学びたいという動機付けの一つでもあった。英語の歌の中には、じっくりその歌詞を吟味してみると、十分に私たちの鑑賞に堪えうる優れたものが少なくない。本稿では英語の歌の歌詞に注目しながら、人生や世界の一断面を知る手がかりとしての歌詞の役割について考察する。

キーワード：英語 歌詞 鑑賞

I. 懐かしき歌 新しき姿

2000年に製作されたガス・ヴァン・サンタ監督の『小説家を見つけたら(Finding Forrester)』は、文章を書くことが好きな高校生と、処女作で文学賞を受賞しながら二度と小説を発表することなく世の中から忘れ去られてしまった老小説家の物語である。映画が終わるとエンド・ロールが画面の下から上へと流れ始める。映画制作における役割と人名が映し出される5分間ほどは、見終わったばかりの物語を振り返る時間でもある。

初めて映画館でこの映画を観たとき、軽快なウクレレの前奏に続いてささやくような優しい男性の声がこう歌い始めた。

Somewhere over the rainbow / Way up high
And the dreams that you dream of
Once in a lullaby

Somewhere over the rainbow / Blue birds fly
In the dreams that you dream of
Dreams really do come true

そのとき何度も耳にしたことのある歌詞が心の深いところに響いてくるような気がした。その歌声は一番を歌い終わると、別の歌を歌い始めた。

I see trees of green and red roses too
I watch them bloom for me and you
And I think to myself / "What a wonderful world!"

I see skies of blue and I see clouds of white
And the brightness of day and I like the dark
And I think to myself / "What a wonderful world!"

“What A Wonderful World”⁽¹⁾を歌い終わると、再び歌は“Over The Rainbow”⁽²⁾に戻り、やがてフェイド・アウトした。二時間以上の長い物語の後に、二つの歌詞が重なって化学反応が起こり、しみじみとした感動を覚えた。少年と老人の友情物語を振り返りながら、以前から知っている二つの歌がこんなにいい歌だったんだと再認識した。「物語」と「歌」という別個のものが重なると、心を動かす不思議な力が生まれると実感した瞬間だった。

若かった頃、繰り返し洋楽のレコードをかけては、単語を自然に覚えたり、発音を真似したこともあるって、英語を教えるようになってから、英語の歌を努めて紹介してきた。教材の主題と歌の内容を関連させたこと也有った。しかし、『小説家を見つけたら』を見終わったときの感動がきっかけとなり、それ以降、歌をかけるときには、教材の題材と歌詞の内容を重ねあわせようと意識的に選曲するようになった。

2004年に、長谷川権が著した『俳句的生活』という一書を読んだ。その時『小説家を見つけたら』を観終わった時の不思議な感覚を思い出した。第三章「取り合わせ」の中で、俳人は「ことばの取り合わせ」と「音楽の和音」ほどに似ているものはないと言ふ。「単独のままでは単調な音にしかすぎないが、それが二つ三つ同時に奏でられることによって妙なる音になる」のである。年老いた小説家と小説家志望の高校生との物語を見終わった直後、“Over The Rainbow”と“What A Wonderful World”的メドレーを聞きながら私が感じたのは、映像と音源という異なる媒体が現出させた「妙なる調べ」ではなかつたろうか。「物語」を体験した後に「歌」を聞くと、「歌声」による「思い」は新たな衣装を纏う。さらには歌が物語に照射して両者の「幸福な出会い」が主題への深い理解につながる。私は物語と歌の「取り合わせの妙」について確たる思いを持つに至った。

II. 歌が流れる教室

映画『小説家を見つけたら』の中で、主人公のジャマールが通う地域の高校で、国語の授業を受けている場面がある。教師はエドガー・アラン・ポーの『大鴉(The Raven)』を取りあげているのだが、ほとんどの生徒たちは興味を示さない。かつては、英語の教科書でも英詩が読解教材として取り上げられていた。20年以上も前のことになるが、平成2年に発行された *MAINSTREAM II B The New English Reading Course Second Edition* (増進堂) の第7課“Two Ways of Looking at a Daffodil”では、詩は何のためにあるのかが説かれている。出典は英国人の C.W. Lewis が著した “Poetry For You” という一種の入門書である。その中に以下のような一節がある。

Now there are two ways of getting to understand the world—through our heads and through

our hearts, our feelings. Science tells us a great deal about how the world works, what it is made of, and so on. Science is the chief way of learning through our heads. But that's not the only way of learning about the world— perhaps not even the best way. Let's take a very ordinary object, the common wild daffodil. Here are two ways of describing it:

ここでルイスは「水仙」という題材を取り上げ、植物事典の記述と英国の詩人ワーズワースの有名な『水仙(Daffodils)』の第一連を並べて読者に提示する。

(1) Narcissus : any of several widely cultivated plants of the genus Narcissus, having narrow, grasslike leaves and usually white or yellow flowers characterized by a cup- shaped or trumpet-shaped central crown.

スイセン 数種あるスイセン属の自生植物。幅狭い草に似た葉を持ち、通常は黄色または白い花を咲せる。碗状、または喇叭状の副花冠が中央にあるのが特徴。

(2) I wandered lonely as a cloud

That floats on high o'er vales and hills,
When all at once I saw a crowd,
A host of golden daffodils:
Besides the lake, beneath the trees,
Fluttering and dancing in the breeze.

我、寂しくさ迷う / 山や谷を越えてたなびく雲の如く
突如として目の前に / 黄金色の水仙の群れ現われ
湖の畔、木々の下 / そよ風に踊るが如く揺らめきけり

一つ目の説明は客観的であり、水仙の形状や外観をよく伝えるがいかにも素っ気無い。一方、英詩の一節を読むと、曇った詩人の心を晴れやかにした黄金色に輝く水仙の花が咲きほころぶ情景が心に浮かぶ。ルイスは、科学的記述は事物を分析的に述べるものであり、詩的描写はその事物から生ずる感情を周囲のものと関連させて伝えるものであると述べている。そして、感情や情緒の表出こそが詩を成立させると説く。

昨今の教材では説明や報告のような文章が教科書の紙面の大部分を占め、文学的な描写の分量は随分と減少した。英詩が扱われていても、表紙の見返しか二つの課の狭間に印刷されていて表舞台に登場することはない。そもそも教師も生徒もそれぞれの事情で忙しく、二十一世紀の教室はゆったりした気持ちで詩を鑑賞する場ではなくなっている。結果を求めるに急なあまり、現世における利益のない詩が取り上げられることは稀である。

であれば、詩に変わるのものとして、それよりは取っ付きやすい英語の歌の歌詞を鑑賞に値する題材として取り上げられないだろうかと考えた。生徒たちの英語学習の一助になることを願って発行していた英語通信で、二年前に以下の文を記したことがある。

残念ながら (regretfully)、今は英詩が教科書でほとんど扱われなくなってしまった。私見では (in my opinion)、それに代わるのが英語の歌の歌詞である。若い頃はただ旋律が好きだとか、歌手の声に引かれて洋楽を聴くことが多い。しかし、歳月が流れてから同じ歌を聴き返すと、意外なほど歌詞の内容が理解できる。別の素材を使って勉強していても、英語の力はゆっくりと、しかし着実についてゆく。昔好きだった曲はそれを実感させてくれる。私にとって、「The Dangling Conversation」はまさにそんな一曲である。英語力の定点観測として、英語の歌を利用してみてはどうだろうか。

個人的な見解になるが、教師の仕事は種を蒔くのに似ている。成長の可能性を潜ませた精神という柔らかな土壤に一粒の種子をそっと置く。自分の手を離れた若き人が、その種子から何が育つかに心惹かれて、日々の生活の中で少しずつ水を遺ることを怠らずにいてくれたなら、花を咲かせ、実を結ぶかもしれない。「美し果実」は彼らの心を豊かにし、暮らしに潤いを与えるだろう。

この稿では筆者が親しんできた曲の中から、読解教材としてしばしば取り上げられる主題（例えば、青年期の悩み、環境、戦争、人権など）と関連した歌を取り上げ、その歌詞の内容をじっくりと鑑賞してゆきたい。また、引用されることばは旋律や律動や伴奏を伴った表現であるから、楽曲の音楽的特徴についても時に言及する。

III. 「私」に似た誰か

私たちが生きていく上で心の悩みはつきものであるが、人生の特定の時期にはその時期に固有の悩みがある。高校生の頃は、過剰な自意識、心に秘めた孤独感、自己への嫌悪感など、様々な感情が心の中で渦巻いている。洋の東西を問わずその心情は若者に共通するものであるから、身近な題材として小説に描かれるだろうし、英語の歌にもその気持ちを代弁するような歌詞が見つかる。

1970年代初期、アメリカのABCテレビが製作した“*The Partridge Family*”という若者向き番組が人気を博していた。日本では日曜日の午前に放映されていた記憶がある。番組で放映された主題歌や挿入曲はシングル盤のレコードとして発表されヒット・チャートをにぎわした。主演のデヴィッド・キャシディーが甘く切ない声で歌ういわゆるアイドル歌謡なのであるが、松田聖子のヒット曲が決して侮れないように、歌詞の意味をきちんと理解しながら聴くと、青春期の男女が共感できる部分が少なくない。

1971年にパートリッジ・ファミリー二枚目のシングル盤として発売された『悲しき青春 (Doesn't Somebody Want to Be Wanted)』⁽³⁾は次のような歌詞で始まる。

I go downtown and roam around
But every street I walk I find another dead end
I'm on my own, but I'm so all alone
I need somebody, so I won't have to pretend

I know there's someone, just waiting somewhere

I look around for her, but she's just not there

にぎやかな街に出てあてもなくさ迷うけど
どの通りを歩いてもまた行き止まりだ
群れることはないけど、何て寂しいんだろう
ボクには誰かが必要だから、かつこつけるのはもう止めよう

どこかで誰かがボクを待ってる
あちこちと街を探しても この人だという相手は見つからない

雑踏の中の孤独は、しばしば小説や詩歌に描かれてきた。どこに行ってもその前に立ち塞がる行き止まりは閉塞感を象徴している。集団を疎んじる一方で寂しさが募るのは青春期に特徴的な心情である。街を彷徨する「ボク」に歌を聞いている自分の姿が重なる。いつかは自分に合った相手が見つかると期待しながら、若者はこう思うだろう。

Doesn't somebody want to be wanted / Like me, where are you?
Doesn't somebody want to be wanted / Like me, just like me?

誰か自分が必要とされるのを / ボクみたいに望んでないかな?
キミはどこにいるの?
誰か自分が必要とされるのを / ボクみたいに望んでないかな?
このボクのように

二番の歌詞でも、自由を求めながらも、それを拒否する矛盾した思いが歌われている。疲れ果てるまで歩き回っても、探し求めている相手は見つかりそうにない。そして「ボク」はこの街を出てゆこうと思うのだが、後ろ髪を引かれる思いもある。

I'm running free, but I don't want to be
I couldn't take another day like yesterday
I'm dead on my feet from walking in the street
I need somebody to help me find my way

I've gotta get out of this town
Before I do / I'll take a last look around

自由にふるまつても そう望んでいるわけでもない
昨日のように今日を受け入れられないよ
街を歩き回って脚が棒になってしまった
誰かが手を貸してくれれば 答えは見つかるのに

この町から出て行かなきや
でもその前に / もう一度だけ探してみよう

“Doesn’t someone want be wanted like me?”で始まる一節が繰り返された後に、デヴィド・キャシディーの声が囁く。この「セリフ」の部分はまったく自然な英語なので、()で空所を設けておくと聞き取りの腕試し（または耳試し？）になる。反応のいい学年だとこの部分で教室にざわめきが広がる（もちろんいい意味で）。

You know, I'm no different from anybody else
I start each day and end each night
But it gets really lonely / When you're by yourself
Now where is love, and who is love? / I gotta know

ボクはちっとも特別な人間じやない
一日が始まって一日が終わる
一人でいると / すごく寂しくなるよね
恋人はどこ？ それは誰？
知らずにはいられない

歌を聞き終わった後に、一行目の「強い否定を表す」‘no’の使い方を解説すれば英語の勉強になるし、アイドルとファンの距離をグッと縮めることで乙女心をときめかせる作詞家の小技を知って、小さな単語が持つ大きな力に気づくかも知れない。

一つの教材と出会うとき、たとえ英語で書かれた教材であっても発達段階にふさわしい深みを持った内容でなければ生徒の興味は喚起されないものだ。一見単純なラヴ・ソングだと思われる歌であっても、親しみやすい訳を添え、的確な説明を加えることで、若者たちは歌われている内容に共感することだろう。

IV. 父からの賜物

子供たちにとってもっとも身近な大人は親である。お互いに忙しい生活の中で、親の言動や行動に接する時間は以前に比べて減っているかもしれない。しかし、人生における決断を迫られる機会がいくつも訪れる時期において、相談相手として、忠告者として親の存在はやはり大きなものである。まだまだ未熟な十代の若者には、時には厳しく叱ってくれたり、道を示してくれる大人が必要である。

アメリカ人の歌手ダン・フォーゲルバーグが1981年に作詞・作曲した『バンド・リーダーの贈り物 (Leader Of The Band)』⁽¹⁾という曲がある。その内容は親の仕事を継がずに音楽の道に進んだ父親を題材にして、自分自身もシンガー・ソング・ライターになった作者が父への思いを綴った名曲である。典型的なスリー・フィンガー・ピッキングの前奏で曲が始まり、父親の生い立ちや人となりが淡々と語られる。

An only child / Alone and wild / A cabinet maker's son

His hands were meant / For different work
And his heart was known / To none
He left his home / And went his lone and solitary way
And he gave to me / A gift I know I never can repay

A quiet man of music / Denied a simpler fate
He tried to be a soldier once / But his music wouldn't wait
He earned his love / Through discipline, a thundering, velvet hand
His means of sculpting souls / Took me years to understand

兄弟のいない / ひとりぼっちで粗野な / 家具職人の息子
その手先は / 別の仕事に向いていた
その心を知るものは / 誰一人いなかった
家を出て / 我が道をひとり歩んだ
そして僕に授けてくれた / 決して返しきれない贈り物を

もの静かな音楽家は / 単純な運命を選ばなかった
兵役に就こうとしたが / 音楽が引き止めた
その人は愛を勝ち得た / 修練と 繁くような、それでいて滑らかな演奏で
魂を彫るあなたの腕前を / 理解するまで何年もかかった

職人の息子である「父」は、彼の生きた時代には当たり前だった、親の職業を継ぐことを拒んで音楽の道に進んだ。父親が息子に自分の人生を語り聞かせてきたことをこの歌詞は示している。最後の二行を開くと、そんな父親の演奏者としての腕前が分かるまでに葛藤があったことが分かる。次のサビの部分では、老いた父親の姿、父親の血を受け継いだ作者の人生が歌われる。

The leader of the band is tired / And his eyes are growing old
But his blood runs through my instrument / And his song is in my soul
My life is a poor attempt / To imitate the man
I'm just a living legacy / To the leader of the band

バンド・リーダーは疲れ / 目には老いが浮かぶ
その血は僕の楽器に流れ / 歌は僕の魂に宿る
人生をかけて / 及ばずながら那人を真似てきた
僕はただの生きた遺産 / バンドー・リーダーの

年老いたバンド・リーダーへの労わりが歌われ、自分はやはり父の子供であるという偽らざる気持ちが表出される。最後の一行、特に 'a living legacy' の三語に、父親があつてこそその自分であるという気持ちが込められていて、聴く者の琴線に触れる。作者自身が齡

を重ねたからこそ出てくることばである。

My brothers' lives were different / For they heard another call
One went to Chicago / And the other to St. Paul
And I'm in Colorado / When I'm not in some hotel
Living out this life I've chosen / And come to know so well

I thank you for the music / And your stories of the road
I thank you for the freedom / When it came my time to go
I thank you for the kindness / And the times when you got tough
And papa, I don't think I said / 'I love you' near enough

兄弟は違う道を歩んだ / 別の職業に就くために
ひとりはシカゴに行き / もうひとりはセント・ポールに
僕はコロラドにいる / ホテル住まいじゃないときには
自分が選び、そしてなじむようになった道を歩いている

音楽とツアーハ話に 感謝しているよ
家を出るときに認めてくれたことに 感謝しているよ
優しくしてくれたこと 厳しくしてくれたことに 感謝しているよ
でも、とうさん、「大好きだよ」ってまだ言い足りないよ

二人の兄弟は、おそらく勤め人の道を選びそれぞれ別の地で暮らしている。一方、自由な道を選んだ作者は歌手として成功を収め、普段は自然の懐に抱かれて暮らしている。次の連の四行は父親への感謝の気持ちを素直に伝える。そして、“The leader of the band” の部分が繰り返されて歌は終わる。

ダン・フォーゲルバーグにとって、父親は音楽家として乗り越えるべき目標であった。“Longer” という曲で全米のヒットチャート第二位を獲得した事実が示すように、功成り名を遂げた彼は、世間的な意味では父親を超えていたに違いない。にもかかわらず、父親の後を追ってきただけで、一演奏者、一歌手として自分は父親に及ばないと語っているところが、作者の父への深い尊敬と愛情を感じさせる。

V. 未来の旧友たち

若者もやがては老いを迎える。今や先進国に暮らす人々は、「社会の高齢化」という人類史上初の問題に直面している。老人の占める割合が増えるにつれて、否応もなく彼らの存在を感じるようになる。年を取るとはどういうことなのか、そのとき人はどんな心情を抱くのだろうか。今は元気な若者も数十年後に必ず当事者となる。

サイモンとガーファンクルのアルバム『ブックエンド(BOOKENDS)』の一曲目から七曲目（レコードのA面）は、生まれてから老いてゆくという人の一生がテーマとして貫かれている。「旧友(Old Friends)」⁽⁵⁾は公園で見かけた二人の老人の姿を歌ったものである。

音を削ぎ落としたギターと弦の伴奏に合わせて歌が始まる。

Old Friends / Old Friends

Sat on their park bench / Like bookends

A newspaper blown through the grass

Falls on the round toes / On the high shoes / Of the old friends

Old friends / Winter companions / The old men

Lost in their overcoats / Waiting for the sunset

The sounds of the city / Sifting through trees

Settle like dust / On the shoulders / Of the old friends

昔からの友 / 年老いた友たち

ブックエンドのように / 公園のベンチに腰掛けている

芝生の上に新聞が吹きとばされて

丸いつま先に舞い落ちる / 踵の高い靴の / 年老いた友の

昔からの友と / 冬をともに過ごす / 老人たち

コートに埋もれるようにして / 日暮れを待つ

街のざわめきが / 木々から零れ落ち

塵のように積もる / その両肩に / 年老いた友の

『詩歌を楽しむ・サイモンとガーファンクルの歌詞を読む』のテキストを読むと、この歌詞を書いたポール・サイモンの大学での専攻は英文学（つまり国文学）であり、学生時代には詩を好んで読んだと書かれている。高校生だったころにサイモンとガーファンクルの歌を繰り返し聞いたが、彼らの歌は他の歌手の歌とは違うなとは感じていた。使われている単語が難しく、例えば、“The Sound of Silence”（「沈黙の響き（？）」）という曲名が示すように、歌われている内容も深い気がした。歳を重ねてからあらためてその歌詞を読んでみると、鑑賞に堪える内容であることが実感できる。

『旧友』の老人二人は、冬の公園にこれという目的もなくやってきた。少し離れて二人腰掛ける様が、「ブックエンド」のようだと詩人は描写する。老人の靴の爪先に寒風に飛ばされた新聞紙がひつかかる。“winter companions”という語句に、人生の冬と季節の冬が重なり、さらには黄昏時という時間帯が「終わり」を重層的に表している。遠くから聞こえてくる街のざわめきが、かえって静かに佇む二人の姿の寂しさを引き立てる。

Can you imagine us / Years from today

Sharing a park bench quietly?

How terribly strange / To be seventy?

Old friends

Memories brushes the same year / Silently sharing the same fear

今から何歳も老いた二人を想像できるかい
静かに公園のベンチを分け合うその姿を
あまりにかけ離れているよ 七十歳になるなんて

年老いた友は
歳月に想い出を塗り重ね / 無言で恐れを分かち合う

自分とかけ離れた境遇は想像力によって思い描くしかない。3行目の‘strange’は「不思議な」ではなく「未知の」「経験のない」という意味だ。過ぎ去ったことばかりが去来し、ことばもなく恐れながら老いを迎えるその姿を、当時まだ二十代半ばだったポール・サイモンが巧みに表現している。大衆音楽の歌詞を超えて、文学としての奥行きを感じさせる。

もちろん、十代の若者にこの情景や心情を実感せよというのは無理なことである。しかし物理的に身近な存在になりつつある老人の日常や心情を知る手立てとなるこの歌詞を読めば、精神的にも若者と老人の距離は縮まるのではないだろうか。

VII. 風が伝えるもの

教科書を一冊、無作為に手に取り目次に目を通す。すると必ずや環境問題を扱った課が見つかる。それほど環境問題は誰しもが、私たちが集団として、個人として意識し、そして取り組まねばならない課題であろう。実際に今まで読んできた教科書からも容易に環境についての記述を見つけることができる。

今は発行されていない *RACOON ENGLISH COURSE II* (筑摩書房) の第14課は“THE SACRED LAND”という題であり、ネイティヴ・アメリカンの首長であるシアトルが米国大統領に宛てて書いた手紙が抜粋されている。“How can you buy or sell the sky, the warmth of the land? The idea is strange to us.”という書き出しで始まるこの文章は、今から150年も前に自然と人との共生を訴えたものである。例えばこのシアトル、すなわちアメリカ先住民の思想を読み終わってから、かけてみたい曲がある。

1995年にウォルト・ディズニー社は『ポカホンタス』という動画を製作した。主人公はアメリカの先住民パウアタン族の首長の娘ポカホンタスである。17世紀初頭、ジェームズ・タウンへの入植者であるジョン・スミスと結婚したこの女性の生涯を描いた物語のために書き下ろされたのが、“Colors Of The Wind”⁽⁶⁾である。

「インディアン」たちの太鼓を思わせる静かで単調なリズムに重ねて、自分は何でも知っていて、先住民を劣った人種だと決め付ける、白人の考えに対する問い合わせからこの歌は始まる。

You think I'm an ignorant savage / And you've been to so many places
I guess it must be so / But still I cannot see
If the savage one is me / How can there be so much that you don't know?
You don't know

あなたとて私は無知な野蛮人なのでしょう
たくさんの場所を訪ねてきたあなたには / きっとそうなのでしょう
でも、私にはわからない / もしこの私が野蛮人ならば
どうしてあなたの知らないことが / こんなにもたくさんあるのでしょうか

知識も経験もある白人に向かって、何も知らない野蛮人とみなされている先住民の若い娘が、素朴な疑問をぶつけている。あなたは海を越え様々な土地を訪れることで、知恵の得たのかと。そして、美しい旋律の展開を予期させる管弦楽器の伴奏が続く。

You think you own whatever land you land on
The earth is just a dead thing you can claim
But I know every rock and tree and creature
Has a life, has a spirit, has a name

You think the only people who are people
Are the people who look and think like you
But if you walk the footsteps of a stranger
You'll learn things you never knew, you never knew

あなたはこう考えるのですね / 足を踏み入れた土地は自分のものだと
地球はあなたのもので命を持たないものだと
でも岩や木々や生き物たちにはみな / 命があり、魂があり、名前があるのです

自分と同じ姿、同じ考え方のものだけが / 人間だとあなたは思っているのですね
でも見知らぬ人の足跡をたどれば / 初めて知ることがあるでしょう

大地は自分のものと主張する白人の考え方は自己中心的で傲慢である。森羅万象に命が宿することを娘は親から教えられた。二つの考え方対立し、衝突しているのが入植の始まりばかりの新大陸（そもそもこの呼び名が白人の都合で使われている）である。娘は一つの考えに囚われ、それだけが正しいと思い込んでいる相手に向かい、実際に足を踏み入れることで自然を知って欲しいと訴える。

Have you ever heard the wolf cry to the blue corn moon
Or ask the grinning bobcat why he grinned?
Can you sing with all the voices of the mountain?
Can you paint with all the colors of the wind?
Can you paint with all the colors of the wind?

狼が吠える月に向かって吼える声を / 聞いたことがありますか
山猫が歯をむき出して笑う訳を / 尋ねたことがありますか

山の音に合わせて歌えますか / 風の色の絵の具を使って描けますか

やがて力強い声が、大地に住む獣の遠吠えを聞き、笑い声を上げる訳を尋ね、山の声を聞いたことがあるのですかと問い合わせます。自然界のすべてのものに命があるという教えを伝えながら、論すように歌う優しい声が、「風の色の絵の具を使って描く」ことを、象徴的な解決策として提示するのである。

Come run the hidden pine trails of the forest
Come taste the sun-sweet berries of the earth
Come roll in all the riches all around you
And for once, never wonder what they're worth

The rainstorm and the river are my brothers
The heron and the otter are my friends
And we are all connected to each other
In a circle, in a hoop that never ends

How high does the sycamore grow?
If you cut it down, then you'll never know

松の茂る抜け道を走り抜けてください
陽を浴びて甘くなった木の実を味わってください
あなたを取り囲む恵みの中を転げまわってください
一度だけでいい / それをお金に置き換えるのを止めてください

嵐や川は私の兄弟 / アオサギやカワウソは私の友
すべてのものはつながりあっています / 終わることのない輪のように

鈴懸けの木はどこまで高く育つのでしょうか
伐ってしまえば、それは分からぬのです

ポカホンタスはあなたに対して自然の懷に飛び込んで、それを直に感じて欲しいと願っている。自然を家族とみなしがとする教えを説きながら、人を含めた自然の大いなる円環が語られる。そして、どこまでも育つ木々の成長を無理に終わらせてしまう愚行への嘆きが、一気に上昇した後に、ゆるやかに下降する旋律によって歌われる。それは自然を利用すべきものとみなし、結果として破壊に導く人間の活動への戒めでもある。

And you'll never hear the wolf cry to the blue corn moon
For whether we are white or copper-skinned
We need to sing with all the voices of the mountain

Need to paint with all the colors of the wind
You can own the earth and still
All you'll own is earth until
You can paint with all the colors of the wind

でも、狼が吠える月に向かって吼える声は / あなたの耳に届かないのでしょうか
肌の色が白い人も、褐色の人もみな / 山の音に合わせて歌わねばなりません
風の色の絵の具を使って描かねばなりません
大地を自分のものにできても / それはただの土
あなたが風の色を使って絵を描けるまでは

大海原を渡って未知の土地に上陸し、彼の地の自然を征服すべきものと考え、自分たちの都合に合わせ都市を建設してきたのが、西欧人を中心とした大航海時代以降の人類史の大きな流れである。その流れに抗うように、自然と人間との共生を祖先から引き継いで来た生き方として訴えたのがアメリカの先住民たちであった。残念ながら、金銭を伸立ちとする経済活動が「新大陸」を蹂躪し、先住民たちの叡智が捻りつぶされてしまったことを私たちは知っている。環境破壊が世界のどこかで進行している現在、自然との共生を説くこの歌を聴くたびに、風の息吹を感じる感性の大切さを実感するのである。

VII. 繰り返される愚行

戦争もまた、教科書でしばしば取り上げられる題材である。特に、第二次世界大戦は多くの国を巻き込み、尋常ならざる大規模な戦争であったため、史実として伝えられ、物語として描かれてきた。しかし、第二次世界大戦後も世界のどこかで戦争は起こってきた。

1964年8月、トンキン湾事件を機に本格的にアメリカが兵力を投入するようになり、ベトナム戦争は激化の一途をたどる。それに呼応するかのように若者たちの間に反戦の気運が高まり、連邦政府の政策に抗議の声を上げるようになる。反戦歌は彼らが自分たちの主張を訴える手段の一つだった。アメリカのフォーク・ソング運動の中心的人物であったピート・シーガーが、1956年にウクライナの民謡をもとに改作した『花はどこへ行ったの (Where Have All The Flowers Gone)』^⑦は、やさしいことばに反戦への強い思いが込められた歌である。1962年にキングストン・トリオがヒットさせ、他にピーター・ポール・アンド・マリーやプラザーズ・フォアラも歌った、この時代を代表する曲である。

使われている英語はとても分かりやすく、単語の意味を調べればある程度英語を勉強した段階でもおよその意味をとることが出来る。いくつか異なる歌詞があるのだが、ここではキングストン・トリオが歌ったものを取り上げて、鑑賞することにしよう。

Where have all the flowers gone? / Long time passing
Where have all the flowers gone? / Long time ago
Where have all the flowers gone?
Young girls have picked them everyone
When will they ever learn? / When will they ever learn?

花はどこへ行ったの / 長い年月が流れた
花はどこへ行ったの / ずっと遠い昔に
花はどこへ行ったの / 若い娘が摘んでいった。
いつになつたら悟るのだろう / いつになつたら悟るのだろう

ここでの「花」は平時、つまり平和なひとときの象徴である。その花が消えてしまい、今は存在しない。消えたのはずっと昔のことである。「花」から始まった歌は、「若い娘」「若者」「兵士」「墓地」と引き継がれ、そのどれもが目の前から消えてゆく。

Where have all the young girls gone? / Long time passing
Where have all the young girls gone? / Long time ago
Where have all the young girls gone?
Gone to young men everyone
When will they ever learn? / When will they ever learn?

Where have all the young men gone? / Long time passing
Where have all the young men gone? / Long time ago
Where have all the young men gone?
Gone to soldiers everyone
When will they ever learn? / When will they ever learn?

Where have all the soldiers gone? / Long time passing
Where have all the soldiers gone? / Long time ago
Where have all the soldiers gone?
Gone to graveyards everyone
When will they ever learn? / When will they ever learn?

Where have all the graveyards gone? / Long time passing
Where have all the graveyards gone? / Long time ago
Where have all the graveyards gone?
Gone to flowers everyone
When will they ever learn? / When will they ever learn?

あえて訳す必要もない平明なことばで歌われるこの歌は、「墓地」を埋める「花」へと、歌い始めに回帰する。悲しくも、その円環はいつ果てるともなく繰り返される。

1975年、ようやくベトナム戦争は終結したが、その後も世界のどこかで戦が起こり、地球規模で見ると平時は存在したことがない。『花はどこに行ったの』が訴えるように、戦いの連鎖は時と場所を違え、永遠に続くようである。21世紀になっても繰り返される愚行を知る私たちの心に、美しい旋律に包まれた反戦の思いは半世紀を経ても突き刺さる。その「心の痛み」こそが消えてしまう時代は、一体いつになれば訪れるのだろう。

VIII. 利己的な支配者

この章では1971年にヒットした曲調の全く異なる二つの曲を取り上げよう。一曲目は『嘆きのインディアン (Indian Reservation: The Lament of The Cherokee Reservation Indian)』⁽⁸⁾、二曲目が『ブラック・アンド・ホワイト』⁽⁹⁾である。

マーク・リンゼイとレイダースがヒットさせた『嘆きのインディアン』は、アメリカの先住民を主題にしている。当時『ソルジャー・ブルー』というアメリカ映画が話題になっていた。1864年にコロラド民兵隊がシャイアン族のテント村を襲い、女子供、そして老人までが見境なく虐殺された史実を真正面から映像化した衝撃的な映画だった。中学生だった私はテレビで放映していた予告編を見たに過ぎなかったが、もっぱら悪役として西部劇に登場していたインディアンが白人から酷い仕打ちを受けていたことを初めて知った。そんな時代背景の中でラジオの電波にのって流れてきたのがこの歌である。

耳をつんざくような高音の出だしが終わると、主として打楽器による規則的な律動に重ねて、チェロキー族に加えられた不当な行いが語られ始める。

They took the whole Cherokee nation / Put us on this reservation
Took away our ways of life / The tomahawk and the bow and knife
Took away our native tongue / And taught their English to our young
And all the beads we made by hand / Are nowadays made in Japan

Cherokee people / Cherokee tribe
So proud to live, so proud to die

奴らはチェロキーの国を根こそぎにし / 俺たちをこの保留地に押し込んだ
奴らは俺たちの生き方を奪った / 斧や弓や短刀までも
部族のことばを奪い / 若者に英語を教えた
手作りだった飾り珠は / 今や日本製だ

チェロキーの民よ チェロキーの部族よ
誇り高く生き 誇り高く死に行く

ここで ‘nation’ という単語が使われているのが意外であるが、『物語アメリカの歴史』によると、18世紀半ば彼らの元々の居住地ではチェロキー語で新聞が発行され、裁判所があり、議員も選ばれていて、国家としての体制が整っていた。しかし、連邦政府という白人たちの統治機構の都合により、遙か西へと強制的に移動させられたのである。そうした部族の歴史が抑揚を抑えた旋律で静かに語られたかと思うと、“Cherokee people!” の叫び声で怒りが爆発する。再び、抑えた声で先住民全体の過去と現在が語られる。

They took the whole Indian nation / Locked up on this reservation
Though I wear s shirt and tie / I'm still part a red man deep inside
Cherokee people / Cherokee tribe

So proud to live, so proud to die

But maybe, someday when they've learned
The Cherokee nation will return
Will return, will return, will return

奴らはインディアンの国を根絶やしにし / 俺たちをこの保留地に閉じ込めた
ワイシャツを着てネクタイを結んでも / 体の奥には祖先の血が流れている

チェロキーの民よ チェロキーの部族よ
誇り高く生き 誇り高く死に行く

やがては、奴らは思い知ることだろう
チェロキーの国が甦ることを
甦る 甦る 甦る 甦る

二度目の絶叫の後、歌は再び抑え気味になったかと思うと、'will return' の二語が疊み掛けるように繰り返され、呪詛と宿願が重なりあつたチェロキー族の訴えで終わる。ハモンドオルガンが滅び行く部族の悲劇を哀切な旋律で締めくくる。

自分たちが元々住んでいた土地から追われることは、21世紀の今も進行形で起こっている。慣れ親しんできた生活習慣やことばまで奪われること。それは人として生きる権利を侵害する。ポカホンタスの時代から一世紀以上を経ても、身勝手な侵略者たちの横暴な行いは改まらず、誇り高き部族の文化は絶滅寸前にまで追い込まれてしまう。さらに、白人たちの不当で酷い行いは、後に大陸に連れて来られた黒人たちにも及んだ。

1972年、坊主頭（これも人権の侵害？）の中学生だった筆者は一枚のシングル盤を購入した。当時、人気があったスリー・ドッグ・ナイトが歌う楽しげな曲をラジオで聞いて気に入ったからだ。その歌は全米のヒット・チャートで一位になるほど大ヒットした。歌詞カードを見てもその内容に意識が及ばず、弾むような音の響きだけを聞いていた。

この歌の重要性を私が認識したのは、レコードを買ってから四十年後の2012年のことである。その年の春、私は生徒らの海外研修の付き添いでワシントンにある自然史博物館を訪問した。見学の折に売店に行くと、スミソニアン協会が編集したCDが数種類並んでいた。その時に購入した一枚“CLASSIC FOLK MUSIC”は、1940年代から1960年代にかけて歌われた代表的なフォーク・ソングを集めたもので、19曲目が“BLACK AND WHITE”となっていた。もしやと思って日本に戻ってからその曲を聞いてみると、一部の歌詞は異なったが、スリー・ドッグ・ナイトが歌ったものと同一の曲だった。

そこで、スリー・ドッグ・ナイトのCDの解説を読みなおしてみた。そして、この曲が1955年に書かれたこと、そのきっかけが前年の連邦最高裁判所による公立学校での人種隔離を違憲とした歴史的判決であったことを知った。この歴史的な背景を踏まえて聴きかえすと、十代半ばに聞いた明るくて楽しい歌が、米国史において極めて重要な出来事を歌っているのだと、その内容が重く響いた。読解力ではなく理解力の深まりが、歌という

定點によって観測出来たことが一つの発見であった。

改めて歌詞をたどると、学校における人種融合をるべき姿、実際の歌詞では「美しい光景」と表現している。黒人の子供と白人の子供が机を並べて、インクで文字を綴り、ページに刷られた文字を読んでいる教室の風景が目に浮かぶ。読み書きを通じて日々成長した彼らは様々なことが「分かるようになる(see the light)」のである。肌の色が違う子供たちが楽しそうに踊っている姿は何と美しいのだろう。この歌は、1950年の半ばアメリカの社会で胎動しつつあった変化を、世界に向けて誇らしく歌っていたのだ。

The ink is black, the page is white
Together we learn to read and write
A child is black, a child is white
The whole world looks upon the sight / A beautiful sight

And now a child can understand
That this is the law of all the land / All the land

The world is black, the world is white
It turns by day and then by night
A child is black, a child is white
Together they grow to see the light / To see the light

And now at last we plainly see
They'll have a dance of liberty / Liberty

The world is black, the world is white
It turns by day and then by night
A child is black, a child is white
The whole world looks upon the sight / A beautiful sight

歌を理解するとは、音楽的な美しさを心で感じるとともに、歌い手が伝えようとしている思いを胸に受け止めることでもある。ふたつがそろったときに初めて、本当にその歌を鑑賞したことになる。『嘆きのインディアン』と『ブラック・アンド・ホワイト』という別個の歌を歴史的背景を手がかりにして掘り下げる、民族や個人の人として生きる権利という根本問題に突き当たる。その時、時空に広がる歌の可能性を聞き手は知ることだろう。

IX. 「我が人生」を振り返れば

人が生きていく上で、見本となるような人生を歩む人たちがいる。いわゆる‘role models’である。様々な分野で人々の記憶に残るような仕事を為した人物が、教科書では取り上げられることが多い。もちろん音楽家たちもその一団に含まれる。

20世紀の音楽の歴史に燐然と輝く足跡を残したのが、ザ・ビートルズである。リーダー格であったジョン・レノンの生涯はその結末が衝撃的であっただけに、読み物の題材としてしばしば取り上げられる。生前に彼の身に起こったこと、彼の考え方や心情が綴られた文章を読んだ後に、本人が創作した歌に耳を傾けるのは必然的な取り合わせだ。そのとき、どこかで耳にしたことのある歌が聞き手の心の深くにまで届く。

“In My Life”⁽¹⁰⁾は、ジョン・レノンが25歳のときに作った名曲である。彼は四十年の短い生涯において、親しい人との別離にたびたび遭遇しなければならなかつた。音楽を教えてくれた母のジュリア、美術学校の親友スチュアート・サトクリフ、敏腕マネージャーのブライアン・エプスタイン。そして、それに終止符を打つのが彼自身のあまりに唐突な死だった。そんなジョンの劇的な人生を俯瞰しながら聴くと、新しい出逢いを歌うこの歌が悲壯な美しさを帯びてくる。

ビートルズの楽曲の創作秘話を集めた“A HARD DAY'S WRITE”にはこう書かれている。ジョン・レノンがこの曲のために最初に書いた歌詞は、故郷であるリバーピールの地名が次々出てくる個人的な回想であった。それでは余りにも退屈な歌になってしまふので、地名を織り込むのを止めて、普遍的で広がりのあるものに作り直した。苦労した甲斐あって、作者が‘first real major piece of work’と自負できる歌が完成した。

この章では、あまりに有名な歌の内容を吟味するより、どのように味わうかを考える。“George Martin: In My Life”という他の歌手たちが歌うビートルズの楽曲を集めたアルバムが発売されていて、“In My Life”が最後の曲として収録されている。ただし演奏者がショーン・コネリーとなっている。(ちなみに、スコットランド出身の名優は、『小説家を見つけたら』で老作家役として渋い演技を披露している。) しゃがれた声で歌うのだろうかと曲を聴いてみると、なんとピアノと弦の伴奏に合わせた歌詞の朗読なのだ。

そこで一計を案じた。歌ではなく朗読も一つの手段ではないかと。曲に合わせて歌おう言つても、思春期の若者はボソボソと歌うだけである。であるなら、朗読してはどうか。普通の音読では興味に欠けるので歌のない演奏を流す。そうすれば、歌詞の一行一行を旋律に合わせるために(ショーン・コネリーはそうしている)、強弱のリズムや音の連結をする必要が生じて、自然な読みの訓練になる。

かくして朗読の授業を試みたのだが、8年ほど前のことなので、記憶を頼りに改めて手順を考えた。まずは曲を聴いてみよう。(この歌に限つて、歌詞の和訳は内田久美子氏の素晴らしい労作を大いに参考にした。)

There are places I'll remember / All my life, though some have changed
Some forever, not for better / Some have gone and some remain

All these places had their moments / With lovers and friends I still can recall
Some are dead and some are living / In my life I've loved them all

But of all these friends and lovers / There is no one compares with you
And these memories lose their meaning / When I think of love as something new

Though I know I'll never lose affection / For people and things that went before
I know I'll often stop and think about them / In my life I love you more

生涯忘れ得ぬ場所がある / 当時の面影をとどめない場所や
良くも悪くも永遠に変わらぬ場所 / 今はもうない場所や昔と変わらぬ場所

かつてそうした場所で / 恋人や友人といっしょに過ごした
今は亡き人や元気でいる人 / みんな僕がこの人生で愛した人たち

けれども今までの友人や恋人も / 君とはくらべようもない
君との新しい愛を思うとき / 過去の思い出は色あせる

僕の前を通り過ぎた人や出来事を / 懐かしむ気持ちは変わらない
ときに立ち止まつては思い出すだろう / 今はこの人生で何よりも君を愛している

全員でこの歌詞を一度音読した後で、個別に練習をする。次にショーン・コネリーの登場である。今から聞く朗読の見本について、少し遅らせながら読んでみよう提案する。音楽に統いて朗読が始まる。調子者の生徒はわざと低い声で読むだろう。そして、授業の最後に音楽を流しながら朗読大会をすることを宣言し、個人練習の時間を与える。二人一組でも練習する。もう一度曲について全体練習をしてから、何人かを指名する。（“Any volunteers?”と有志を募るのもよい）その後、誰の朗読がよかったかを聴衆の拍手で判定する。動機付けとして、お手製のピートルズ精選曲集CDを賞品にするのも一案である。

もちろん、別の歌手の伝記であってもこの授業展開は可能である。本文の読み後、「取り合せ」としてその歌手の代表曲を紹介する。演奏だけの音源さえ見つかれば、さまざまな歌の朗読が楽しめるに違いない。

X. 複眼的思考のすすめ

昨今は英詩を扱った教材がないと嘆いていたら、詩について書かれた文章を次年度から採用される教科書で見つけた。*UNICORN English Communication II*（文英堂）の第12課“Reading a Poem”である。英国の詩人フィリップ・ラーキンの講義から成る本文を読み進めて行くと、文学について述べている件で、“the human world is full of ambiguous, ironical and paradoxical things”と書かれた箇所に目が止まった。さらに講義の中では、自作の“At Grass”が解説されている。その詩は競走馬を主題としたもので、かつての華やかな栄光と、その後に訪れた穏やかな日々が描かれている。

この一課を読んだ後で紹介すべき歌がある。まさに ‘paradoxical things’ の二語を歌った『青春の光と影 (Both Sides Now)』⁽¹¹⁾という曲である。この歌は、筆者が高校生だった頃から好きだったこともあり、授業でも何度かかけたことがある。ジュディ・コリンズが軽快な編曲に乗せて歌った流行歌であるが、作者のジョニ・ミッケルがギター一本の伴奏でしみじみと歌っている自演のものがよい。カナダ生まれの才媛が1969年に創作した歌詞と、筆者が趣味で訳した和訳を並べてみよう。

Rows and flows of angel hair / And ice cream castles in the air
And feathered canyons everywhere / I've looked at clouds that way
But now they only block the sun / They rain and snow on everyone
So many things I would have done / But clouds got in my way

I've look at clouds from both sides now / From up and down and still somehow
It's clouds' illusion I recall / I really don't know clouds at all

Moons and Junes and Ferris Wheels / The dizzy dancing way you feel
When every fairy tale comes real / I've look at love that way
But it's just another show / You leave them laughing when you go
And if you care, don't let them know / Don't give yourself away

I've look at love from both sides now / From give and take and still somehow
It's love's illusion I recall / I really don't know love at all

Tears and fears and feeling proud / To say I love you right out aloud
Dreams and schemes and circus crowds / I've look at life that way
But now old friends are acting strange
They shake their heads / They say I've changed
Well, something's lost / Something's gained / In living every day

I've look at life from both sides now / From win and lose and still somehow
It's life's illusion I recall / I really don't know life at all

幾重にもなびく天使の髪 / 空に浮かんだアイスクリームのお城
四方に広がる羽の谷 / 今までそんなふうに雲を見てきた
でも今は、その雲は太陽をさえぎるだけで / みんなに雨や雪を降らす
出来たかも知れないたくさんのことを / 雲が邪魔をした

私は両側から雲の姿をみた / 上からと下からと でもどうしてなのか
思い出すのは雲の幻だけ / 私は雲のことを少しも分かっていない

月と6月と観覧車 / 目がクラクラするような踊り
おとぎ話がすべて実現する / 今までそんなふうに愛を見てきた
でも今は、それが別のものに見える / 去りゆくものは笑い物にされるから
気にしているのを悟られてはいけない / 自分をさらけ出してはいけない
私は両側から愛を見た / 与える愛、奪う愛 でもどうしてなのか
思い出すのは愛の幻だけ / 私は愛のことを少しも分かっていない

涙と恐れと誇らしい気持 / 「大好きだ」ときっぱり言うこと
いくつもの夢と計画とサーカスの人込み / 私は人生をそのように見てきた
でも今は、前からの友人のふるまいが分からぬ
彼らは首を横に振り / 「君が変わったのだ」と言う
そう、何かが失われ何かが得られる / 日々の暮らしの中で

私は両側から人生を見てきた / 勝者の人生、敗者の人生 でもどうしてなのか
思い出すのは人生の幻だけ / 私は人生のことを少しも分かっていない

実は、三年間教え続けて2013年3月に卒業した生徒たちとの最後の授業で、この歌を紹介した。そして、卒業式当日に発行した英語通信最終号に掲載した‘My Favorite Songs’というコラムでこの曲を解説した。ここでは鑑賞に代えてそのコラムを引用する。

十代の後半、ラジオは新しい英語の歌を知る貴重な媒体だった。‘Both Sides Now’（邦題は『青春の光と影』）の旋律を知ったのは、よく聞いていた音楽番組で主題曲として使われていたからだ。ある時、別の曲を聴きたくて買ったブラザース・フォアのレコードをかけていたら、なじみの旋律が流れてきた。

Rows and flows of angel hair / Ice cream castles in the air
Feather canyons everywhere / I've looked at clouds that way

その時、歌の題が‘Both Sides Now’であることを知った。歌詞を読むと、「幾重にもうねる天使の髪」「空に浮かんだアイスクリームのお城」「四方に広がる羽の谷」のように、雲は好ましいものとして肯定的に描写されている。一転して、次の部分では雲が「よくないもの」として否定的に表現されている。

But now they only block the sun / They rain and snow on everyone
So many things I would have done / But clouds got in my way

雲は太陽を遮り、自分が出来たかもしれないことを邪魔する。題が表す如くものごとには両面がある。

I've looked at clouds from both sides now / From up and down and still somehow
It's clouds' illusion I recall / I really don't know clouds at all

上からそして下から見てきたけれど、結局は「雲」が何であるか私には全くわからないという。さらに先を読むと、2番はloveを‘give and take’から、3番はlifeを‘win and lose’から見てきたと歌われる。作者であるジョニ・ミッケルの歌詞は大衆音楽の水準を超えて、英詩に決して劣らない。

実はCDの時代になってから初めて彼女の歌を聞いた。ブラザース・フォアの歌を聞いていた頃から20年ほど後のことだ。その後15年ほどの間に何度も聴いたその曲を紹介しようと最後の授業で聴いていて、三番の歌詞の最後の部分の繰り返しが、「I've looked at life from both sides now from up and down」と一回目と異なることにふと気がついた。「勝者と敗者の人生」が「浮き沈みのある人生」と変換されているではないか！

学校では、英語学習用に洋楽が授業で紹介されることが多い。自分自身好きな歌を繰り返し聴いて語彙を身につけ定型表現を覚えた。しかし‘Both Sides Now’のように、あるいは高二のときに紹介した同じ作者の‘The Circle Game’のように、さらには‘The Dangling Conversation’のように、活字で読んでも充分鑑賞に耐える英語の歌の詞がある。

教科書においてさえ英詩に触れることがなくなった現在、優れた作家による詩は英詩に親しむ貴重な媒体である。教室で聞いた歌を伝承されるべき文化として覚えておいて欲しい。

天の下に存在するいかなるものにも善悪両面がある。白黒をはっきりさせるのはある意味で楽なことだが、その事物や現象を本当に理解したことにはならない。分かったはずのものが、また分からなくなったりする。どちらがいいのか判断できないことも多々ある。外国语の学習は、世界を見るもう一つの物指しを手にすることである。一つの発想に別の発想を「取り合わせる」ことで、より適切な解が見つかるかもしれない。「複眼的思考のすすめ」という筆者のささやかな願いを、このコラムに込めたつもりである。

XI. 旅が授ける知恵

2013年4月から現行の学習指導要領に沿った授業が始まった。本年度は二年生と三年生を教えているので、私自身は新しい教科書を未だ使っていない。大幅に内容が変わった教科書のうちの一冊PRO-VISION English Communication I(桐原書店)を読んでいたら、第一課に沢木耕太郎のエッセイが出ていた。こよなく旅を愛する作者は、人生において何が大切であるかを鋭い視点からの確に述べている。少し長くなるが引用する。

For me, travel serves as a school. I believe that any place is a school if you can learn something there. When you are traveling, you see things you've never seen before and face situations you've never experienced before. Sometimes they appear in the form of difficulties you've never imagined. But as you try to cope with them, you learn something, one step at a time.

You are taught many important things at school. They provide the ABCs of your life. But there's something else, and I believe it is equally important. We could call this the “power to survive” —in other words, the ability to get along in the world. It's the wisdom that helps you in unfamiliar situations when you come across them. The only way to acquire this ability is to have many experiences of all kinds of schools. Many of them, of course, don't go by the

name of "school."

No textbook can show you how to develop the "power to survive." You have to go out into the world and write your own textbook.

私たちが何かを学ぶのは学校だけではない。家庭や社会の教育力が低下した今、そのあまりにも当たり前のことが忘れられている。ここに書かれた沢木耕太郎の持論は彼の体験に裏打ちされた確かなものだ。「若者よ、旅に出よ。そして生きる力 (the power to survive) を自力で獲得せよ。君の足跡が君だけの教科書になるのだ」と。

授業でこの文章を読んだなら、その後に紹介したいのが 'THE DRIFTER'⁽¹²⁾ だ。作詞・作曲は数々の名曲（例えば、カーベンターズの『愛のプレリュード』）を作ったロジャー・ニコルズとポール・ウィリアムズの二人組、ロジャー・ニコルズとその仲間たちが歌っている。1969年に発表された作品なのだが、私自身は五年ほど前にリメイクされたもので知った。長く生きていると、以前に知るべきであった名曲に遅ればせながら出会える。

弾むようなピアノに、シンバルとベースがからむ。そしてドラムが重なると、軽やかな歌が流れ始める。

Once again there's a feeling inside of me / Nothing new / I've felt it before
Like the voice of a hunger inside of me / Crying out there's got to be more

I'll put faith in the arms of an open road / And you can come along if you choose

'Cause there's a place / That I've never been to
Sunsets to be ridden into / Not a lot I can do but give into
The drifter (drifter) / There's a drifter in me (drifter)

また胸騒ぎがしてきた / 忘れていたあの気持ち
心の声が何かを求めるように / まだ知らないことがあると叫んでいる

遮るものなく広がっている道を信じよう / よかったらついておいでよ

だって、行ったことのない土地があるし
向かって行く夕陽がある / 身を任せてこそ叶うことがある
漂泊者が住んでいる / 僕の心の中に

同じことの繰り返しが私たちの日常だ。凡人はそれを受け入れて毎日を過ごす。時に当てもない長旅に出たくなる衝動に駆られても、「漂泊者」を心の中に閉じ込めて置く。しかし、心の声に従って旅に出る人がいる。『深夜特急』で二十六歳の「私」がユーラシア大陸横断の一人旅に出たように。旅の空に重なり合う声に悲壮感はない。

Though I've tried it I'm just not a settler / And nine to five don't make it with me

Why deny it, it makes me feel better / To come alive and prove that I'm free

I wear no chains and I carry no heavy load / So much to gain and nothing to lose

努力したけど、ひと所にはいられない / 9時から5時は性に合わない
だから止めにしよう / 自由になると生き返ったようで 気分は上々だ

束縛もないし 重荷もない / 得るものは多く 失うものはない

この後 "Cause there's a place / That I've never been to" 以下の部分が繰り返されフェイド・アウトする。沢木耕太郎の文章がそうであるように、この歌は私たちを目的地を持たない長旅へと誘う。社会に出て勤め人になるとそんな贅沢はできない。だからこそ、若いうちに線路の敷かれていらない旅に出ることが貴重な体験になる。日々訪れる土地が学舎であり、出会う人たちが師になるのだ。旅という非日常で得た「生きる力」(「何とかするんだという気概」)は、日常で起こるに違いない困難を切り抜ける知恵になるだろう。

XII. 人生という風景

新しい世紀を迎えてから、すでに15年近くが過ぎようとしている。気がついてみれば、私たちの暮らしはゆとりが出来るどころか、通信技術の発達により手にした瞬時のやりとりが、わずかな余白までをも埋めてゆく。(まさに「光と影」だ!) そんな息苦しい日常に風穴をあけて清涼な息吹を送るもの。立ち止まってしばし人生について考えさせてくれるもの。それが歌であり、旋律に乗せて歌い手が運ぶ、私たちへの伝言である。

『小説家を見つけたら』の終幕、ジャマールは作品が認められて文筆で身を立てる決心をし、フォレスターは遺作となる二冊目の小説を書き上げる。世代も境遇も異なる二人が「知り合う」ことで夢が現実になる。だからこそ、『虹の彼方に』の歌詞が心に響く。

Somewhere over the rainbow / Way up high

And the dream that you dare to

Why, oh why can't I?

如何に生きるべきかという「問い合わせ」に、そう簡単に「答え」は見つからない。生きるとは、その時点では到達点の見えない道を選び、一歩ずつ歩を進めてゆくことなのだろう。時を置いて聞き返し、鑑賞することのできる歌は、人生という風景の展望地(a lookout)である。しばし歩を止めて振り返れば、踏破した稜線が来し方に向かって延びている。

<注>

- (1) Over The Rainbow (H. Arlen / E. Y. Harburg)
- (2) What A Wonderful World (G. D. Weiss / G. Douglas)
- (3) Doesn't Somebody Want to be Wanted (Wes Farrell / Jim Cretecos / Mike Appel)
- (4) Leader of the Band (Dan Fogelberg)
- (5) Old Friends (Paul Simon)
- (6) Colors of the Wind (Stephen Schwartz / Alan Menken)
- (7) Where Have All the Flowers Gone (Pete Seeger)
- (8) Indian Reservation (Loudermilk)
- (9) Black and White (D. Arkin / E. Robinson)
- (10) In My Life (Lennon-McCartney)
- (11) Both Sides Now (Joni Mitchell)
- (12) The Drifter (Paul Williams / Roger Nichols)

<参考文献>

C.D. LEWIS "POETRY FOR YOU" (NAU-UN-DO) (1954)
Steve Turner "A HARD DAY'S WRITE" (CARLTON) (1994)

MAINSTREAM II B The New English Reading Course (増進堂) (1990)
RACOON ENGLISH COURSE II (筑摩書房) (1992)
UNICORN English Communication II (文英堂) (2013)
PRO-VISION English Communication I (桐原書店) (2012)

長谷川櫻『俳句の生活』(中公新書) (2004)
小林章夫『英語の詩を読んでみよう』(NHK出版) (2007)
飯野友幸『詩歌を楽しむ・サイモンとガーファンクルの歌詞を読む』(NHK出版) (2013)
猿谷要『物語アメリカの歴史』(中公新書) (1991)
内田久美子訳『ビートルズ訳詞集』(ソニー・ミュージックパブリッシング) (2000)
沢木耕太郎『深夜特急』(新潮文庫) (1994)

Popular Songs to Appreciate in English Classes

ITO Yoichi

Abstract

This paper is a study on English popular songs as a means of having some idea of what the world and our lives are like. The lyrics of popular songs can be a food for thought because they help us give consideration to serious matters around us. In addition, they are excellent enough to take the place of English poems, which are not read as often as before in English textbooks. These are the reasons which have inspired me to study the words of English songs.

Topics such as adolescent distresses, environmental problems, wars, human rights, etc. are easily found in English textbooks. Interestingly these themes are expressed in some popular songs as well. The chemistry of a story and a song on the same topic can lead us to a better understanding of the topic.

The analysis and appreciation of ten popular songs which I repeatedly listened to at home and occasionally played in English classes illustrates that one can realize the significance of a specific issue when a song and a story on the subject are put together.

During my teaching career, I have tried to spare some time to introduce a good song every once in a while so that a teacher and learners can share an opportunity to stop and think about their lives and the world around them. A little learning from this experience could encourage younger generations to be interested in popular songs, which I hope will be an impetus for them to enjoy studying English on their own.

Key Words: English songs, lyrics, appreciation

平成 25 年度 教科・個人研究テーマ一覧表

国語科	「読み」の力を育てる授業	井村 有里 松永 茂 森中 敏行 山中 智香子	研究史を組み込んだ授業の展開 高校化学教育における実験指導について ELISAを活用した実習教材の開発 中・高生に身近な題材で化学の魅力を伝える授業、実験指導について
榎本 陽子 山川 美和 山根 雅子 神徳 圭二 中野 信行 能登 敦子 宮川 康	伝えることで深める読みの力 創作活動につなげる読みを深める授業 表現活動をとり入れた読みの授業 豊かな読みを導く言語活動の開発 「読みの力」を育てるための言語的アプローチ 文法・表現に基づく読みの力を得させる授業 大阪の近・現代文学の教材化	音楽科 藤原 優美 美術科 首藤 友子	幅広い音楽体験を通して、技術の向上と愛好する心情を養う 感性、知識を結びつけ、表現する技術を身に付ける 多様な表現と鑑賞を通じたオリジナリティの追求 コンセプトのある表現活動と視点を考えた鑑賞教育
社会科	社会科における「リテラシー」の探求	保健体育科	思考力・判断力・表現力を育む体育活動
射手矢 明 井原 武人 住田 調平 生川 年雄 浦崎 裕太 甲山 和美 笹川 裕史	時代を大観する授業の構築 生徒が主体となるリテラシー教育について ICTを活用したリテラシー教育について 近現代史における歴史認識と資料の活用 高校地理教育におけるフィールドワークの可能性 「公正」「正義」に迫る公民科の授業 ジェンダーを意識させる世界史教育	鎌田 剛史 繆 尚樹 奥間 梢 武井 浩平 松田 光弘 養護科 甲斐 真奈美 升谷 田津子	ネット型スポーツの授業について 主観と客観の違いから捉える体育の授業 主体的な学習活動を促す教師の言葉がけ 体育授業におけるインクルーシブ教育の試み コミュニケーション能力の育成を重視したダンス授業 中高一貫における危機管理 学校危機管理について ～学習から実践へ～
数学科	活用力を育てる授業	技術・家庭科 上田 学 古川 ルミ 英語科 篠崎 文哉 永田 忍 吉田 雅子 浅田 英美	新・学習指導要領に即した授業開発 社会的効力感の高まる授業 家庭科における言語活動の充実を図った授業づくり 音声を核にして四領域を統合した活動をめざす授業 発音とプロソディの改善を目指した音読指導 リーディングを基にした自己表現能力の育成 output活動につながる語彙活動 音読による英語運用能力育成
理科	授業評価に有効な、定期考查出題法の研究	飯尾 力 石井 敦子 伊藤 洋一 日根野 敬也	音声・文法両面での表現の能力の育成 自力での読解・学ぶ力の育成 既習事項を生かしたライティングの指導 ディスカッション→ライティングの指導法
印南 航 廣瀬 明浩 細谷 智美 井上 広文	継続した小テストにおける文章表現能力の向上 小中高を見通した理科の教材検討 理論づけて考察することへの習慣化と表現力の向上 科学的言語力のトレーニングを、論理的思考力につなげる試み		

あとがき

1. 2013年度の動向

中高ともに新学習指導要領が完全実施（中学校は平成24年度に完全実施）されたことに伴い、ここ数年の新指導要領に対応した先鋭的な研究および実践の成果を発表することを目的として、研究会の全体テーマを「教科指導法の深化と醸成～指導要領に沿った指導法の工夫と改善～」と定めた。これを受け11月初旬に、国語科、数学科、理科、美術科、保健体育科が公開授業と研究発表を行った。学校の全体テーマおよび教科の研究テーマとともに、研究会参加者の支持を受けた。

校内的には全教員が少なくとも1回の公開授業を行った。教員の人事異動が頻繁に行われるようになった環境で、相互に授業を公開・見学する場面は、教科指導の考え方や技術を交流するという観点で非常に重要である。

2. 第60回教育研究会に関して

開催日：2013年11月9日（土）

参会者：300名

全体テーマ：「教科指導法の深化と醸成」

～指導要領に沿った指導法の工夫と改善～

発表教科の概要

国語科 研究主題 「読み」の力を育てる授業

授業I 中3 「おくの細道」を読み、味わう	榎本 陽子
授業II 高1 『伊勢物語』を通して古典の世界に接近する	神徳 圭二
指導講師 大阪教育大学准教授	住田 勝 先生
司 会 本校教諭	宮川 康

数学科

研究主題 『概念・観念を豊かに築いて基礎を固める発展学習』

授業I 中1 空間思考を刺戟する素地学習	莉木 聰
授業II 高2 微分と積分－微積分の基本定理をめぐって－	松山 克則
指導講師 香川大学教授	風間 喜美江 先生
大阪教育大学教授	瀬尾 祐貴
司 会 本校教諭	岩瀬 謙一

理科

研究主題 新学習指導要領と理科（化学）教育の深化

授業I 中3 「銅を題材にした化合と和解」	山中 智香子
授業II 高2 「気体の捕集」	松永 茂
指導講師 大阪教育大学准教授	堀 一繁 先生
司 会 大阪教育大学附属高等学校池田校舎	吉村 勇治 先生

美術科

研究主題 授業の中でのタブレット型端末の活用

授業Ⅰ 中2 画像編集アプリで伝える観賞体験

首藤 友子

授業Ⅱ 中1 タブレット型端末アプリを使って伝統色を見つけ風景画を描く

首藤 友子

指導講師 大阪教育大学准教授

佐藤 賢司 先生

司 会 大阪教育大学附属天王寺小学校

那賀 典仁 先生

保健体育科

研究主題 スポーツの特性を引き出す体育指導

授業Ⅰ 中1 「ダンス：現代的なリズムのダンス」

～仲間とともに『できる』が実感できる男子のダンス授業～

松田 光弘

授業Ⅱ 高1 「球技（ネット型：テニス）」

～バレーボールの発想でのテニス指導～

鎌田 剛史

指導講師 大阪教育大学教授

入口 豊 先生

大阪教育大学講師

井上 功一 先生

司 会 本校教諭

武井 浩平

講演

「地球外生命がいると考えるわけ」

広島大学大学院 生物圏科学研究科准教授

長沼 毅氏

(記：廣瀬 明浩)

研究集録 第56集

平成26年3月 17 日印刷

平成26年3月 20 日発行

大阪市天王寺区南河堀町4-88

編集発行者 大阪教育大学附属天王寺中学校

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

代表者 赤松喜久

印刷所 有限会社 ヤシキプリント